263
104

野澤正浩
友納友次郎 共著

卷三

修正尋常小學讀本教授細案

東京 目黒書店發兌

始

263.2
104

野澤正浩
友納友次郎 共著

卷三

修正

尋常小學讀本教授細案

東京 目黒書店發兌

263.2-104

野澤正浩
友納友次郎 共著

卷三

修正 尋常小學讀本教授細案

8 3. 1
内交

東京 目黒書店發兌

修正尋常小學讀本教授細案 巻三

目次

總說……一

本書編纂の特色……一

讀本內容の概觀……二

各說……一〇

第一　サクラ……一〇

第二　コレガスンデカラ……一四

第三　ワラビトリ……二六

第四　オミヤ……四六

第五　わたくしのうち……五七

第六　八ちやうじらう……六七

第七　なぞ……六八
第八　ひばり……八七
第九　小うま……九九
第十　牛と馬……一〇九
第十一　のみのすくね……一二三
第十二　タケ……一三五
第十三　田うゑ……一四八
第十四　ホタル……一六〇
第十五　うとからす……一七三
第十六　おちよのへんじ……一八二
第十七　大キナカブ……一八九
第十八　かへる……一九七
第十九　かへるとくも……二〇八
第二十　ミギトヒダリ……二一七
第二十一　四方……二二七

第二十二　手のゆび……二三三
第二十三　蟲ぼし……二四二
第二十四　アリ……二五二
第二十五　がくかうの門……二六一
第二十六　うみ……二六九
第二十七　馬ヌスビト……二七九
第二十八　にはかあめ……二九〇
第二十九　うらしま太郎(一)……三〇〇
第三十　うらしま太郎(二)……三〇〇
いろは……三一四

目次終

修正尋常小學讀本教授細案 卷三

友納友次郎
野澤正浩 共著

總說

本書編纂の特色

本書は修正尋常小學讀本卷三を教授するに當り、教師の參考に供せんがために編纂したものである。

本書は先づ教材の要旨を明かにし、次に教材を記載し、次に其の教材の區分を適切に定め、次に教具を詳記し、次に此の教材は如何にして取扱ふべきかを、其の教材の性質・要求に應じて、國語教授の思潮・經驗等に顧みて、最も穩健に詳述し、教材の運轉活用に對して、其の指針を與へ、毎時に於ける教授の實際例をも添加して、專ら讀本教授の本領發揮に努めた。最後に備考として教材の内

容に關し最も必要と認めるものを掲載して教授者の參考に提供した。

讀本內容の概觀

教材研究卽ち讀本の內容調査は讀本教授上に於ける根本的要件である。教材の程度・分量を知り、精神・要求を捉へ、教授の方針、態度を定めるには、一に此の內容調査に俟たなければならぬ。若し此の調査にして不十分ならんか、如何に方法に巧みでも、それより得る效果の極めて小なることは言ふまでもない。故に修正せられた本卷の內容を示すことは、此の根本的要求に對して、忠實なる態度の表現である。併し玆に精しく示すことは事情の許さぬ所もあるから、左に修正趣意書に基き、最も留意すべき諸點を抄錄して參考に供することにする。

一、分量の增加　我が國の讀本は之を西洋諸國の讀本に比べると、分量に於て餘程の懸隔がある。これは漢字教授といふ特別な厄介物があるからである。從つて分量の增加に對しては餘程顧慮しなければならぬ。編者は地方の實情に問ひ、尙多少增加の餘地あることを認め、約二割の增加を試みてある。併し此の增加は多く練習文の上に表はれてゐるから、之がため新に兒童の負擔を重くしたと言ふ憂がない。編者の精神は之により多讀の機會を多く與へ、知識の擴充を圖り、讀書趣味の養成に資しようといふのである。故に實際教授の際はよく此の精神を酌んで有效に授ける所なくてはならぬ、

二、文字の提出　本卷に於ては平假名全部、新漢字五十五、讀替漢字十三提出してある。平假名全部の提出は第一課から第九課に亙つて居るが、初め四課に於ては假名の全部を片假名とし、適當なる語を摘出して平假名を當て、第五課以後は假名はすべて平假名を用ひ、其の間に未習の平假名數個づつ提出してある。而して第一課より第四課に至る文章の末尾に既習平假名の練習として、單語・句・短文を記し、第九課の終りに平假名五十音圖を掲げ之が全體を總括してある。而して平假名提出中は新漢字は一も提出せぬ方針になつて居る。今新出漢字及び讀替漢字を示せば次の如くである。

新出漢字表

課／卷	卷	二卷	三卷	課／卷	卷	二卷	三卷
一	日			七	犬 水		
二	人			八			
三	大 口			九	木 小 土		
四				一〇	火 一	手 馬 力	
五	月			一一	上 中 下	名 見	
六	川 山			一二	石 田	私 竹 作	

讀替漢字表

卷／課	卷二	卷三
1		
2		小
3		二人
4		上
5		人 下 一人
6		
7		
8		
9		
10		大
11		中 子
12		
13		
14	月 日	
15		
16		今年
17		
18	年	
19		
20		
21		
22		
23		今日 太
24		
25		
26		
27		人
28		
29		
30		
合	3	13

課	頁	讀み方	注意	課	頁	讀み方	注意
一三				二二	三三	正本	
一四	一五	子女		二三		内赤色古	
一五	一六	目耳		二四			
一六	一七	天		二五		門友	
一七	一八	米足年		二六		舟行貝	
一八		虫思又		二七		買賣爾生主	
十九		白太花		二八		青雨戸車夕	
二〇	二一	入		二九			
二一	二二	手	東西南北	三〇	三三	父母	
合計							

漢字讀み方の注意

課	頁	讀み方	注意	課	頁	讀み方	注意
三	七	二人。		一五	四二	川の中。出て。	
四	一一	上り下り。		一五	四三	水の中。川の中。	
五	一三	二人。一人。		一六	四五	今年。	
五	一四	一人。		一七	四六	二人。一人	
六	一七	人人。		一八	四九	思ひ出した。	
七	二〇	中。	中は卷四第十八課に始る。	一八	五〇	水の中。	
八	二一	上りました。上つて。		一八	五一	水の中。	
八	二二	下りません。上る。		一八	五二	水の中。	
九	二三	すの中。		二〇	五五	左ノ方。	
一〇	三〇	大。	大は後に提出せず。	二〇	五六	右ノ方。	方は第四卷第一課に始る
一一	三一	日本中。一人。	中は後に提出せず	二一	五七	方。	
一二	三二	私。		二二	五八	三郎。	
一二	三五	竹馬。		二三	六一	今日。	
一三	三七	田の中。		二三	六三	この中。	
一三	三八	小ぐさ。		二四	六四	水の下。カキネノ方。	
一四	三九	川の上。小タラカ。		二五	六七	今日。	
一四	四〇	タカク上ツテ。		二五	六八	今日。出る。	

二六	68	今日。	
二六	70	行く。あの中。	口語文にてはすべて「イク」と讀ませたり。
二七	71	馬の中。	
二七	76	大セイ。主人。	
二八	77	ふり出した。大雨。雨戸。のきの下。	雨は讀替として特に提出せず。
二八	79	雨やどり。夕日。東の方。	
二九	80	大ぜい。	
二九	82	うみの中。	
三〇	37	一人。中から。	

三、教材の選擇　分量の增加に伴ひ、教材も自然に增加したから其の選擇も自ら多方面に亙つて居る。修正の一般的方針上からは、

1. 兒童の日常生活に關するもの、
2. 田園趣味を養成すべきもの、
3. 理科及び實業に關するもの、
4. 經濟及び公民の心得に關するもの、
5. 國勢の現狀、世界の事情に通ぜしむべきもの、

等の方面から特に增加するの計畫が立ててある。今新に加へられたるもの改作されたるもの、練習文に屬するものを揭げれば次の如くである。

課	題目	課	題目	課	題目
一	○サクラ	一一	のみのすくれ	二一	四方
二	コレガスンデカラ	一二	タケ	二二	◎手のゆび
三	◎アラビトリ	一三	*田うゑ	二三	虫ぼし
四	◎オミヤ	一四	○ホタル	二四	◎アリ*
五	わたくしのうち	一五	うとからす	二五	◎がくかうの門
六	◎八ちやうじらう	一六	◎おちよのへんじ	二六	○うみ
七	なぞ	一七	◎大キナカブ	二七	◎馬ぬすびと
八	ひばり	一八	かへる	二八	◎にはかあめ
九	小うま	一九	*かへるとくも	二九	*うらしま太郎
一〇	牛と馬	二〇	ミギトヒダリ	三〇	*うらしま太郎

【注意】　○は改作　◎は新材料　*は練習材料

以上について見ると、本卷は餘程舊態を改め、面目を新にして居ることがわかる。取扱ふ上に餘程工夫を要すると同時に、是等の新しい特色を捉へて教授することは新來の愉快でもある。而して右教材中童話・寓話・傳說等にして、其の出典のあるものは次の如くである。

第六課　八町次郎　平家物語。
錢引　平家物語。
總說　讀本內容の概觀

第十一課　野見宿禰　日本書紀。
第十五課　鵜と烏　古諺に據る。
第十七課　大キイ蕪　獨逸讀本數種に出でたる「大キナキヤベヅ」に據る。
第十九課　蛙と蜘蛛　蛙は小野道風の古傳說に採る。蜘蛛は蘇國王ブルースの逸事。英國讀本數種に出づ。
第廿課　右ト左　士卒剛腦の座を分つ事。奥州後三年記序文に見ゆ。
第廿七課　馬盜人　獨逸讀本數種に出づ。
第廿九課　浦島太郎　童話
第三十課　同　同

である。是等の課の內容は是等の出典に依つて、十分調査し、其の精神要求を捉へ、以て實質的方面の陶冶を全うしなければならぬ。

四、挿繪、挿繪については、舊讀本は兎角是非の批評があつたが修正讀本は之に顧み、大に改善を施してある。卽ち

1. 兒童の性情に顧み、一層活動的に描いたこと。
2. 洋畫風を加味して新趣を添へたこと。
3. 印刷術の進步を利用して、濃淡を分ち、色彩を施すことの出來ぬ缺點を補つたこと。

等は大に注目すべき點である。

要するに本卷は形式上から見ても、內容上から見ても舊卷に比し、幾多の特色と價値とを表はして居る。實際敎授に當つては、それ等の點をよく諒知し、編者の精神のある所を察し、以て本書の要求を十分發揮するやう努力しなければならぬ。

各說

第一　サクラ

要旨

本課は長堤萬里に咲亂れてゐる櫻。杉の木立の間から見えるお宮の櫻。學校の門前にある枝垂櫻の散る所を捉へ來て文にしたのである。教授に於ては本文に於ける、新文字・新語句の讀み方・意味及び語法等を授けて、之が讀解に習熟させると共に櫻咲く春郊の美景、風に散る風情等を感味せしめ、傍ら國民性の啓發に資するを以て要旨とする。

教材

コノ　二三日　ノ　アタタカサ　デ、サクラ　ノ　ハナ　ガ　ミゴト　ニ　サキマシタ。
一ペン　キレイナ　ノ　ハ　ツツミ　ノ　サクラ　デス。花　ガ　ドコ　マデ　モ　サキツヅイテ、トホク　カラ　ミル　ト、白イ　マク　ヲ　ハツタ　ヤウ　デス。
オミヤ　ノ　モリ　ノ　スギ　ノ　木　ノ　アヒダ　カラ、白イ　花　ガ　チラチラ　ミエル　ノ　モ、ウツクシウ　ゴザイマス。
ガクカウ　ノ　モン　ノ　ワキ　ノ　シダレザクラ　ハ、モウ　一ヒラ　二ヒラ　チリハウメマシタ。カラ　ノ　二三本ハ　ヤハザクラ　デ、マダ　サキマセン。
（新平假名）　さくら　しろい　うち

（練習平假名）　いし　くさ　うし　くろい　くらい
（注意）　文字の傍らに引きたる線は假名にあつては已習假名、漢字にあつては讀替文字とする。以下之に倣ふ。

補習文

イマ　ハ
イマ　ハ　サクラ　ヤ　ナタネ　ノ　花ザカリ　デス。テフテフ　ハ　ハナ　カラ　花　ヘ　ヒラヒラト　マヒ、ハチ　ハ　セツセト　ミツ　ヲ　アツメテ　キマス。
ミチバタ　ニハ　スミレ　ヤ　タンポポ　ガ　サイテ　キル　シ、ムギバタケ　ノ　上　ニハ　アサ　ハヤク　カラヒバリ　ガ　サヘヅツテ　キマス。
カセ　モ　アタタカ　デ、オモテ　デ　アソブ　ニ　ハ　一ペン　ヨイ　トキ　デス。（尋常小學國語讀本卷三）

區分

第一時　第一・二節（自一頁始行至二頁三行）に於ける形式及び内容の教授。

第二時　第三節（自二頁四行至三頁二行）に於ける形式及び內容の教授。

第三時　全文復習及び平假名教授。

第四時　練習應用及び補習文の讀解。

教具

櫻の實物。挿繪を擴大したる掛圖。

教法

（甲）教授上の注意

一、本課は舊讀本卷三第一課にあつた「サクラ」の文章を改作して玆に載せたものである。挿繪も洋畫風に描き改められ、櫻の花が爛漫と咲き亂れて居る光景が鮮かに表はれて居る。櫻は我が國の名花で、大人にも子供にも親しみの深い花である。それに四月といふ學年始めは丁度この花の咲く頃であるから、之を卷頭に置いたといふことは頗る當を得て居る。兒童の眼前の直觀と交渉して內容を玩味させることが出來るから甚だ便利である。

二、本課に於ける教授の主眼點は、麗かな春の日に櫻の花が爛漫と咲き亂れ、野も山も都も鄙も、美しく潤色されて居る所の光景に觸れさせるのに存する。從つて櫻の形態・種類・用途などに關する知識はほんの從屬的の考で輕く授ける。卽ち知的啓發でなく、美感の養成に重きを置くのである。

三、形態・種類・效用等の知識に關しては實物の直觀又は掛圖の觀察と交渉して、大體次の範圍程度で授ける。

形態—花は五瓣で數花簇り咲く。色は普通淡紅色である。一重・八重等種々ある。三四月頃開く。

種類—山櫻・彼岸櫻・枝垂櫻・八重櫻等ある。

效用—堤上に、街側に、神社・佛閣の境內に、公園に、各自の庭園等に植ゑて其の妍雅な姿を愛賞する。

四、文字・語句等については、大體次に示す範圍・程度に從ひ、平易に說明して之が讀み方、意義等を確實に知らしめる。

「サクラ」—三四月花開く。五瓣で淡紅色。一重八重等種々ある。我が國の名花で爛漫と咲き亂れた姿は何ともいへぬ美觀である。

「コノ二三日ノアタタカサデ」—日麗かに風和かなる春の氣分をよく味はさせる。

「サクラノ花ガミゴトニサキマシタ」—二三日の暖氣で一時に咲き揃ひ、互に其の妍雅を競ひ居る所をよく味はさせる。

「ツツミ」―言海に「水を包みて溢れしめぬ意。或は言ふ土積の約」とある。土を長く高く築いて水の流れを止めるもの。土手ともいふ。

「花ガドコマデモサキツヅイテ」―長き堤上に萬株の櫻が今を盛りと咲き亂れて居る其の美しい光景をよく想像させる。

「白イマクヲハツタヤウデス」―「マク」は實物を見せるか、或は繪畫で示すか、或は神社などに張つてあつたといふ過去の記憶を想起させて、其の觀念を明かにするがよい。本當を言へば「マク」といふ言葉は一般からいつて兒童には親しみが少ない。これよりも彼等が日常直觀して居る霞又は雲などの自然物を以て比喩とする方がよい。即ち「白イクモガカカツタヤウデス」とか或は「カスミガカカツタヤウデス」とかする方が遙によい。兎に角此處では掛圖と提携して、長い堤の上に萬株の櫻が今を盛りと咲き亂れ、之を遠方から眺めると、丁度白い幕が張つてあるやうで、本當に捨て難き情趣のあることをよく味はさせる。

「オミヤノモリ」―鎮守の杜につき實際に直觀させる。若しできない場合には、繪畫を示し野の中、山の上にこももりと茂つて居る有樣を想像させる。

「チラチラ」―いくつの意味もあるが茲では點々と見えるの意味に取扱ふがよい。

「スギノ木ノアヒダカラ、白イ花ガチラチラトミエルノモ、ウツクシウゴザイマス」―綠濃き老杉の間から、淡紅にして清楚な櫻花が點々見え、紅綠相映じて如何にも美しい所をよく味はさせる。

「シダレザクラ」―形態等について細かに說く必要はない。實物又は繪畫により之は枝垂櫻といふことを直覺的に知らしめ、花に對する美感を惹き起すやうに取扱つてよい。「ヤヘザクラ」についても同樣である。

「モウ一ヒラニヒラチリハジメマシタ」―花の盛りが過ぎて一片二片風に誘はれて散る風情をよく味はさせる。落花の寂寞を感ぜさせるも考の一つであるが、大人と子供とは心理が違ふから茲では專ら落花の美を味はさせることにする。

「ウラノ二三本ハヤヘザクラデ、マダサキマセン」―「ウラ」は蓋し學校の後庭をいふのであらう。茲では後庭にある八重櫻はまだ花咲かねども、遠からぬ內に若葉の腋から淡紅にして清楚な姿を現はすことを知らしめ、それを樂しく待つ心を誘ひ起すがよい。

五、本課からは平假名を始めて敎へることになつてゐるが、之は全文の練習應用の場合に其の讀み方と書き方とを知らしめることにする。また本文の終の所にある「いし」「くさ」「うし」「くろい」「くらい」は上欄にある「さくら」「しろい」「うら」を授けた後之が應用として讀ましめ又書かしめる。

六、語法等の上からは、

「キレイナノハ」―「ノ」は花を意味する助詞。　「一ヒラ二ヒラ」―數詞。　『「チラチラ」―副詞で次の「ミエル」の意を限定する。　「白イマクヲハツタヤウデス」―比喩。　「チラチラミエルノモ」「一ヒラ二ヒラチリハジメマシタ」―共に副詞的修飾語を用ひ、文に美しい彩を添へてあること。

等は注意して授ける。

七、本文は四節から出來て居る。第一節は此の二三日の暖氣で櫻の花が一面に咲き揃つたことにつき記述してある。第二節は長堤にある萬株の櫻が一時に咲き亂れ、互に妍雅を競うて居る其の美しい光景を遠方から眺めて記述してある。第三節は鎭守の杉の杜の間から櫻の花がちら〳〵と見える其の清艶な光景を、程隔てた處から眺めて記述してある。第四節は校門の側にある枝垂櫻はもう花の盛りがすんで、一片二片散りはじめた所、及び學校の後庭にある八重櫻はまだ花が咲かないといふことを間近から眺めて記述してある。宛然一枚の油繪を見るが如き誠に奇麗な感じがする。本文の作者は子供であつて、其の位置は固定して居る。卽ち學校が小高い所にあつて、一人の子供が其の運動場の一隅に立つて求心的に眺めた光景になつて居る。故に兒童も其の位置にあらしめて、過去の經驗の想起と、現在の直觀と交渉して本文の境地をよく感味させるがよい。

八、本課に於て習得した文字・語句等は可成多方面に練習又は應用して、それ等の意義・用法に習熟させる。其の方法としては書取法・塡充法・誤正法・短文作爲法等を用ひる。

書取法とは讀本にある語句又は文章。或はその語句又は文形を應用して創作したる語句又は文章を口唱して兒童に書取らしめ、後之を讀ましめて、書寫力の發達、讀方の練熟及び應用的能力の發達に資するのである。

塡充法とは缺所ある文を提示し、之を適當な語句によつて塡充し、完全な一文となさしめるのである。一には言語の選擇に對し、二には綴文力の修練に對し、效果を收めようとするのである。

誤正法とは誤つた語句・文章又は假名遣を口唱又は書板し、之を兒童をして批正させ、其の習得をして一層確實ならしめようとするにある。

短文作爲とは適用すべき語句を與へて、兒童をして創作的に短文を綴らしめ、兒童の想像力を練り、應用力の練磨を圖らうとするのである。しかし之は優等生に可能なるも、其の他の兒童には困難である。故に其の他の兒童に對しては內容を與へて綴らしめる方法を執るがよい。（以下之に倣ふ）

九、練習應用例

(一)平假名の練習

「サクラ」「シロイ」「ウラノサクラ」「シロイ花」「イシ」「クサ」「クロイ」「クライ」……等。

(注意)　以上を平假名にて書き表はしめる。

(二)語句の適用(短文作爲)

「二三日」―ウラノヤヘザクラハ二三日タツタラサキマセカ。

「ミゴト」―ガクカウノモンノマヘノシダレザクラハ、ミゴトニサキソロヒマシタ。

「一パンキレイナノハ」―花ノウチデ一パンキレイナノハ、サクラデス。

「トホクカラミルト」―ヤマニサイテキルサクラノ花ヲ、トホクカラミルト、白イクモガカカツタヤウデス。

「チラチラ」―モリノアヒダカラ、ヒガチラチラトミエマス。

「チリハジメマシタ」―ニハノサクラノ花ガ一ヒラ二ヒラチリハジメマシタ。

「マダサキマセン」―カキノハナハマダサキマセン。

(三)假名遣(誤正法)

「トホク」「マクチハツタヤウデス」「アヒダ」「ミエル」「サツクシウゴザイマス」「ガクカウ」「チリハジメマシタ」……等。

(乙)教授の實際

第一時

一、實物及び掛圖の觀察

(1)掛圖を示して、堤の上にも鎭守の杜の中にも、學校の門の側にも、櫻の花が美しく咲いて居る有樣を觀察させ、(2)同時に櫻の實物をも示して、簡短に形態・種類・效用等に關する知識を整理する。

二、豫習

目的を告げて讀本を開かしめ、自由に一・二回讀ましめて、大意を捉へさせる。

三、語句等の教授

豫習した後、主要の語句・語法等につき問答し、其の意義・用法及び職能等を明かにする。

四、讀方練習

各節に、また纏めて五六の兒童に讀ましめる。

五、內容の玩味

先づ第一節に於ける內容を適切な問答の下に玩味させ、後敎師の玩味する所を話して一層深く味はさせる。第二節も同樣。

六、朗讀

個人的にまた一齊的に。(朗讀の際、音聲の緩急、言語の明否等につき十分批正する。以下も之に倣ふ。)

七、練習應用

假名遣（誤正法）

「トホク」「ハツタヤウデス」…等。

語句の適用

(一)塡充

(1)ナノハナノキイロクサイテキルノチ、トホクカラミルト、……。

(2)ウミノアチアチシテ、キルノチ、ヤマノウヘカラミルト、……。

(二)短文作爲。

「ミゴトニ」「一バン」「ドコマデモ」「サキツヅイテ」……等。

第二時

一、復習

前に習つた所を形式・內容の兩方面に亙り其の要點につき復習する。

二、豫習

各自をして自由に一・二回讀ましめ其の大意を捉へさせる。

三、語句等の教授

豫習したる後、語句・語法等につき問答し、其の意義・職能等を明かにする。

四、讀方練習

各節に、また纏めて五六の兒童に讀ましめる。

五、內容の玩味

第三節に於ける內容を適切な問答の下に玩味させ、後敎師の玩味する所を話して一層深く味はさせる。第四節も同樣。

六、朗讀

個人的に、また一齊的に。

七、練習應用

語句の適用

(一)塡充

(1)ニハノモモノハナガソロソロ○○○○○マシタ。

(2)モリノアヒダカラ、チヤウチンノヒガ○○○○トミヘマス。

(二)短文作爲

「チラチラ」「チリハジメマシタ」「マダ」「モウ」……等。

假名遣（誤正法又書取法）

「アヒダ」「ミエル」「ウツクシウ」「ガクカウ」「チリハジメマシタ」「ヤヘザクラ」…等。

名說　第一　サクラ

第三時

一、全文の復習

1. 各節毎に讀ましめる。　2. 語句及び各節の內容につき問答。　3 全文を讀ましめる。　4. 語法假名遣につき問答。

二、平假名の教授

片假名と對照して次の平假名の書き方・讀み方を授ける。

「さくら」「しろい」「うら」

次の語を口唱し之を平假名にて表記させる。

「いし」「くさ」「うし」「くろい」「くらい」(各內容を簡短に話す)

三、話方の修練

掛圖を見て、各自知る所、感ずる所を自由に發表させる(話術につき指導)

第四時

一、全文の復習

1. 此の二三日の暖さで櫻の花がどうなりました。それは讀本のどこにどう書いてありますか。讀んでごらん。
2. 櫻の花の一ばん奇麗に咲いてゐる所はどこですか。どんな風に咲いてゐますか。それは讀本のどこにどう書いてありますか。讀んでごらん。
3. お宮の森の間から櫻の花がどんな風に見えて居りますか。それは讀本のどこにどう書いてありますか。讀んでごらん。
4. 學校の門の側の枝垂櫻はどうなりはじめましたか。裏の八重櫻は。それは讀本のどこにどう書いてありますか。讀んでごらん。

二、練習應用。

(一)文形の應用。

(1)……チトホクカラミルト、……。

(2)……ノアヒダカラ、……ミエルノモ、カツクシウゴザイマス。

(二)口唱書取

(1)ガクカウノウンドウバノサクラガ一ヒラ二ヒラチリハジメマシタ。チヤウドユキガフルヤウデス。

(2)ガクカウノウラノニハニアルヤヘザクラハイマガチヤウドハナザカリデス。

三、補習文の讀解

1. 各自をして一讀させる。　2. 語句及び文の內容につき問答。　3. 朗讀(個人的に一齊的に)。

(注意)　讀書力の增進を圖るため、讀書趣味を養ふため、彼等の既に習ひ得た國語の力を以て、讀むことの出來る補習文を作爲して讀ましめることは頗るよいことである。私共は此の方にも力を注いで見たいと言ふ考から、適當な所に適當な補習文を加へることにした。而して之が取扱は豫め塗板に書いて置き、之を提出して讀ましめるか。(二)或は謄寫版で謄寫したものを各自に渡して讀ましめるか。(三)或は教師が口唱して書取らしめ、それを讀ましめるかする。(以下も之に倣ふ)

備考

各説　第一　サクラ

櫻

櫻は薔薇科に屬する落葉喬木である。葉は楕圓形で、緣は細き鋸齒狀をなして居る。花は五瓣で、色は大概淡紅色である。三四月頃開き、滿開の時は頗る艶麗である。種類には山櫻・八重櫻・彼岸櫻・牡丹櫻・枝垂櫻等種々ある。山櫻は山野に自生し、花瓣は一重である。大和の吉野山・京都の嵐山等は此の櫻である。八重櫻は其の花八重で、これには多くの種類がある。牡丹櫻は八重櫻の一種で花の形大きく、八重櫻よりも遲く咲く。彼岸櫻は最も早く開く。枝垂櫻は絲櫻とも言ひ、枝垂柳の如く、其の枝は下に垂れ一入の風情がある。

櫻は花の美を賞する外に、其の幹は實緻密で堅く、色も淡赤色で美しいから、盆・椀・菓子入・定木等諸種の器具類をつくる。皮は濃褐色を帶び、印籠・煙草入等をつくるに用ひる。葉は鹽漬として餅を包むに用ひる、所謂櫻餅といふのは之である。花も亦鹽漬として湯に點じ、櫻湯と稱して之を飲む。實は酒に釀し、或は鹽漬として食し、又生にても食する。

櫻の名所は全國到る所にあるも、就中吉野山を第一とし、…上野・向島・飛鳥山・小金井等も名高い。又京都の嵐山、仙臺の躑躅が岡も有名である。

櫻は我が國の國花として世界に誇るに足る花である。爛漫と咲き亂れて、山を埋め、谷に滿ちた時、遙に眺めると、雲の如く雪の如く見えて、實に奇麗である。

吉野山霞の奥は知られねども見ゆる限りは櫻なりけり。（八田知紀）

櫻よりまさる花なき花なればあだし草木はものならなくに。（紀貫之）

敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山櫻花。（本居宣長）

花の雲、鐘は上野か淺草か。（芭蕉）

第二　コレガ　スンデ　カラ

要旨

本文は花笑ひ鳥歌ふ長閑なる春の日に、櫻の花と小鳥とが正雄を誘うて外に遊ばうとせしも、正雄は斷然是等の誘惑を退けて、專心に復習し、之が終つてから友達と共に山野に行き愉快に遊びしことを內容として擬人的に記述したのである。從つて教授に於てはこれが讀解に習熟させるは無論、之を通じて復習の大切なること。及び復習終つて後愉快に遊ぶべきことを勸奬し、傍ら春の美景に觸れさせるを以て要旨とする。

教材

ハル　ノ　アタタカナ　日　ニ　マサチ　ガ　本　チ　ヨンデ　キマシタ。　ウツクシイ　花　ガ　マド　ノ　ソト　カラ

「マサチ　サン、ノ　ニモ　山　ニモ　ヲタクシ　ドモ　ノ　ナカマ　ガ　タクサン　サイテ　キマス。ミ　ニ　イラッシ

ヤイ。」

マサチ　ハ　ミムキ　モ　シナイデ

「コレ　ガ　スンデ　カラ。」

コンド　ハ　ウツクシイ　小トリ　ガ

「マサチ　サン、ソンナ　ニ　ウチ　ニ　バカリ　キナイデ　チット　ソト　ヘ　オイデ　ナサイ。イッショ　ニ　カタ

チ　ウタヒマセウ。」

マサチ　ハ　ヤッパリ　ミムキ　モ　シナイデ

「コレ　ガ　スンデ　カラ。」

各說　第二　コレガスンデカラ

スコシ　タツテ　オサラヒ　ガ　スミマシタ。ソコ　ヘ　トモダチ　ガ　サソヒ　ニ　キマシタ　カラ　ヨロコンデ　イツシ
ヨ　ニ　山　ヘ　アソビ　ニ　イキマシタ。

（新平假名）はる　の　小とり　やま
（練習平假名）「いと　と　はり」「うま　と　くるま」「はやし　の　木」「木　の　は」

區分

第一時　第一節（自三頁五行至四頁終行）に於ける形式及び內容の敎授。

第二時　第二、三節（自五頁始行至六頁三行）に於ける形式及び內容の敎授。

第三時　全文の復習及び平假名の敎授。

第四時　練習應用。

敎具

挿繪を擴大したる掛圖。

敎法

（甲）敎授上の注意

一、本課は舊讀本卷三第二課にあつた材料を多少加筆して玆に轉載したものである。本課の主眼とする所は復習の大切なることを知らしめ、復習中は假令如何なる誘惑があつても、斷然之を退くべきことを諭すにある。故に本課は感興的に取扱ふのが主でなく、强き意志を作るとして取扱ふことが主である。

二、本文の構想は

コレガスンデカラ
- 第一段―正雄の復習と櫻の花の誘惑。
- 第二段―正雄の復習と小鳥の誘惑。
- 第三段―正雄は復習を終へてから山に行き遊ぶ。

のやうになつて居る。そこで第一段に於ては、日麗かに風和かに野にも山にも櫻の花が美しく咲き亂れ、誰でも遊心勃々たる時、正雄は斷然是等の誘惑を退け、家に居て一心に復習して居る其の意志の强い所を十分意識させる。第二段に於ては、色々の小鳥が春光を浴びながら樹々の間に節面白く囀つて居て、誰でも遊び心の引立つとき、正雄は斷然是等の誘惑を退けて專心に讀書し居るその意志の强い所をよく知らしめる。第三段に於ては正雄が復習がすんでから、友達と共に山に行き、愉快に遊んで家に歸つたことを知らしめる。櫻の形態・用途。小鳥の形態・習性に就いては別に說く必要はない。

三、文字・語句等については大體次に示す範圍・程度に從ひ、平易に說きて其の意義・用法等を明かにする。

「**ハルノアタタカナヨニ**」―麗日和風の氣分を十分味はせる。

「**マサヲガ本ヲヨンデ井マシタ**」―掛圖と提携して正雄が姿勢正しく坐して一心不亂に復習して

居る樣子を知らしめる。

「**ウツクシイ花**」―勿論櫻の花として取扱ふ。

「**ノニモ山ニモ、ワタクシドモノナカマガタクサンサイテ井マス**」―野にも山にも櫻花爛漫として咲き亂れ、こんな花の時期には誰でも遊心勃々たるものであるといふことを知らしめ、正雄の意志の强固に對するの對象とする。

「**ミニイラツシヤイ**」―茲に誘惑の宿つて居ることを知らしめる。

「**マサヲハミムキモシナイデ**」―正雄はこの誘惑の甘言に心を奪はれず、一心に讀書して居る意志の强い所をよく知らしめる。

「**コレガスンデカラ**」―斷然謝絶した所を知らしめる。

「**コンドハウツクシイ小トリガ**」―再度の誘惑の起りしことを知らしめ、正雄の心がどう變化するかに注意せしめる。

「**イツシヨニウタヲウタヒマセウ**」―此處に甘き誘惑の宿つて居ることを悟らしめる。

「**マサヲハヤツバリミムキモシナイデ**」―正雄の意志の益々强固なることを知らしめる。

「**オサラヒガスミマシタ**」―復習するときには假令復習中どんな誘惑があつても正雄の如く斷然退けて、其の復習を遂行すべきことを諭す。

「**ヨロコンデイツシヨニ山ヘアソビニイキマシタ**」―茲では學ぶべき時には專心に學び、遊ぶべき時には快活に遊ぶべきことを知らしめる。遊ぶ場所については山に限つたことなく、野でも其の他でも適當の場所に遊んでよいことをも知らしめて置く。

四、平假名の教授は全文復習の時に授ける。文の末尾にある平假名は平假名の應用として矢張全文復習の時に口唱して書取らしめる。

五、發音上では「イラツシヤイ」(促音・拗音)「イツショ」(同上)「ヤツバリ」(促音)「チツト」(促音)等は注意して授ける。

六、語法上では「ワタクシドモ」(ワタクシは人代名詞の自稱である。ドモは其の複數を表はす)「コレガ」(コレは事物代名詞の近稱)「ノニモ山ニモ」(モは事物を竝列する時に用ひる)「ミムキモ」(このモは前のモとは職能を異にする。卽ち意味を强めて言ふモである)「スンデカラ」(カラは、一の事物の原因となる時に用ひる)「ウタヒマセウ」(マセウは未來の時を表はす)「ミニイラツシヤイ」(トイヒマシタを省略)「ウタヒマセウ」(トイヒマシタを省略)「コレガスンデカラ」(イキマセウトコタヘマシタを省略)等は注意して授ける。

七、練習應用例

(一)平假名の練習(次の片假名を平假名に)

「ハル」「ノハラ」「小トリ」「ヤマ」「サマトカルマ」「ハヤシノ木」「木ノハ」「イトトハリ」「サクラノ花」……等

(二)語句の應用。

「ナカマ」―ワタクシドモノナカマハ四十ニンヰマス。

「アタタカイ」―アタタカイ日　アタタカイテ　アタタカイヘヤ　コネコチフトコロニイレテヰルト、タイヘンアタタカイデス。

「ソト」―マドノソト　イヘノソト　ソトニヒトガタツテヰマス。

「ミムキモシナイデ」―オチヨサンハヒトガキテモ、ミムキモシナイデ、本チヨンデヰマス。

「スンデカラ」―オサラヒガスンデカラアソビニイキマセウ。

「チツト」―オ花サン、チツトソトヘデテアソビマセウ。

「ヤツパリ」―フロノユニダイブミヅヲイレマシタガ、ヤツパリアツイデス。

「サソヒニ」―石田クシガサソヒニキマシタ。オ花サンヲサソヒニイキマセウ。

(乙)教授の實際

第一時

一、掛圖の觀察

掛圖を示して

(1)正雄が一心不亂に本を讀み居ること。

(2)窓の外から美しい櫻の花及び奇麗な小鳥が覗き居ること。

二、通讀

各自の讀書力により自由に一・二回讀ましめて大意を捉へさせる。

三、語句の意義

次の語句につき問答しその內容を確實に知らしめる。語法等についても。

「本チヨンデヰマシタ」「マド」「カツタシイ花」「ノニモ山ニモ」「ワタクシドモ」「イラツシヤイ」「ミムキモシナイデ」「コレガスンデガラ」

四、讀方練習

五、六の兒童に讀ましめる。

五、內容の吟味

適切な問答によつて吟味し、一層深く內容を理會させる。

六、朗讀

個人的にまた一齊的に。

七、練習應用

(一)口唱書取(二三兒童をして板書せしめ、後批正する。)

(1)ハルノアタタカナ日ニ、オチヨサンガマドノシタデ本ナヨンデキマシタ。(2)ノニモ山ニモ、サクラノ花ガキレイニサイテキマス。

(二)短文作爲。

「ミニイラツシヤイ」「ミムキモシナイデ」「……ニモ……ニモ……」

(三)補充(省略したる言葉を補充させる)

(1)ミニイラツシヤイ(トイヒマシタ)。(2)コレガスンデカラ(イキマセウトコタヘマシタ)

假名遣(誤正法)

「マサチ」「本チヨンデキマシタ」「ミニイラツシヤイ」……等。

第二時

一、復習

前習の所を形式・內容兩方面に亙つて復習する。

二、通讀

自由に一・二回讀ましめて、其の大意を捉へさせる。

三、語句の意義

兒童の質問に應じ、又敎師より質問して、次の語句等につき其の意義用法及び語法上の職能を明かに會得させる。

「ソンナニ」「ウチニバカリキナイデ」「チツト」「ガイアナサイ」「ウタチウタヒマセウ」「ソコヘ」「サソヒニキマシタカラ」……等。

四、讀方練習

各節に又經めて五六の兒童に讀ましめる。

五、內容の吟味

適切な問答によつて吟味し一層深く理會させる。

六、朗讀

個人的にまた一齊的に。

七、練習應用

(一)短文作爲

「コンド」「ソンナニ」「……ニバカリキナイデ」「チツト」「ヤツパリ」「スコシタツテ」「ソコヘ」……等。

(注意)時間の都合上直に口答させてもよい。

(二)口唱書取

(1)小山クン、ソンナニウチニバカリキデハ、カラダノタメニヨロシクナイ。スコシアソビニイキマセウ。

(2)オ花サンハオサラヒガスンデカラ、トモダチトイツショニノハラニイツテ、花ツンデアソビマシタ。

(三)假名遣(誤正法・書取法)

各說　第二　コレガスンデカラ

「ウチニバカリキナイデ」「チツト」「イツショニ」「ウタヒマセウ」「オサラヒ」「サソヒニキマシタ」……等。

第三時

一、全文の復演

(1)各段毎に讀ましめる。　(2)各段の語句及びその内容につき問答。(3)全文を讀ましめる。

(4)語法・假名遣等につき問答。

二、平假名の教授

片假名と對照して次の平假名の讀み方、書き方を授ける。

「はる」「の」「小とり」

次の語句を口唱し之を平假名にて表記させる。

「いととはり」「うまとくるま」「はやしの木」「木のは」(各内容を簡單に話す)

三、話方の修練

一人を正雄に、一人を櫻に、一人を小鳥に、四五の兒童を友達にして對話式に話さしめる。

第四時

一、全文の復習

1 各節につき讀ましめる。

2 各節に於ける主要語句の意味及び語法等につき問答する。

3 各節に於ける内容につき吟味する。

4 全文を讀ましめる。

5 全文の内容につき吟味する。

二、練習應用

(一)文形の適用

(1)……ニモ……ニモ……ガタクサンサイテキマス。

(2)……ガ……ニキマシタカラ、イツショニ……ニイキマシタ。

(二)次の語句を平假名に書き直さしめる。

「サクラノ花」「ハヤシノ木」「シロイウマ」「イトトトリ」

(三)次の文を讀ましめる。

ニハ　ノ　サクラ　ガ　キレイ　ニ　サキマシタ。　オチヨサン　ガ　イヌ　ト　イツショ　ニ　ソノ　シタ　デ　アソンデ　キマシタ。オカアサン　ガ　マド　ノ　ウチ　カラ

「オチヨサン　ハヤク　オサラヒ　チ　シナサイ」

オチヨサン　ハ　オカアサン　ノ　コエ　ヲ　キイテ

「ハイ　イマ　スグ　ニ」

三、話方の修練

掛圖につき各自意識する所を話さしめる(話術の指導)

第三　ワラビトリ

要旨

本課は二人の子供が山に行き蕨を採りしことにつき叙した文章である。新字の讀み方・書き方。新語句の意義。語法等を授けて本文の讀解に習熟させると共に、蕨の形態・用途、蕨を採ることの愉快、注意等につき授け、兼て友達の難儀を見ては親切に世話すべきことを知らしめる。

教材

マサチ　ト　マツキチ　ガ　山　ヘ　ワラビ　チ　トリ　ニ　イキマシタ。
山　ニハ　ワラビ　ガ　タクサン　デテ　オリマス。　モウ　ヒライタ　ノ　モ　アリ、土　カラ　デタ　バカリ　ノ　モ　アリマス。　太クテ　ヤハラカナ　ノ　チ　ヨツテ　トリマシタ　ガ、イケバ　イク　ホド　タクサン　アリマス。　ダンダン　トツテ　イク　ウチ　ニ、二人　ハ　ハナレバナレ　ニ　ナリマシタ。
マツキチ　ガ　マサチ　ガ　ミエナイ　カラ、大キナ　コエ　デ、「マサチ　サン、マサチ　サン。」ト　ヨビマシタ。　マサチ　ガ　ムカフ　ノ　タニ　デ　ヘンジ　チ　シマシタ。　イツテ　ミル　ト、マサチ　ハ　ススキ　デ　小エビ　チ　キツテ、オサヘテ　オリマス。　マツキチ　ハ　フトコロ　カラ　カミ　チ　ダシテ、シバツテ　ヤリマシタ。　ソレ　カラ　マタ　イツシヨ　ニ　ナツテ、カゴ　ニ　イツパイ　トツテ　カヘリマシタ。

（新平假名）　まつきち　たに　すすき
（練習平假名）　いとう　すぎた　ささき　まつばら

きくたらう　とらじらう　うのきち
はつ　くに　たま　とし　しゞ
（新漢字）　二人

區分

第一時　第一・二節（自六頁六行至七頁七行）に於ける形式及び内容の教授。
第二時　第三節（自七頁八行至九頁五行）に於ける形式及び内容の教授。
第三時　全文の復習及び平假名の教授。
第四時　練習應用。

教具

蕨の實物。　挿繪を擴大したる掛圖。

教法

（甲）教授上の注意

一、本課は第二種讀本卷三第三課にでてゐた材料を多少修正して茲に轉載したものである。春の蕨取、秋の菌狩は都の人も、鄙の人も春秋に於ける行樂の内に數へて居る。兒童に對しても感興をそそるよき材料である。

二、本課は早蕨を採ることの愉快といふことを中心思想として取扱ひ、傍ら山にいつては互に離れぬこと、若し負傷などした場合には互に世話すべきことを教訓する。蕨の形態・用途に關する知識は實物又は繪畫を通じ、あつさりと授けて置く。

三、文章は三段から出來て居る。第一段は正雄と松吉との二人が山へ蕨取に行つたこと。第二段は二人は我を忘れて樂しく採つてゐること。第三段は松吉の道義心につき記述してある。

第一段に於ては春の麗かな日に友と共に山野に行つて蕨を採ることは本當に愉快なものであるといふ氣分を十分に惹き起すやうに取扱ふがよい。第二段に於ては、早蕨が山の彼方・此方に澤山はえてゐる。二人は我を忘れて山深く入込み、面白く採つてゐる有樣を想はしめる。第三段に於ては正雄が芒で指を切り、松吉は親切に之を世話せし道義心につき知らしめ、之に附帶して感興が醒めないやうに、若し山中で友と離れ迷兒となるときは頗る危險であるといふことを警告する。形態・用途の知識は掛圖につき問答する際、實物とも提携して簡短に說くやうにする。

四、文字・語句の讀方及び意義については、大體次の範圍程度に基き適切に知らしめる。

「二人」―フタリと讀ます。

「ワラビトリ」―春、山に行つて早蕨を取ること。

「モウヒライタノモアリ」―「ノ」は葉をさす。ここでは全く開いた葉の實物又繪畫を示して其の觀念を確實にする。

「土カラデタバカリノモアリマス」―土から出たばかりのものは渦卷狀をして居る。實物又は繪畫を示して觀念を確實にする。

「太クテヤハラカナノヲ」―此の種のものを選ぶ理由を明かにする。

「ヨツテ」―多くある內からえりだすことをいふ。

「イケバイクホド」―行くに從つての意味。適用と相俟つて其の意味を明かにする。

「ハナレバナレニ」―疊語で、離れを重ねたのである。適用と相俟つて其の意味を明かにする。

「ハナレバナレニナリマシタ」―茲では二人が蕨取の面白さに我をも忘れて互に離れ、いつの間にか山深く入りこんだことを知らしめる。

「マサヲガミエナイカラ」―松吉が我に歸つて傍を見ると、始めて正雄の居ないことに氣がついたことにして取扱ふ。

「タニ」―山と山との低き土地卽ち山の下の方として授く。

「ススキデ小ユビヲキツテ」―「小ユビ」としたことは深い意味がなからう。一番外側にあつて物に觸れ易いからであらう。ここは正雄が芒の中に生えてゐる蕨をとらうとして、誤つて切つたことにして取扱ふ。

「フトコロカラカミヲダシテ、シバツテヤリマシタ」―松吉の親切なる情を十分味はさせる。

「マタイツシヨニナツテ」―「マタ」といふ所に注意を拂ふ。一旦は我知らず離れたが、此度は二人共互に離れないで、一所になつて蕨をとつたといふ所をよく知らしめる。友に離れることの危險もここに聯絡して知らせる。

「カゴニイツパイトツテカヘリマシタ」―多くの獲物をになうて誇顏で歸る所を十分想像させる。また二人が共に共に歸つたといふ所に注意を拂ふ。

五、平假名は前課と同樣の方針で授ける。但し本課の末尾にある、

「いとう」「すぎた」「ささき」「まつばら」―は人の姓。

「きくたらう」「とらじらう」「うのきち」―は男の名。

「はつ」「くに」「たま」「とし」「しづ」―は女の名。

であることを知らしめる。

六、發音上では「ヨツテ」「トツテ」「イツテ」「シバツテ」「ナツテ」「イツシヨ」「イツパイ」等促音を練習する機會の多いことに注目する。また「ムカフ」(轉呼音)「イツシヨニ」(拗音)「モウ」「らう」(長音)等にも注意する。

七、語法上では「ソレカラ」(接續詞)「マサヲトマツキチ」(此のトは物事を竝べる時に用ひる助詞)「マサヲサントヨビマシタ」(此のトは物事を受け止めるときに用ひる助詞)「イツテミルト」(此のトは或る事柄と他の事柄とが同時に起る意味を示すときに用ひる助詞)等に注意する。特に「ト」に於ては三種の場合が表はれてゐるから適用によつて其の用法にも習熟させる。

(乙)教授の實際

第一時

一、實物・掛圖等の觀察

實物及び掛圖を示し(1)蕨の形態・用途等に關する知識を彼等の經驗を主として整理する。(2)蕨の取り方及びその面白さにつき問答し、本文の內容との交渉を結ぶ。

二、通讀

目的を告げ各自をして自由に一・二回讀ましめる。

三、文字・語句等の教授

次の文字の讀方及び語句等の意義・用法を明かにする。

「二人」「ワラビトリ」「ヒライタノモアリ」「土カラデタバカリノモアリマス」「太クテヤハラカナ」「ヨツテ」「イケバイクホド」「ハナレバナレニ」…等。

四、讀方練習

各說　第三　ワラビトリ

五六の兒童に讀ましめる。

五、內容の吟味

適切なる問答によつて、また敎師の玩味する所をも話して內容を深く味はしめる。

六、朗讀

個人的にまた一齊的に朗讀させる。

七、練習應用

(一)　次の點線の部を適當なる語句を選んで塡充させる。

(1)山ニハヲラビガタクサンデキマス。……ノモアリ、……ノモアリマス。

(2)マサヲトマツキチハ……ノチヨツテトリマシタ。

(二)　次の語句を用ひて短文を作爲させる。

「……ノモアリ……ノモアリマス」「デタバカリ」「イケバイクホド」「ハナレバナレユ」……等。

第二時

一、復習

前段の復習——形式上・內容上。

二、通讀

自由に一・二回讀ましめ、大意を捉へさせる。

三、語句の敎授

兒童の質問により、また敎師よりの質問により、次の語句の意義用法及び語法上の職能を知らしめる。

「ミエナイカラ」「大キナコエ」「マサヲサン、マサヲサン ト」「イツテミルト」「ススキ」「小ユビ」「ソレカラ」「マタイツシヨニナツテ」……等。

四、讀方練習

五六の兒童に讀ましめる。

五、內容の吟味

先つ適切なる問答によつて內容を玩味させ、次に敎師の玩味する所を話して一層深く味はさせる。

六、朗讀

個人的に、また一齊的に朗讀させる。

七、練習應用

(一)短文作爲

「…サン…サントヨビマシタ」「イツテミルト」「オサヘテ」「イツパイ」「シバツテ」…等。

(二)書取(二三人は塗板上に。後假名遣の誤を正す)

「大キナコエ」「ムカフノタニ」「オサヘテキマス」「イツシヨニ」「カヘリマシタ」…等。

第三時

一、全文の復習

1. 各段毎に讀ましめる。2. 各段に於ける主要語句及びその內容につき問答。3. 全文を讀ましめる。4. 語法・假名遣等につき問答。

二、平假名の教授

片假名と對照して次の平假名の讀み方、書き方を授ける。

「まつきち」「たに」「すすき」

次の語句を口唱し、之を平假名にて表出させる。

「いとう」「すぎた」「ささき」「まつばら」…人の姓。

「きくたらう」「とらじらう」「うのきち」…人の名(男)

「はつ」「くに」「たま」「とし」「しづ」…人の名(女)

三、話方の練習

1. 由に廠のたくさんでて居る有樣につき。

2. 松吉は正雄の負傷に對して親切に世話したことにつき。

3. 廠取につき各自の經驗を話さしめる。

第四時

一、全文の復習

1. 語句の意義。語法。假名遣。讀方等

2. 全體の玩味。

二、練習應用

(一)文形の適用

(1)…ト…ガ…ヘ…チトリニイキマシタ。

(2)…ニハ…ガタクサンアリマス、…ノモ…ノモアリマス。

(3)…ノ花ガイケバイクホド…サイテキマス。

(二)語句の適用(短文作爲)

(1)「イケバイクホド」(2)「ダンダントツテイクウチニ」(3)「ハナレバナレニ」(4)「…トヨビマシタ」(5)「イツテミルト」

(三)既に習つた平假名を使つて自分の知り居る他人の姓名をかかしめる。

備考

廠

各說　第三　ロラビトリ

蕨は隱花植物中羊齒類に屬する植物で、山野に自生する。葉は地下莖から直ぐにいでゝ初は渦卷狀をなし、成長すると羽狀複葉となる。葉の寓面には無數の子囊群（胞子をなさむ）があつて、成熟すると胞子が地上に落ち、陰濕なる地に附着し、後に新蕨となる。併し蕨の繁殖は胞子によるよりも、多く地下莖の蔓延によるのである。

蕨の嫩芽は煮て食し、或は鹽漬又は乾かして之を貯へ置きて食用に供する。地下莖からは澱粉をとり、蕨粉として、傘などを張るに用ひる。葉柄の老熟したものは之を以て籠をつくる。

蕨は各地に產するが、靑森縣・秋田縣等の地方に產するもの、殊に肥大してゐて柔かく、眞品と呼ばれて居る。

蕨に類似せるものにセンマイ・カラワラビ等がある。センマイはその嫩葉を食用とし、地下莖よりは澱粉を採る。カラワラビは正月の飾りに用ひる。

第四　オミヤ

要旨

本課は一少女が祖母のお供をして神社に參詣したといふことを內容として書いた叙事文である。

教授に於ては本文に表はれて居る新字の讀み方・書き方。難語句の意義。語法等を授けて、本文の讀解に習熟せしめるは勿論、神・社殿・祭礼・境內の森嚴等を知らしめて敬神の念を啓發し、兼て祖父母に敬事すべきことを諭す。

教材

ケフハ十五日デスカラ、オキヨハイツモノトホリ、オバアサンノオトモヲシテ、オミヤニサンケイシマシタ。ウシロノ山カラオチテクルキレイナタキノ水デ、手ヲアラヒ口ヲスヽイデ、オミヤノマヘニイツテチガミマシタ。オバアサンノカシハデノオトハシヅカナモリニヒビキマシタ。

オバアサンハ年ヨリデ、足モトガアブナイカラ、石ダンノ上リ下リニハ、オキヨガ手ヲヒイテアゲマシタ。

（新平假名）おとも　おみや　かしはで　おばあさん

（平假名練習文）おまつりは　いつですか。

一年に　二ど　あります。はるは　三月の　十五日で、あきは　九月の　十五日です。

（新漢字）上下

區分

第一時　全文に於ける形式及び內容の敎授。

第二時　全文の復習。

第三時　平假名及び平假名文の敎授。練習應用。

教具

挿繪を擴大したる掛圖。

教法

(甲)教授上の注意

一、本課は新加の教材である。道德的材料として、國民的材料として、また鄕土的材料として頗る價値ある教材である。

二、本課の內容に於て、

1. 神—神は吾等の家を守り、吾等の國を護り給ふ尊き御方なること。
2. お宮—お宮は此の尊き御方を祀つてある所。
3. お祭—春秋二回之を行ふ。(祭典の儀式及び祭日については其の地方を標準として簡短に說くがよい)
4. 境內—古き松、老いたる杉などが生え茂つてゐること。清楚にして靜閑なること。森嚴の氣、自ら人をして心を正さしめること。
5. 禮拜—先づ清水で手を洗ひ、口をすすぎ、それから拜殿に行つて、眞心から禮拜すること。
6. 作法—拍手して坐禮又は立禮する。(佛に對しては名號を唱へるけれども、神に對しては別に之と言ふ定めがない。併し祖母は口に何か唱へたことにしてもよい。)
7. 敬神—お淸の祖母は誠に敬神の念の深き方。お淸もさうである。諸子も亦常に此の念を抱き、家に於ては朝夕禮拜し、また神社の前を通つたときは恭しく敬禮すること。
8. 孝心—お淸は祖母の參詣日には必ずお伴をして祖母を扶ける。諸子も亦お淸の如く祖父母に事へ祖父母を敬ふべきこと。

の諸點は特に注意を拂つて取扱ふがよい。

三、本文の構想は

お宮 ｛第一段—お淸が祖母のお伴をしてお宮に參詣せしこと。
　　第二段—二人が神に禮拜せしこと。
　　第三段—お淸が石段の上り下りに祖母を扶けしこと。｝

となつて居る。そこで第一段に於て神・社殿・祭日・祖母の敬神の念の深きことを說き、第二段に於て境內の閑靜・森嚴・禮拜の作法、禮拜する時の心情につきて說き、第三段に於てお淸の孝心・溫順等につき說くことにするがよい。

四、文字・語句等については大體次に記する範圍に基き確實に知らしめる。

「上・下」—「アガリオリ」と讀ましめる。

「オミヤ」—神を祀れる所。神殿と拜殿とに分れて居る。

「十五日」—茲では月々の十五日をいふのである。蓋し其の基く所は八幡宮の祭日(春は三月十五日、秋は九月十五日)にあるのであらう。毎月十五日に參詣すると言ふ所から、信仰の深き

を知らしめるがよい。

「**イツモノトホリ**」―お清は毎月の十五日には必ずお伴するといふその善行の繼續といふ點によく注目させる。

「**オトモ**」―ついて行くこと。「オ」の敬語に注意。

「**サンケイ**」―神樣や佛樣におまゐりすることをいふ。

「**タキ**」―高い所から落下する水をいふ。兒童の經驗又は掛圖と交渉して其の觀念を明かにする。

「**キレイナタキノ水**」―綺麗といふ點に注目させる。これは一には神佛に禮拜するときには心身の清淨と言ふことが大切であるからである。今一つは口をすすぐといふことも衞生上から注意しなければならぬからである。

「**手ヲアラヒ口ヲススイデ**」―神に禮拜する前にかくすべきことを敎へる。併し田舍のみでなく、都會地の神社でも手洗所の設の無い所が多い。こんな社に於ては適當に處すべきことを附說する。本當をいへばどこの神社でも相當に手洗所の設備がなからねばならぬ。

「**オミヤノマヘ**」―拜殿に入らないで、その前で禮拜したことになつて居る。田舍の神社では平生は多く戸を閉ぢて置くから、内に入らないのであるとして扱つてよい。併し禮拜するには(一)拜殿の内に入り正しく坐してする場合(二)拜殿に入らず外で立禮する場合とある。いづれでもよいといふことを知らしめて置く。

「**ヲガミマシタ**」―禮拜の意味である。佛に對する禮拜は合掌するが、神に對するのは拍手してする。是等の作法は知らしめて置く。

「**カシハデ**」―神を拜するとき、兩の掌を打合して鳴らすこと。所謂振動拜である。

「**オバアサンノカシハデノオトハシヅカナモリニヒビキマシタ**」―ここでは(一)には祖母が至誠を込めて拍つた柏手の響が屹度神のお耳に通じたであらうと言ふことを知らしめ、(二)には柏手が森の靜寂を破つて益〻靜寂といふ境地をよく味はさせる。

「**年ヨリデ**」―年とつた人をいふ。實例によつて意味を明かにする。

「**足モト**」―二三の意義あるが茲では足の運びといふ意味にして授けるがよい。適用によつて用法にも習熟させる。

「**上リ下リ**」―上つたり下りたりするの意。適用によつて用法にも習熟させる。

「**オキヨガ手ヲヒイテアゲマシタ**」―お清の孝心の宿する所で力を入れて取扱ふがよい。

五、平假名の敎授は前課と同樣の方針を執る。但し末尾にある平假名文に對しては(一)祭の意味(二)祭日(三)祭の氣分といふことにつき知り、また觸れしめる考で取扱ふ。

六、練習應用例

(一)漢字

「上」―エンノ上ニ上ル。ニカイニ上ル。

「下」―水カラ下リル。ダンカラ下リル。

(二)語句の適用

「イツモノトホリ」―ブンキチハイツモノトホリ、トモキチノウチヘアソビニイキマシタ。

「オトモチシテ」―マサチハオヂイサンノオトモチシテ、オテラニサンケイシマシタ。

「ススグ」―ワタクシハマイアサ水デ口ヲスススギマス。

「チガム」―ボクハマイアサカミサマト、ホトケサマトヲチガミマス。

「足モト」―オヂイサンガダンバシゴヲ上リ下リスルトキ、足モトガアブナイカラ、ボクハイツモ手ヲヒイテアゲマス。

「アブナイカラ」―カハノフチニタツテキルトアブナイカラ、コチラヘキテオイデナサイ。

七、挿繪については

お宮の位置。亭々たる老樹。莊麗なる社殿。石段。岩間から落ちてゐる瀧。お清は祖母を伴うて社殿の方に進み行く所。

等をよく觀察させる。

八、本課は第一時には全文の大意及び主要語句の意義等を授け、第二時には内容の玩味及び讀方の練熟に重きを置いて授け、第三時には平假名文を授け、且全體に亙つて練習應用を課するがよい。

(乙)教授の實際

第一時

一、掛圖觀察

掛圖を示し、其の要點につき問答し、神・社殿・祭日・境地等につき思想を與へ目的を指示して、本を開かしめる。

二、通讀

1. 各自をして自由に一・二回讀ましめる。
2. 各自の知つた所を話さしめる。

三、質問

一節一節につき兒童の分らぬ所につき應答する。また教師より主要の語句・語法等につき質問する。

「十五日」「イツモノトホリ」「オバアサン」「オトモナシテ」「サンケイシマシタ」「タキノ水」「口ヲススイデ」「チガミマシタ」「カシハデ」「モリニヒビキマシタ」「年ヨリ」「足モト」「上リ下リ」……等。

四、讀方練習

個人的にまた一齊的に可成多くの兒童に讀ましめる。

五、書取

主要の語句につき、また留意すべき假名遣につき書取らしめる。二・三人は塗板上に、他は各自の練習帳に。書き終つた後、其の誤りを批正し、意味につき問答する。

ケフハ十五日デス　イツモノトホリ　オトモチシテ　サンケイ　ワシロノ山　タキノ水　手ヲアラヒ口ヲスグ　カミサマヲチガム　カシハデ　シヅカナモリ　年ヨリ　足モト　上リ下リ　石ダン　目　耳　口　手　足

第二時

一、復習

1.各段に讀ましめる。　2.各段に於ける語句の意味につき問答する。　3.全文を讀ましめて全文の大意につき問答する。

二、内容の玩味

1.各段に於ける内容の玩味。　2.全文に於ける内容の玩味。

三、朗讀

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

四、話方

1.第一段にどんなことが書いてあるか話してごらん。
2.第二段には、
3.第三段には、

第三時

一、復習

全文の復習―形式の要點につき。内容上の要點につき。

二、平假名の教授

1.次の平假名を片假名と對照して教授する。
「おとも」「おみや」「かしはで」「おばあさん」
2.末尾にある平假名文を讀ましめ、後綺麗に書取らしめる。

三、練習應用

(1)語句の適用
「イツモノトホリ」「オトモチシテ」「ススグ」「チガム」「足モト」「アブナイカラ」…等。

(2)漢字の適用
「上リ」「下リ」(適用法は教授の注意の部參照)

各説　第四　オミヤ

(3)假名遣（口唱書取）

「ケフ」「イツモノトホリ」「オバアサン」「手ヲアラヒ口ヲスススグ」「オミヤノマヘ」「ナガム」「カシハデ」「ジブカニ」……等。

(4)異同の識別

（キノフ　ケフ）（オバアサン　オヂイサン）（カハ　タキ）（シブカナモリ　サワガシイモリ）

(5)平假名の練習（口唱書取）

「おみや」「かしはで」「おまつり」「はる」「あき」「にぎやか」……等。

備考

神社

讀本にお宮とあるは神社を意味するのである。神社は祖先・功臣を追念し、その靈魂を奉齋する所である。我が國では伊勢の大廟を始め、其の數極めて多い。

神社は大抵樹木繁茂せる小高き所にあつて、前には鳥居を建て、周圍には玉垣を結ひめぐらしてある。境内に入ると、手洗鉢・石燈籠・高麗犬等が置いてある。又花卉を栽ゑ、泉池を掘つて、神苑を設けたのもある。

構造には神明造・春日造・住吉造・權現造等ある。神明造は太古の制にならひ、誠に古樸な造方である。之に反し權現造は組もの彫ものを用ひ、彩色を施し、頗る華美な造方である。

殿舍に於て、神を奉安する所を神殿即ち正殿といひ、人の禮拜を行ふ所を拜殿といふ。祭典は一般に春秋二回定期に行はれる。而して之が儀式は其の社の格式によつて、又土地の習慣によつて夫々相違がある。祭典の期日中は、境内其の他に幟をたて、行燈を掲げ、太鼓を鳴らし、賑やかに樂み暮すを例とする。これ皆神德を仰ぎ、神恩に謝せんがためである。

神社は國民の誰も尊敬すべき所であるから、假令境内で遊ぶとも必ず不敬にわたる所爲あつてはならぬ。

第五　わたくしのうち

要旨

本課は一農家の家族生活の狀態を家人の一員即ち一兒童をして語らしめた文章である。本文に於ける新字の讀み方・書き方、新語句の意義、及び語法等を知らしめて、本文の讀解に習熟させるは勿論、本文を通じて一家の組織、家人の職分、一家團欒の樂み等を知らしめ、愛家の念を養ふを以て要旨とする。

教材

わたくしの　うちの　人は　みんなで　九人です。　おとうさんと　おかあさん、おぢいさんと　おばあさん、にいさんが　二人、おとうと　と　いもうと　が　一人　づつ　です。　大きな　にいさんは、へいたい　に　いつて　ゐますから、いま　うちに　ゐるのは　八人　です。

おとうさんと　小さな　にいさんは、まい日　はやく　から　田や　はたけへ　いきます。　いそがしい　ときは　おぢいさんや　おかあさんも　いきます。　その　ときには、おばあさんが　一人で　おるすゐを　します。

いもうとは　六つ　です　から、ちい年　がくかうへ　あがります。

おとうとは　やつと　あるきだした　ばかり　です。

（新字）わ　な　人　一人　へ　ゐ　け　そ　を

各説　第五　わたくしのうち

補習文

お花

お花は　がくがう　から　かへると、おつかひに　いつたり、には　を　はいたり　して、おかあさんの　おてつだひを　します。　あかちやんが　なき出すと、すぐ　そばへ　よつて、

「れんれん　ころりよ、おころりよ。
ぼうやは　よい　子だ、ねんれ　しな。」

と、かはいらしい　こゑで、子もりうたを　うたひます。それでも　まだ　あかちやんが　なく　ときには、

「おかあさん、あかちやんに　おちちを　のませて　ちやうだい。」

かういつて、だつこを　して　おかあさんの　ところへ　つれて　いきます。（尋常小學國語讀本卷三）

區分

第一時　第一節（自十二頁六行至十三頁五行）に於ける形式及び内容の教授。

第二時　第二、三節（自十三頁六行至十四頁六行）に於ける形式及び内容の教授。

第三時　全文の復習及び應用。

第四時　補習文の教授。

教具

お花が幼兒を抱き居る黑板畫（補習文の分）

教法

（甲）教授上の注意

一、本課は舊讀本の卷三第四課にあつた教材であるが文章は餘程修正されてある。それのみでなく舊讀本は片假名で書いてあつたのが本文は平假名になつて居る。兒童の感興をそそる材料ではないが、道德の方面から見て價値ある教材である。

二、本課の精神とする所は家の成立・家人の職分・一家團欒の樂しみを知らしめて愛家の念を啓發する點に存する。從つて教授は此の思想を中心として進行しなければならぬ。

三、内容に於ては

家族
- 祖父――日々家にあつて家業を手傳ふ。時に田園に行きて農事を手傳ふ。
- 祖母――日々家にあつて家事を手傳ふ。時に留守居をする。
- 父――日々田園に行きて農事に勵む。
- 母――日々家にあつて家事に勵む。時に田園に行きて農事を手傳ふ。
- 長兄――（長男）――今兵役に服して居る。
- 次兄――（次男）――日々父と共に田園に行きて農事に勉む。
- 自分――（長女）――日々學校に通うて學習を勵む。
- 妹――（次女）――家に居る來年は學齡である。
- 弟――（三男）――漸く歩きだした。

の關係及び有樣を十分理會させる。

四、文章の組立は

わたくしのうち
- 第一段――家族全體の人數
- 第二段――家人の職分
  - 第一節――各人の仕事
  - 第二節――仕事に就かぬ者

となつて居る。第一段は現存の家人と其の數とを書いたのであるが、そこに注意すべき二點がある。即ち一は祖父・祖母の在すことで、今一つは長兄が兵役に服して居ることである。祖父母の在す家庭は福壽の家庭である。軍人の出づる家門は譽のある家門である。此の意義深き家庭を輕々に看過してはならぬ。第二段の第一節は家人めい〳〵の仕事について記したのであるが、農事の忙しい時には家人擧つてそれに當るといふ、所謂分れては各々其の分に勵み、合つては一致協同して家業に勉めるといふ美風の存する所を逸してはならぬ。第二節は一妹一弟について記したのであるが、其の中でも一妹は來年の春、學齡に達して入學するといふ點は看過してはならぬ。一方では國民皆兵たるの義務あることを、また一方では國民皆學に就くの義務あることを知らさうとする編者の周到なる用意である。適切な問答の下に是等の點をよく理會させなければならぬ。

五、文字・語句・語法等については大體次に示す所に基き平易に說き確實に知らしめる。

「一人」―ヒトリと讀ませる。

「二人」―フタリと讀ませる。

「わたくし」―勿論自稱代名詞であるが、玆では或る家の尋常二學年の女の兒(或は男の兒)が自分をさして「私」といつたのであるとして授ける。

「うち」―我が家のこと。廣島地方では女子は一般に自稱代名詞としてつかつて居る。こんな地方では注意する。

「一人ずつ」―一人あてともいふ。內容は二人であることを知らせる。

「大きなにいさん」―長男を意味する。小學校を卒へてゐることを知らしめる。時勢の進運上、中學校を卒へたことにしたいが、どうも次男の關係上そこまで餘裕のある家庭と見られないから、止むなく小學校だけ卒業したものとして取扱つて置く。

「へいたいにいつてゐます」―「へいたい」の觀念は一學年のときにもう出來てゐる譯だから、復演的に取扱つてよい。玆では兵隊になつたことは實に家門の譽であるといふことをよく聞かせる。而して長兄の體格の立派なことも附說するがよい。「ゐます」と「ゐません」とを比較して肯定と否定との觀念を明かにする。

「小さなにいさん」―次兄を意味するので、身體の小さいのをいふのでない。二兄あるとき長兄

を大きい兄さん、次兄を小さい兄さんと呼び、三兄あるとき、長兄を大きい兄さん、次兄を仲の兄さん、末兄を小さい兄さんと呼ぶことは一般に行はれてゐる稱呼法である。

「まい日はやくから田やはたけへいきます」―朝に星を戴いて家を出で、夕に月を踏んで歸へるといふ終日營々として働く父と兄の樣子をよく知らしめる。

「いそがしいとき」―農家の忙しい時とは春ならば田植、秋ならば取入の時である。ここも多分この時をさすのであらう。

「おぢいさんやおかあさんもいきます」―我が國では一般に祖父は年とつてゐるとであるから田畑に行つて働くことを止め、家にゐて心任かせに家事を手傳ふといふ習である。母はまた本來家にあつて家事を整理するのが其の分であるから、之も田畑に行つて耕作に從事するといふことは概してなきならひである。併し田植や、取入のやうに繁忙な時には共に之に從事するといふことは當然のことである。卽ち一致協同して家業に從事するといふ譯である。此の點はよく知らしめる。

「おるすゐ」―「お」は接頭語である。「るすゐ」は家人皆外にいつて居らないとき獨り居殘つて、家の番をすることである。

「六つてすから、ちい年がくかうへあがります」―「六つ」とは數へ年のことであらう。來年學齡（滿六歲の翌月から滿十四歲までを云ふ）に入るのである。「から」は或る事柄が他の事柄の原因となる意を示す助詞である。

「やつと」―やうやうに同じ。適用と相俟つて其の意味用法を明かにする。また「あるきだした」と「やつとあるきだした」と比較して「やつと」は「あるきだした」といふ言葉を限定して居ることをも知らしめる。

「ばかり」―ほどの意味と一より外にないとの意味とある。ここは前者の方がよからう。適用と相俟つて其意味及び用法を明かにする。

六、全部平假名で書いた文章は本課が始めであるから、可成多く各自に讀ましめる。此の後の數課に於ても引續き同樣の方針を執る。

七、練習應用例

(一)漢字の適用

「人」―四人　「人」―三人　五人　六人　七人等……。

「田」―水田　ホシ田　田の中　田の上　田はた……等。

(二)語句の適用。

「ツツ」―一マイツツ　三本ツツ　一アシツツスム……等。

「ハヤクカラ」―ハヤクカラキテ、マツテキマス。ワタクシカハヤクカラオキテキマス。
「ヤツト」―ヤトウトハコノゴロヤツトハヒダシマシタ。ヤツトキミニオヒツキマシタ。
「バカリ」―イマカツタバカリノ本。イマモドツタバカリノトコロデス。

(三)文形の適用

わたくしのうちの人は
- (おとうさん)と(おかあさん)
- (おぢいさん)と(おばあさん)
- (にいさん)が(二人)
- (おとうと)と(いもうと)が(一人づつ)

です。

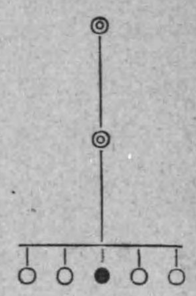
(乙)教授の實際

第一時

一、先づ本を開かしめて、目的を指示し各自をして自由に一・二回讀ましめる。讀んだ後自分で分らなかつた語句につき質問させる。次に

二、教師から家人につき、家人の數につき、今、家に居る家人につき、外に居る家人につき質問して本段の大意を捉へさせ、更に自由に一・二回讀ましめる。次に

三、問答しながら內容を



の如く圖に表はして家人相互の關係を一層深甚に意識させる。次に

四、個人的にまた一齊的に讀方の練習をなして、之が讀解に習熟させ、最後に

五、次の練習應用を課する。

(1)全文を片假名に書き直さしめる。

(2)「人(タリ)」「人(トリ)」を使つて他の場合をあげしめる。

(3)「みんな」「……づつ」「……にいつてゐますから」……等を一つ一つ使つて短文を書かしめる。

第二時

一、先づ前段を復習し、次に

二、本日學ぶべき所を告げて豫習させる。次に

三、各自が讀んで分からなかつた所を質問させる。教師も亦主要語句其の他について質問し、更に一回讀ましめる。次に

四、適切なる問答の下に本段の內容を吟味し、

(1)父と次兄は日々田園に行つて働く。(男は外に働く)。

(2)母は毎日家にあつて家政を整理する。(女は內に働く)。

(3)祖父は老いたるを以て主として家にあつて家業を手助く。

(4)祖母は常に家にあつて家事を手傳ふ。

(5)併し農事の多忙な時には祖父も母も田園に行つて農事を手助く。(一致協同)。

の諸點を確實に知らしめる。次に

五、個人的にまた一齊的に讀方の練習をなし、次の如き應用問題を課す。

(1)「日」「田」「人」……等を使つて事物の名又は人名をかかしめる。

(2)「はやくから」「いそがしい」「やつと」「ばかり」……等を使つて短文を作らしめる。

第三時

一、復習

(1)第一段を讀ましめる。　(2)本段に於ける主要語句及び語法等につき質問。　(3)本段に於ける大意。　(4)第二段を讀ましめる。　(5)本段に於ける主要語句及び語法等につき質問。　(6)本段に於ける大意。　(7)全文を一齊的に讀ましめる。

二、內容吟味

前記「教授上の注意四」にある內容を參考して本文に於ける內容を一層深く理會させる。

三、達讀

二三人の兒童に讀ましめる。

四、練習應用

(1)次の片假名を平假名になほさせる。

「ワタクシノカチ」「ミンナ」「ヘイタイサン」「ハタケ」「イツガシイ」「ルスキ」「オバアサン」「ライ年」……等。

(2)短文作爲。

「づつ」「はやくから」「やつと」「ばかり」……等。

(3)文形の適用。

「教授上の注意(七)」にある文形を適用させる。

第四時

(補習文の教授は第一課にある補習文の取扱に準ずる。)

第六　八ちやうじらう

要旨

各說　第六　八ちやうじらう

本課は八町次郎と平景清との奇拔な行動を捉へて文にしたのである。之が讀解に習熟させると共に兒童の感興心をそそり、歷史的趣味を養ふの一端に資する。

教材

げんじ　の　げらい　に、はしる　こと　の　はやい　ひと　が　ありました。うま　に　のつて　ゐる　てき　を　かち　で　おひかけて、八ちやう　の　うち　に　おひついた　ので、人　が　八ちやうじらう　と　いひました。

ある　とき、てき　の　たいしやう　たひらのよりもり　が　うま　に　のつて　にげて　いく　の　を、八ちやうじらう　は　いつも　の　やう　に　おひかけて、おひつく　が　はやい　か、くまで　を　ふりあげて、てき　の　かぶと　に　ひつかけました。ちからいつぱい　に　ひつぱる　ところ　を、よりもり　は　大きな　たち　で、くまで　の　え　を　きりました。

八ちやうじらう　は　たふれて　しりもち　を　つく、よりもり　は　うま　に　むち　を　あてゝ　にげました。

「かけ手　も　よく　かけた。　きり手　も　よく　きつた。」と　いつて、人人　が　かんしんしました。

ここ　に、おなじ　やう　な　はなし　が　あります。たひらのかげきよ　と　いふ　ちから　の　つよい　人　が、ある　ところ　の　たたかひ　で、げんじ　の　ぶし　の　かぶと　の　しころ　を　つかんで、ひつぱりました。てき　も　なかなか　つよい。えいや　えいや　と　ひきあふ　うち、とうとう　しころ　が　ちぎれました。てき　は　かげきよ　の　手　の　ちから　に　おどろき、かげきよ　は　てき　の　くび　の　つよい　の　に　おどろきました。

區分

（新字）こ　ひ　よ　ふ　え　れ　む　（但前文のもの）

第一時　全文（自十四頁七行至十七頁七行）に於ける形式及び內容の敎授。

第二時　全文の復習。

第三時　練習應用。

第四時　全文（自十七頁八行至十九頁三行）に於ける形式及び內容の敎授。

第五時　全文の復習及び應用。

教具

挿繪を擴大したる掛圖。鍵引の掛圖。

教法

（甲）教授上の注意。

一、本課は新加の材料である。本文と補習文とあるが、二者共に奇拔な行動で兒童は思はず快哉を叫ぶ敎材である。

二、本課の如き材料は、初めから直ぐ讀本を開いて讀ましめ、讀んで行く內に知らない文字に出遇つたら、敎師について聞くことにし、自ら其の內容を味つて快哉を叫ぶやうな取扱に出づるがよい。

三、語句等については大體次の範圍程度に從ひ、平易に說明して確實に知らしめる。

各說　第六　八ちやうじらう

「げんじのけらい」―源義朝の家來に鎌田政家といふ剛勇の人があつて、此の人の家來に八町次郎といふ走ることの大層はやい者があつたのである。しかし子供に對し、こんなこみいつたことをいつても分らぬから、「昔日本の國が源氏と平氏との二つに分かれて戰をしたことがあるが、その源氏方の家來に八町次郎といふ大層走ることの早い人があつたのである」として知らしめる。

「てき」―茲では我に對して抗戰する者卽ち戰の相手をいふ。「みかた」と對照して其の意味を明かにするがよい。

「かち」―馬にも何にものらないで、たゞ足であるくことをいふ。適用と相俟つて其の意味用法を明かにする。

「八ちやう」―長さを言つたのであるが、この時代の子供にはまだわかるまいから、何か適當な標準を立てゝ知らしめるがよい。

「おひついた」―先きだつ人のあとを追つて其の人と一所になることをいふ。適用と相俟つて其の意義・用法を明かにする。

「八ちやうじらう」―本名にあらず、敵を追ひかけて八町の內に追付いてしまふといふ所からこの綽名をつけたのであると知らせる。

「ある時」―平治の亂の時を言ふのであるが、子供のことであるから、斯くいつたのである。故にずつと昔の或る時といつて知らせる。

「てきのたいしやう」―「てき」は卽ち平氏方をいふのである。茲で源氏に對して平氏といふことを授けるがよい。

「たひらのよりもりがうまにのつてにげていくのを」―平治の亂に賴盛が兵一千に將として源義朝と戰ひ敗けて單騎退き走つたのをいふ。

「おひつくがはやいか」―追ひつくとすぐにの意であるが、こんな言葉は口で說明してもわかりかねるから、いろ〳〵の場合に適用して其の意味と用法とを明にするがよい。

「くまで」―昔時に於ける一種の武器で熊の爪のやうな鐵の爪を數個竝べ附し、之に長い柄をつけたもので敵をひつかけ捕へるに用ひたものである。挿繪と對照して說明するがよい。

「かぶと」―實物又は繪畫を示し總合的にこれは兜であるといふことを知らしめるがよい。

「ちからいつぱいに」―あるだけの力をだして引張ることをいふ。適用と相俟つて其の意味を明かにする。

「大きなだちてくまでのえぶをきりました」―八町次郎が鐵搭を以て拘したとき、賴盛は幾度も首を傾けて之をはづしたが最後に馬から墮ちなんとしたので、家傳の寶刀拔丸を揮つて鐵搭を截

ち、次郎が顚仆した其の隙に逃げたのである。平易に之を知らしめる。

「しりもち」―尻にて餅を搗く義で後方へ倒れ、尻を地につくことをいふ。適用と相俟つて其の意味を明かにする。

「むちをあてて」―「むち」は馬をうつ細き棒。「あてゝ」はうつの意である。卽ち馬をいそがはさうがために、馬の尻を鞭で打つのである。

「かけ手」―熊手をかけた人卽ち八町次郎をいふ。

「きり手」―熊手の柄を切つた人卽ち平賴盛をさす。

「たひらのかげきよといふちからのつよい人」―平氏の家來。軀幹長大强力人に勝る。世の人惡七兵衞景淸と呼ぶ。

「あるところのたたかひで」―屋島の戰をいふ。この期の兒童はまだ時間の思考が發達せぬから斯くいつたのである。

「げんじのぶし」―「ぶし」は源氏方の美尾屋十郎をいふ。景淸陸に上り美尾屋十郎と戰ひ十郎が退き走る所を景淸之を追うて、兜の鎺を捉へ、首手相擊し、遂に鎺が切れたのである。

「かぶとのしころ」―兜の後に垂れて首筋を蔽ふもの。實物又は繪畫によつて明かにする。

「えいやえいや」―互に引くときの掛聲。

「ひきあふうち」―互に引いて爭うてゐるうちの意。適用と相俟つて其の意味を明かにする。

四、語法等の上では

「おひかけて」と「おひついて」―の異同。「人人」―疊語。「かけ手もよくかけた。きり手もよくきつた」―對句。「てきはかげきよの手のちからにおどろき、かげきよはてきのくびのつよいのにおどろき…」―對句。「えいやえいや」―聲喩法。

等に注意して授ける。

五、要するに本課はむづかしい言葉が多くある。例へば「げんじ」「かち」「しころ」「かけ手」「たち」「ぶし」等の如きはそれで、此の程度の子供に一寸骨が折れる。又促音・轉呼音・長音の類も多く出て居る。濁音・半濁音も尠くない。形式方面に對して十分注意する所なければならぬ。

六、文章は本文・補習文共中々面白く出來て居る。二者の活動が眼の前に宛然と浮んで來る。輕妙で而かも力のある筆使である。

「あるとき、てきのたいしやうたひらのよりもりが、うまにのつてにげていくのを……」―戰に敗けて馬に一鞭を加へあわてふためき逃げ行く樣子があり〳〵と目に見える。

「八ちやうじらうはいつものやうにおひかけて」―いつものやうにの此の一言は八町次郎が常に戰場に於て發揮する「そりや例の十八番が出たぞ」といふ意味が見えて中々面白い。

「おひつくがはやいか、くまでをふり上げて、てきのかぶとにひつかけました」―機敏な動作は讀者をして思はず快哉を叫ば

しめる。

「ちからいつぱいにひつぱるところをよりもりは大きなたちで、くまでのえをきりました」—落馬の危機が一髪に迫つて居る。

さあどうなることかと見てゐる時、頼盛は大刀を振つてすばりと熊手の柄を切り拂つた所、此處も思はず快哉を叫ばしめる所である。

「八ちやうじらうはたふれてしりもちをつく」—敵も味方も我を忘れてどつと大笑する所である。此の時の次郎の顔付は傾る振つたものであつたらう。

「よりもりはうまにむちをあてゝにげました」—ほつと安心の一息をついて熊手をぶらさげて逃る樣子も中々振つたものであつたらう。

の如き點は十分はさせなければならぬ。補習文も同樣である。

七、練習應用例

(一)平假名の練習。

「ゲンジ」「ハシルコトノハヤイヒト」「タヒラノヨリモリ」「八チヤウジラウ」「クマデチフリアゲテ」「クマデノエ」「タフレル」「シリモチチツク」「ウマニムチアテ、ニゲ」…等。

(二)語句の適用。

「はやい」—うまはうしよりもあるくことがはやい。

「おひかけて」—犬がたらうさんのくつをくはへてはしつていきます。たらうはおひかけていきます。

「おひついた」—あとのうまがさきのうまに、とうとうおひついた。

「にげていくのを」—一びきのねこが犬におはれてにげていくのをみた。

……はやいか……」—ねこがねずみをみるがはやいかすぐとらへて口にくはへました。

「ひつかけました」—なはを木のえだにひつかけました。

「ちからいつぱい」—あかのくみとしろのくみとが、ちからいつぱいにつなをひいてゐます。

「しりもちをつく」—たらうとじらうとがなはをひつぱつてゐます。なはがきれて、二人ともしりもちをつきました。

(三)假名遣(書取法)

「八ちやうじらう」「おひかけて」「たいしやう」「いつものやうに」「たふれる」…等。

(乙)教授の實際

第一時

一、先づ掛圖を示し馬に乘つて刀を振りかざして居る武士は平頼盛といふ人で、熊手を兜にひつかけて力一杯にひつぱつて居るのは八町次郎であることを告げ、學習動機を惹き起し、それから讀本を開かしめる。次に

二、各自の力によつて一・二回之を讀ましめて其の大意を捉へさせる。而して讀み行く内に知らぬ文字等は個人的に授ける。次に

三、其の大意を問答したる後更に新文字・難語句・語法等につき問答し、一層確實に其の讀方・意義・職能等を明かにする。次に

四、五六の兒童を指名して讀み方の練習をなし、また一齊的に讀ましめて練習する。次に

五、內容について問答し、教師の玩味する所をも語つて一層深く味はさせる。次に

六、時間の許す限り、個人的にまた一齊的に朗讀の修練を爲さしめる。

第二時

一、先づ讀本を開かしめて一人の兒童に讀ましめ、次に

二、主要の語句・語法等につき問答し、更に一回齊讀せしめ、次に

三、左の問をば本を讀んで答へさせる。

(1)八町次郎は誰の家來か。　何故に八町次郎といふか。　それは書物のどこにどう書いてあるか。　讀んで答へてごらん。

(2)平賴盛が馬にのつて逃げた所を次郎がどうしたか。　賴盛はその懸けられた熊手をどうしたか。　それは書物のどこにどう書いてあるか。　讀んで答へてごらん。

(3)人々はそれを見てどういつたか。　それは本のどこにどう書いてあるか。　讀んで答へてごらん。

四、右終つて朗讀の修練を爲す。

第三時

一、先づ一齊的に一回讀ましめ、兒童の忘れたる語句等については之を教授し、次に

二、左の如く練習應用を課す。

(1)平假名の練習（教授上の注意の「七」練習應用例參照）

(2)假名遣の練習（同上）

(3)語句の適用（同上）

三、右終つて話方の修練をなし、此の際話術の指導をも爲す。

（注意）第四時及び五時に於ける補習文の教授も大體右に準ずる。

備考

八町次郎

……爰に謀田が下人八町次郎とて大力の剛者、早走の手さゝあり。馬にてこそ具すべけれども、中々徒立よかるべし。高名せよと云ひければ、一年も腹卷に小具足奏固めて眞前に進みたりけるが、敵の馬武者遙に先立て落ちけるを、八町が內にて追ひつめて、首を取りたりければ、それよりして八町次郎とぞ言ける。されば又此の者、三河守の聞ゆる早驍の名馬に、兩鐙を合て懸られけるに、少も劣らず追着いて、兜のてつべんに熊手を打懸んと、續いて走りければ、賴盛も兜を打傾け、打傾け、あひしらはれければ、五六度は懸はづしけるが、終にてつべんに打懸けて、えいやと引けば、三河守既に引落されぬやう見えられけるが、帶びる太刀を引拔いでしとゝ切、熊手の柄を手元二尺計置いて、つんと切て落されければ、八町次郎のけに倒れてころびけり。京童是を見て、あはれ太刀や、あ切れたり、三河殿も能切りたり。八町次郎も能懸けたりとぞ感じける。賴盛は兜に熊手を打懸けながら、取りも捨てず、見も返らず、三條を東へ、高倉を下りに、五條を東へ、六波羅迄、からめかして落ちられけるは、中々優にぞ見えたりける……。

鑑引

……平家是を本意なしとや思ひけん。櫓ついて一人、弓持て一人、長刀持て一人、武者三人汀にあがり、櫓を衝いて「敵寄せよ」とぞ招きたる。……武藏の國の住人三穗屋四郎、同藤七、同十郎、上野の國の住人丹生の四郎、信濃の國の住人木曾の忠次、五騎つれて、ためいて駈く。櫓の影より塗篦に、黑ほろはいた大の矢をもつて、眞先に進みたる三穗屋の十郎が、馬の左

各說　第六　八ちやうじちう

の胸懸づくしを、ひやうづばと射て箸の隙るゝ程ぞ射籠だる。屏風を返すやうに、馬はどうと倒るれば、主は女手の足をこえて弓手の脇に下立て、やがて太刀をぞ抜たりける。又楯の陰より、大長刀打振つて懸りければ、三穂屋の十郎小太刀長刀に叶はじとや思けん。掻い伏して逃ければ、やがて續いて追懸たり。長刀でなかんずるかと見る處に、さはなくして長刀をば左の脇にかい挾み、右の手をさしのべて、三穂屋十郎が甲のしころをつかまむとす。つかまれじと逃ぐる。三度つかみはづして、四度の度にむずと抓む。暫したまつて見えし。鉢附の板より、ふつと引切てぞ逃げたりける。殘四騎は、馬を惜うでかゝらず、見物してこそ居たりけれ。三穂屋十郎は味方の馬の陰に逃入つて、息據居たり。敵は追うて來て、長刀杖につき甲のしころを指上げ、大音聲を上げて、「日比は音にも聞きつらん。今は目にも見給へ、是こそ京童部のよぶなる上總の惡七兵衛景清よ。」と名乘り棄てぞ歸りける。平家これにて少し心地をなほして、……。（平家物語）

第七　なぞ

要旨

本課は鷄卵の形態を内容として作つた謎文である。教授に於ては本文の讀解に習熟させると共に思考思索の力を練り、傍ら雞卵の形態・用途等に關する一斑の知識を授ける。

教材

わたくしには　口も、目も、耳も　ありません。手も、足も　ありません。まるい　けれども、まりの　やうに　まんまる　では　ありません。いきて　は　ゐます　が、うごく　こと　は　できません。わたくしを　ころがす　こと　は　だれ　にも　できます　が、わたくしを　たゝせる　こと　や、二つ　かさねる　こと　は、どうしても　できません。わたくしは　そと　が　かたくて、中　が　やはらか　です。かたい　もの　に　あたれば　こはれます。

わたくし　は　なん　でせう。

（新字）せ　れ

補習文

かんがへもの

「この　はこ　の　中　に、おもしろい　人　が　ゐます。あて、　ごらん　なさい。」

「その　はこ　を　かして　ください。」

「はい。」

「ふつて　も　よう　ございます　か。」

「はい。」

「たいそう　かろう　ございます　れ。この　人　は　どんな　いろ　の　きもの　を　きて　ゐます　か。」

「あかい　きもの　を　きて　ゐます。」

「それ　では　をんな　でせう。」

「いいえ。」

「それ　では　をとこ　の　子　です　か。」

「いいえ。としより　です。」

「いいえ。こまりました。どんな　かほ　を　して　ゐます　か。」

「どうも　かほぢゆう　ひげだらけ　です。」

「それ　では　て　も　あし　も　ない　でせう。」
「はい。」
「わかりました。だるま　さん　です。」（尋常小學國語讀本卷三）

區分

第一時　全文（自十九頁四行至二十頁終行）に於ける形式及び内容の教授。

第二時　全文の復習及び應用。

第三時　補習文の教授。

教具

鷄卵。　達摩（補習文の分。）

教法

（甲）教授上の注意

一、本教材は舊讀本卷三第七課にあつたのを僅かに修正して玆に載せたのである。文學的遊戯として價値ある材料である。

二、謎の價値は童話や寓話と共に文學的趣味を豐富にし、其の上考案・思索の力を養ふにある。卽ち問に接して、それは何だらうと、いろいろ考へ込んだ揚句に答を得た時、勿論一時的ではあるが、その愉快と滿足とは實に言外なものである。又謎は物其物に着物を被せて其の正體を隱したものであるから、その着物を剝ぎとつて、内に包まれて居る正體を捉へなければならぬから、いろ〳〵と考へて、それと思ふものを捉へ、捉へたそれと、與へられた條件とを對照して正しく當つて居るか否かを判斷し、斯くして幾たびか此の事を繰返し、遂に其の正體を捉へる、といふ譯だから、我が知慧の全體を働かし、全部を絞るといふことになる。卽ち正しく解くまでに複雜な思考、思索の力が働く譯である。斯う考へて來ると、謎は文學的の趣味を豐富にし、考案、思索の力を練るといふ價値の認識は僞りないことである。謎の教授は此の價値を意識して行はなければならぬ。

三、謎は本來からいへば一種の文學的遊戯であるからその問に對して正しい答さへ得ればよい。故に正體其の物の屬性に對する知識までも與へるといふ要求は含んでゐないと思ふ。從つて本課に於て卵の形態、用途に關する知識を與へると言つても、それはホンの輕き程度に於て取扱ふのである。本文を讀み實物と對照した時に、形態、用途の一斑につき知らしめればよいのである。餘り知的に取扱ふことは謎に對する趣味を殺ぐのみでなく、謎の本質にも背くことになる。

四、謎を取扱ふには二つの態度がある。一つは發見的態度で、今一つは證明的態度である。發見的態度とは與へられた問に對して、其の答の何なるかを考察發見することである。證明的態度

とは謎の文の構成が果して事實に當嵌つてゐるかどうかを考察吟味することである。甲は普通の態度で、乙は特殊の態度である。その謎に對してまだ何も答を知らぬ場合は前者の態度を執り、既に知つてゐる場合には後者の態度を執るのである。吾人の過去の經驗ではまだ教授にかからぬ前に、此の謎の正體は栗であるとか、卵であるとかを、チヤンと知つて居る。これを知つた原因については自分で讀んで分つたといふものもあれば、お母さんに聞いて知つたといふ者もある。兎に角既に知り居る場合とまだ知らぬ場合とがある。既に知つて居るとせば謎に對する第一次的の取扱がもうすんだものとして、第二次的の態度で取扱ふがよい。本課は後者の態度で取扱つて見たいと思ふ。

五、證明的態度で取扱ふには子供の既に發見した答を其の儘活かし、それは諸子の言ふ通り卵である。併し尙進んで茲にかいてあることが事實とよく合つてゐるかどうか。それを諸子と共に吟味して行かうと告げて、吟味に取りかかる。卽ち大體次のやうに取扱ふのである。

「わたくしには口も、目も、耳もありません。手も、足もありません」—「わたくし」とは誰か。卵に口があるか。目は。耳は。手は。足は。どうです卵の言に僞がありますか。事實に違つてゐますか。さうです、その言ふ所に毫も僞りなく、事實とぴつたりと合つてゐる。

「まるいけれども、まりのやうにまんまるではありません」—「まるい」と「まんまるい」とはどうちがひますか。卵はどちらの方ですか。成程卵はこの通り（實物指示）眞圓ではない。卵の言ふ所は全く眞である。

「いきてゐますが、うごくことはできません」—どうです卵は自身は生きてゐるといふが、それは本當か。どうしてわかりますか。（親雞が翼の下に抱いてぬくめるとヒヨコになるからわかる。）然らば少しも動かぬといふが、それは事實か。棚に仕舞つて置いた卵が、夜みんなの枕下に來て、唱歌でも歌つたことは無いか。さうです、卵は動くものでない。さればと言つて死んでゐるのではない。卵の言ふ所全くの事實である。

「わたくしをころがすことはだれにもできますが、わたくしをたたせることや、二つかさねることは、どうしてもできません」—さあ誰か此處に來て此の卵をころがしてごらん。此度はそれを縱に立ててごらん。二つ重ねてごらん。出來ないね。此の奴何と意地わるく言ふではないか。しかし其の言ふ所一々事實だからね。服從しなければならぬ。

「わたくしはそとがかたくて、中がやはらかです」—「わたくし」とは誰。「そと」とはどこ。かたいですか。「うち」とはどこ。やはらかですか。（內は見えないから分らない）さうですか、割つて見よ、このとほりです。どうです卵の言に僞がありますか。

「かたいものにあたればこはれます」—どうですその言ふ所眞か。さうです、卵の言ふ所初めから

終まで悉く眞である。毫も事實と異なる所はない。而かも其のいひまはしが中々巧妙である。

云々。

六、練習應用例

(一)語句の適用。

「コロガス」―マリヲコロガス。　マリヲコロガシテアソビマセウ。

「タヽセル」―タマゴヲタテニシテタヽセルコトハ、デキマセン。

「カサネル」―ハコヲカサネル。コメダハラガタクサン、ツミカサネテアリマス。

「コハレマス」―ガラスニイシガアタルトスグコハレマス。

(二)文形の練習

(1)「……ケレドモ……デハアリマセン」―(ワタクシノカホハアヲイケレドモビヤウキデハアリマセン。)

(2)「ソト……ーナカ……」ナマケヲシハソトガハハモチデ、ウチハアンデス。)

(三)書取

(1)タマゴハマルイケレドモ、マンマルデハアリマセン。

(2)タマゴハウゴキマセンケレドモ、シンダノデハアリマセン。

(3)タマゴハヨコニタテルコトガデキマスケレドモ、タテニタテルコトハデキマセン。

(4)タマゴノカラ　タマゴノキミ　タマゴノシロミ

(乙)教授の實際

第一時

一、一・二回讀ましめる。

兒童各自をして一・二回讀ましめ、其の何なるかを考へさせる。

二、語句の意義等を授く。

語句等につき其の意義を明かにする。

三、讀方練習

二三兒童を指名して讀ましめる。また一齊的にも。

四、證明的考察

文章と實物とを對照して證明的に考察させる。(教授の注意部參照)

五、朗讀

五六の兒童に讀ましめる。また一齊にも。

第二時

一、復習

一讀させる。主要語句につき問答する。内容の證明的考察。

(注意)卵の形態・用途につき簡短に附說する。

二、練習應用

1、全文を片假名に書きかへさせる。

2、假名遣の正誤

「いきています」「いごく」「たたしる」「やわらか」「こわれます」…等。

3、文形の應用

(1)「……けれども……ありません」　(2)「わたくしは……ですが……ではありません」　(3)「……そとは……」

三、朗讀及び話方

二三兒童に讀ましめて後次の話題を與へて話さしめる。

1、卵の形につき。　2 卵の用にたつことにつき。

第三時

補習文の讀解

(1)一讀させる。

(2)語句等につき質問。

(3)內容玩味。

(イ)發見的考察。

(ロ)發明的考察。

(4)讀方練習

備考

雞卵

雞卵は其の形楕圓形で、一端は稍細く尖り、平面上に直立させることは出來ない。其の色は白色又は淡褐色である。殼は主として石灰質から成り、無數の細孔があつて、內部に空氣が通ずる。殼の內部には白色の薄い膜がある、之を卵殼膜といふ。卵殼膜と殼との間には、少しばかりの空間があつて、こゝに空氣が滿ちて居る、之を氣室といふ。中央にある黃色の球は之を卵黃といひ、其の周圍にある白き透明な流動體は之を卵白といふ。卵黃及び卵白は多量の蛋白質を含み、頗る滋養に富んで居る。卵黃の兩方には白色の紐の如きものがある、之を蛋白紐(カラザ)といふ。卵白の凝固せるもので、これによつて卵黃をして中央に位置させるのである。卵黃の一部に灰白色の小さい圓體がある、之を胚盤といふ。親鳥に暖められると之が雛となり、殼を通して空氣を呼吸し卵黃と卵白とを養分として發育し、かくして約三週間ばかり經て殼を破つて外に出る。近來は適宜の溫度を與へ、人工によつて孵化させる方法もある。

第八　ひばり

要旨

本課は春風がそよ〳〵と麥の穗の上を吹いてゐる有樣。雲雀が雲井に節面白く鳴いてゐる樣子。

及び雲雀の習性の一斑を捉へて文章にしたのである。本文に於ける新字・新語の讀方・意義及び語法等に關する知識を授けて本文の讀解に習熟させると共に、春の野外の景趣に觸れしめて自然に對する美感を養ひ、また雲雀の形態・習性に關する知識の一斑を與へ、傍ら生物愛護の念を養ふ。

教材

あたゝかな　かぜ　が　そよそよと　むぎ　の　ほ　の　上　を　ふいて　ゐます。　ひばり　は　おもしろ　さう　に　さへづつて　ゐます。

ごらん　なさい、また　あそこ　から　も　一ぴき　上りました。　さへづり　ながら　だんだん　たかく　上つて　いきます。　もう　こゑ　ばかり　きこえて、すがた　は　みえません。　さへづる　だけ　さへづる　と、いま　に　また　下り、て　きませう。

ひばり　は　下りる　とき　には、けつして　す　の　ある　ところ　へ　下りません。けれども　上る　とき　には、すから　すぐ　とびたちます。

ゆふがた　に　なつて　も、おやどり　が　下りて　こない　とき　には、子ひばり　は　す　の　中　で、どんな　に　まつて　ゐる　こと　でせう。

（新字）せ　れ　ほ　ゑ　ゆ

區分

第一時　第一・二節（自二十一頁始行至二十二頁三行）に於ける形式及び内容の教授。

第二時　第三・四節（自二十二頁四行至二十三頁四行）に於ける形式及び内容の教授。

第三時　全文の復習及び應用。

教具

雲雀の實物又は標本。挿繪を擴大したる掛圖。

教法

（甲）教授上の注意

一、本課は舊讀本卷三第六課にあつた文章を多少修正して玆に載せたのである。また全文片假名であつたのを平假名に改め挿繪も書き改めてある。

二、本課の主眼點は二つに取られる。一つは春の野外の景趣を主とする場合と、今一つは雲雀を主とする場合とである。甲者を主とする場合には情的の取扱を主としなければならぬ。乙者を主とする場合には知的の取扱を主としなければならぬ。主眼點の定め方によつて力の入れどころが自ら違つて來る。私共の考は眞理は中間にありで、兩方とも採る考である。そこで教科書の内容を二分して、初行から二十二頁三行迄を第一段とし二十二頁四行から二十三頁四行に至る迄を第二段とする。而して第一段に於ては春の野外の景趣に觸れさせるを以て主眼とし、第二段に於ては雲雀の形態・習性を知らしめるを以て主眼とする。

三、内容は第一段に於ては

麗かな春の光が野原に漲つて居る。和かな風がそよ〳〵と麥の穗の上を吹いて居る。黄蝶・白蝶が麥浪の上に、また菜の花の上に戯れて居る。雲雀は雲際に節面白く囀つて居る。向ふからも一匹・二匹囀りながら上る、もう麥は雲間に隱れた、聲ばかりが地上に落ちて來る云々。

の範圍で主として春郊の氣分の流れて居る所を感味させる。第二段に於ては

雲雀は雀に似て稍大。主として原野にすむ。春季に叢間又は麥畑などの間に巣を營んで雛を育てる。晴天には空高く飛び、節面白く囀る。性甚だ怜悧で直接巣のある所へはおりない。二・三十間隔てた所におり地上を潜行して巣に到る。併し上る時には巣から直に飛立つ。保護鳥の一に數へられ、春四月から夏八月迄捕へてはならぬことになつて居る云々。

の範圍で雲雀の形態・習性に關する知識の一斑を平易に授ける。

四、文章に於て

「あたたかなかぜがそよそよとむぎのほの上をふいてゐます。ひばりがおもしろさうにさへづつてゐます」――如何にも平和な春の氣分が文中に流れて居る。思想と形式とを離さないで、此の點をよく味はさせる。

「あそこからも一ぴき上りました。さへづりながらだんだんたかく上つていきます。もうこゑばかりきこえて、すがたはみえません。」――活寫してある所をよく味はさせる。

「ゆふがたになつても、おやどりが下りてこないときには、子ひばりはすの中で、どんなにまつてゐることでせう。」――之は作者が自己内心の想像を表はしたのであるが、其の精神とする所は、子雲雀が親雲雀の歸りを待つ情を寫して、人の親子の愛情につき反省させようとするのである。

「そよそよ」――聲喩法で、春風が麥の穗の上を吹く音を寫したのである。

文段は第一段田圃の春色。第二段雲雀の常習。第三段教訓といふ風に分けてもよい。

五、語句に於ては大體次に示す範圍に從ひ、平易に說いて其の意義等を明確に知らしめる。

「あたたかなかぜ」――麗日和風の春の氣分をよく味はさせる。

「そよそよと」――「そよ」を重ねた詞で、靜かに風の吹く音をいふのである。適用と相俟つて其の意義・用法を明かにする。

「あたたかなかぜがそよそよとむぎのほの上をふいてゐます。」――春風がそよ〳〵と麥の穗を吹き、黄蝶・白蝶が其の間に飛んで居る平和な所をよく味はさせる。

「おもしろさうに」――さもおもしろきさまに見えること。「さう」は「さま」の轉。下なる「さへづつて」の意を限定して居る。適用と相俟つて其の意味及び用法を明かにする。

「さへづつて」――多く小鳥の鳴くに用ひる。小鳥が聲をつづけて節面白く鳴くときにいふ。

「あそこからも」―「あそこ」といふ所からして觀者の位置をしらしめる。また「ここからも」と相比較して其の意味を一層明かにする。

「一びき」―普通鳥の數へ方は一羽・二羽と唱へるが、土地により一匹・二匹と數へる所もある。ここは子供の唱へ方として咎めずに授ける。

「さへづりながら」―「ながら」は同時に二つの動作の起れることを示す助詞である。「さへづり且のぼる」といふ意味である。

「さへづりながらだんだんたかく上つていきます」―兒童の實經驗と結合してこの境地を心に浮ばさせる。

「もうこゑばかりきこえて、すがたはみえません。」―雲雀の姿が霞める天上に消え、聲のみ下界に落ちて來る實景がよくあらはれて居る。此の點は特に兒童の經驗と交渉して其の境地を想像させる。

「さへづるだけさへづると」―「だけ」は限度をいふ接尾語。「言ふだけいふ」「とるだけとる」といふ風にいろ〳〵適用して意味と用法とを明かにする。

「いまに」―やがての意。「たゞいま」のいまと混同せぬやうに注意する。

「きませう」―「きます」と比較して時の關係を明かにする。

「さへづるだけさへづると、いまにまた下りてきませう。」―鳴いて鳴いて鳴き盡し、歌つて歌つて歌ひ盡した後巣にかへるとは勇しくもあれば、可憐にもある。こんな所で兒童の心理の如何を覗いてみるがよい。「ませう」は推量の助詞。

「けつして」―「どうしても」又は「どうあつても」の意。この語の次ぎは必ず否定の語で結ぶ。副詞で「下りてきません」を限定して居る。

「けれども」―「しかれども」「しかしながら」などと同意で、下の意をうけて反對を表はす語である。用言の下について助動詞と助詞との用をなし、又單獨に「けれども」と用ひて、接續副詞の用をなす。こゝは後の用法に屬する。

「とびたちます」―身ををどらして立ちあがるをいふ。

「子ひばり」―巣に居る雲雀の子をいふ。

「どんなにまつてゐることでせう。」―「どんなに」は「どのやうに」の約。副詞で下なる「まつてゐることでせう」を限定して居る。適用と相俟つて其の意味及び用法を明かにする。

六、練習應用例

(一)語句の適用(短文作爲・書取法)

「ソヨソヨ」―ハルカセガソヨソヨトクサノ上ヲフイテキマス。

「オモシロサウニ」―テフテフガオモシロサウニムギノ上ヲトンデキマス。
「ナガラ」―カラスガナキナガラトンデイキマス。人ガハナシナガラアルイテイキマス。
「バカリ」―トモダチガモリノ中カラヨンデキマス。コエバカリキコエテ、スガタハミエマセン。
「…ダケ…」―コドモガオサヽヲノムダケノムト、ヤガテネテシマヒマス。
「イマニ」―モウ日ガクレマシタ。イマニ月ガ上リマセウ。
「ケツシテ」―ワルイトモダチトケツシテアソブコトナリマセン。
「ケレドモ」―ヒバリハアガルトキニハ、サヘヅリナガラダンダンアガリマス。ケレドモ下リルトキニハ、オチルヤウニハヤク下リマス。
「ドンナニ」―日ガクレテモナホイヘニカヘラナイトキニハ、オカアサンハドンナニマツテヰルコトデセウ。

(二)平假名の練習

「ほ」―ほん　ほたる　ほととぎす　ほばしら
「ゐ」―つくゐ　うゐき　うつくしきこゐ　きれいなゐ
「ゆ」―ゆかた　ゆふばえ　ゆび　ゆだんするな

(乙)教授の實際

第一時

一、實物・繪畫の觀察

掛圖を示し、兒童の經驗と交渉して、

1 麥畑のあること。　2 菜種の花が咲いて居ること。　3 蝶々がとんでゐること。　4 雲雀が彼方にも此方にも囀つてゐること等の點を觀察させ、春の氣分を惹き起し、それから讀本に入る。

二、通讀

自由に一・二回讀まさせる。

三、語句等の教授

兒童の質問に應じ、また敎師より質問して、次の新字の讀方・書方・語句の意義・語法等につき教授ける。

「あたゝかなかぜ」「そよそよと」「むぎのほの上」「ひばり」「おもしろさうに」「あそこ」「一びき」「さへづりながら」「こゑばかりきこえて」「みえません」と「みえます」「さへづるだけさへづると」「いまに」「ます」と「ませう」…等。

四、讀方練習

五六の兒童に讀ましめる。また一齊的にも。

五、內容の玩味

適切なる問答の下に內容を玩味させ、また敎師の玩味する所を話して一層深く玩味させる。

六、朗讀

個人的にまた一齊的に。

七、練習應用

(1)全文を綺麗に書取らしめる。

(2)「ほ」「る」を使つて他の物名を書かしめる。

(3)次の誤字を訂正させる。

「おもしろそうに」「さえづりながら」「こえばかりきこゑる」「すがたはみへません」「おりてきましよう」…等。

第二時

一、復習

前段を復習させる。

1形式上の要點につき。　2内容上の要點につき。

二、實物の觀察

雲雀の實物を示し、之が形態・習性等につき思想の整理をなす。(内容の程度・範圍は「教授上の注意の部」參照)

三、通讀

各自をして一回せしめ大意を捉へさせる。

四、語句等の教授

兒童の質問に應じ、また教師より質問して、次の新字の讀方・書方。語句の意義。語法等につき授ける。

「けつして」「下りません」と「下ります」「けれども」「とびたちます」「ゆふがた」「こない」と「くる」「子ひばり」「どんなに」「とでせう」…等。

五、讀方練習

五六の兒童に讀ましめる。

六、内容玩味

適切なる問答の下に次の諸點をよく理解させる。(實物指示)

形態―直覺的に。

習性―原野に棲む。麥畑などの間に巣を營む。空高く飛んで節面白く囀へづる。性怜悧で面接巣のある所へ下りぬ。しかし上る時は巣から直ちに飛び立つ。夕方に親鳥を待つ雛心等。

七、朗讀

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

八、練習

(1)全文を綺麗に書取らしめる。

(2)假名遣（誤正法）

「ゆうがた」「なやとり」「まつている」「ことでしよう」…等。

(3)「ゆ」を使つて事物の名を書かしめる。

第三時

一、復習

1各段につき讀ましめる。　2各段に於ける語句等につき問答。　3各段の內容玩味。　4全文の朗讀及び玩味。

二、練習應用

1語句の適用。（敎授上の注意の部參照）

2次の文を口唱して書取らしめる。（出來るだけ平假名で）

(イ)あたたかいかぜがそよそよとくきの上をふいてゐます。

(ロ)二はのてふ〳〵があちそひながらだんだんたかく上つていきます。

(ハ)うぐひすがもりのなかにないてゐます。こゑばかりきこえて、すがたはみえません。

(ニ)あかちやんはおちちをのむだけのむと、やがてねむつてしまふ。

三、話方

次の問の下に話さしめる。

1雲雀はどんな鳥か。

2雲雀鳴く野山の景色。

3雲雀のとんで鳴く有樣。

4雲雀が上るとき下りる時の有樣。

備考

雲雀

鳴禽類に屬する鳥で、羽毛・體貌及び習性は雀によく似て居る。主として原野に棲み、春季に叢中又は麥畑の間に巢を營み、雛を育てる。晴天には空中高く飛揚し、囀つて休まない。鳴くや其の聲可憐で人をして耳を傾けさせる。性甚だ怜悧で、直接巢のある所におりない。二三十間も隔てた所におり、地上を潛行して巢に到る。之れ巢の所在を知らしめないためである。保護鳥の一に數へられ、毎年四月十五日から八月十四日まで、捕獲することを禁じてある。籠に飼ふには、上に絲の網を張り、下に砂を敷き、擂餌と水とを與へて養ふ。

第九　小うま

要旨

本韻文は一少年が駒に打跨つて愉快に野山を乘り廻はる所を歌つたのである。敎授に於ては之が讀解に習熟させると共に、日曜日などには花笑ひ鳥歌ふ樂しき野山に散策して英氣を養ふこと。及び本文に流れて居る「少年の時活氣に任かして徒に事功を急ぐ時は却つて蹉跌する恐がある」と

いふ教訓に觸れさせるを以て要旨とする。

教材

はいしい、はいしい、
　あゆめよ、小うま。
山　でも、さか　でも、
　すんすん　あゆめ。
おまへ　が　すすめば
　わたし　も　すすむ。
あゆめ　よ、あゆめ　よ、
　足おと　たかく。」
ばかばか、ばかばか、
　はしれ　よ、小うま。
けれども　いそいで
　つまづくまい　ぞ。
おまへ　が　ころべば、
　わたし　も　ころぶ。
はしれ　よ、はしれ　よ、
　ころばぬ　やう　に。」
（新字）め　ぬ

區分

第一時　第一節（自二十三頁五行至二十四頁終行）に於ける形式及び内容の教授。

第二時　第二節（自二十五頁始行至二十五頁終行）に於ける形式及び内容の教授。

第三時　全文の復習及び應用。

教具

挿繪を擴大したる掛圖。

教法

（甲）教授上の注意。

一、本韻文は舊讀本にあつたのを其の儘ここに載せたのである。花笑ひ鳥歌ふ春の野山に、嘶く駒に鞭つて遊び廻はるといふことは、本當に樂しい遊びの一つである。本韻文の如きは子供の感興心をそそる恰好の材料である。

二、本課に於ては先づ本課の挿繪又は挿繪を擴大したる掛圖により、

1 此處は花笑ひ鳥歌ふ樂しき春の野山なること。

2 少年が馬上豐かに遊び廻つてゐること。

の諸點を觀察させ、自分も一つ此の好時節にこんな風に遊んで見たいといふ遊興心を惹き起し、

それから讀本に移り、そこにあらはれて居る內容をよく玩味させることにする。馬の形態・習性に關する知識の如きは强ひて玆に說く必要はない。

三、本韻文には一種の敎訓が流れて居る。卽ち第一節には馬が進めば騎手も亦進むといふ所謂共同の利。第二節には馬が轉べば騎手も亦轉ぶといふ所謂共同の害。卽ち馬と騎手とは常に利害を同じうするといふ敎訓が流れて居る。而して今一つは元氣よく進めるだけ進むがよいが、しかし妄りに進むやうでは却つて意外の蹉跌を招くことがある。故に事の功は急がずによく前後を顧慮し、堅實に進むがよいといふ敎訓が流れて居る。此の點は注意して取扱ふがよい。併し初めから此の敎訓を眞向に振翳して說くは拙劣である。幾度か讀み行く內に自然と彼等の腦に浮ぶやうに取扱ふのが上乘である。韻文取扱の呼吸はここにある。

四、語句等については次に示す範圍程度に從ひ、平易に說明して確實に知らしめる。

「はいしい」—馬を追ふ聲をその儘うつしたもので、「はい」は氣をつけて步め、「しい」は進行を促すの意味である。「はいしい、はいしい」は反復法によつたのである。因に記す。馬を止める時に「はいどう」又は「どうどう」といふ。

「あゆめよ小馬」—「小馬、あゆめよ」といふべき所を、倒置法をとつてかくいつたのである。「あゆめ」は命令形で「よ」は感動詞で語氣をつよめるために附けたのである。

「山でもさかでも」—「でも」は「にても」の轉化。「さか」は平坦でなく此方は低く彼方は高き路。ここは假令險阻越えがたき山でも坂でも卽ち自分の目的の前途に幾多の困難支障が橫つてゐてもの意があるものとして取扱ふがよい。

「ずんずんあゆめ」—「ずんずん」は一步一步而かも遲滯なく進み行く意である。次の「あゆめ」の意を限定して居る。ここでは我が進む前途には假令どんな困難支障が橫つてゐても、挫折することなく、進んで止むなといふ意味あるものとして取扱ふがよい。

「おまへがすすめばわたしもすすむ」—「おまへ」はもとは敬稱であつたが今は同輩又は目下のものに用ひる對稱的代名詞となつて居る。「すゝめば」は假定形である。「わたし」は「わたくし」の略で自稱代名詞である。玆では人生の目的は「吾離ㇾ群而索居」でなく、必ず相依り相助けて始めて生を全うし得べきものであるといふ意義が宿在して居るものとして取扱ふ。

「足おとたかく」—「足おと」は步むにつれて聞える足の音をいふ。「足おとたかく」は元氣よく、または活潑に進めの意あるものとして取扱ふ。

「ばかばか」—馬の蹄の音、高く步み行く聲をそのままうつしたもので、卽ち寫聲法である。「ばかばかばかばか」は反復法によつたのである。

「はしれよ、小うま」—「小うま、はしれよ」を倒置法によつて書いたのである。「はしれ」は命令

形で、「よ」は感動詞である。

「いそいでつまづくまいぞ」―「いそいで」は「いそぎて」の音便。「つまづくまいぞ」は「つまづくまじきことぞよ」の略轉で、「つまづくことなかれ」の禁止命令を未來にかけ旦婉曲にいひ表はした言葉である。「まい」は推量否定の助動詞で「ぞ」は強く事物を指定する意の助詞である。茲では人は大に我が目的に向つて勇進しなければならぬが、併し勇進するのみで毫も前後を振り向いて見るといふことがなかつたならば却つて意外の失敗を招くことがある。故に類りに事功を急がずに一歩一歩堅實に進むべきであるの意義あるものとして取扱ふ。

「おまへがころべば、わたしもころぶ」―「ころべば」は假定形。茲でも前記の如く人生の目的は離群索居でなく互に相依り相助けて始めて相互の幸福を增進することが出來るとの意味あるものとして取扱ふ。

五、練習應用例

(一)書取

小うまあゆめよ。　足おとたかくあゆめよ。　小馬はしれよ。　ころばぬやうにはしれよ。

(注意)口唱して書取らしめ、のち讀本にある「あゆめよ、小馬」「あゆめよ、あゆめよ、足おとたかく」「はしれよ小馬」「はしれよ、はしれよ、ころばぬやうに」と比較して一は常置で一は倒置であることの區別を知らしめる。

(二)語句の適用

「……でも……」―ひかうきは山でもうみでもとびこえていきます。

「すんすん」―にはのたけのこはすんすん大きくなります。

「すすめば」―きしやがすすめばわたくしもすすむ。

「けれども」―いそいでがくかうにいきなさい。けれどもつまづいてころばぬやうにきをつけなさい。

「いそいで」―たらうはいそいでいへにかへりました。おちよはいそいでがくかうにいきました。

六、本韻文の組立は二節からなり、其の調子は八七調から成つて居る。卽ち

はいしい、はいしい、　あゆめよ、小うま。
山でも、さかでも、　すんすん、あゆめ。
おまへが　すすめば、　わたしも　すすむ。
あゆめよ、あゆめよ、　足おと　たかく。

(乙)教授の實際

第一時

一、掛圖觀察

掛圖を示して、花笑ひ鳥歌ふ樂しき野山に、一少年が馬上ゆたかに乘り廻つて居る所を觀察させ、學習動機を惹き起す。

二、通讀

各自の讀書力に訴へて第一節を讀ましめ、其の大意を捉へさせる。

三、質問

彼等の讀んで分らなかつた所を質問させ、また教師よりも質問して、語句・語法等の意義・職能等を明かにする。

四、練讀

四五の兒童に讀ませる。

五、內容の玩味

適切なる質問の下に本文に表はれてゐる內容を玩味させる。また教師の話によつて人生と交渉する點をも知らしめる。

六、朗讀

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

七、練習應用

(1)書取—口唱して書取らしめ、後假名遣の誤を批正する。

すんずん　おまへ　わたし　あしおと　あゆむ　すすむ

(2)語句の適用

「……でも……でも」「すんずん」「あゆめよ」

第二時

一、復習

前節を復習する—形式上・內容上。

二、通讀

各自の力によつて第二節を讀ましめ、其の大意を捉へさせる。

三、質問

讀んで分らなかつた所を問はせる。また教師よりも問答して語句・語法等の意義・職能を明かにする。

四、練習

四五の兒童に讀ましめる。

五、內容の玩味

適切なる質問により、また教師の補說により、本文の內容を玩味させ、また人生と交渉する點を知らしめる。

六、朗讀

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

七、練習應用

(1)語句の適用

「けれども」「つまづく」「ころぶ」「ころばぬやうに」

(2)書取―次の語句を書取らしめ、書取つた後假名遣等の誤を正す。

ばかばか　はしる　小うま　いそぐ　つまづく　おまへ　ころぶ　ころばぬやうに

第三時

一、復習

第一節を讀ましめる。　語句等につき質問する。　內容につき問答する。

第二節を讀ましめる。　語句等につき質問する。　內容につき問答する。

全文を讀ましめる―個人的に一齊的に。またそらでも。

二、練習應用

(1)書取―全文を綺麗に書取らしめる。

(2)次の語句の異同を考察させる。

（はいしい、はいしい　ばかばか、ばかばか）　（あゆめよ、小うま　はしれよ、小うま）

（おまへがすすめは、わたしもすすむ　おまへがころべば、わたしもころぶ）

（あゆめよ、あゆめよ、足おとたかく　はしれよ、はしれよ、ころばぬやうに）

三、話方

掛圖を示し、之に對する各自の感想を自由に發表させる。

（附記）本課の次に平假名五十音圖をのせてあるが、之は一時間乃至二時間を費して、或は縱に或は横に讀ましめ、また音の上から、字形の上から相似的のものは之を比較して、其の異同を明確に知らしめ、而して幾度も書かしめて、書寫にも習熟させる。

備考

乘馬

馬に乘るには、始めのうちは手綱を確と握り、馬の背によく乘り、靜に平地を乘廻す。次第に乘具合が分つたならば徐に駈けさせる。乘馬の姿勢も出來、馬の體の振動と我が身の落付きとがよく調和したならば、足並を我が意の如く、或は急に或は緩く、平地・山坂の別なく乘りならすがよい。馬の裝具はすべて丈夫にし、手綱・鐙等の切れ又落ちることの無いやうに十分注意する。馬に馴れない少年の乘馬は頗る危險であるから、強ひて試みないやう注意するがよい。殊に小馬に於ては尙更である。

要旨

第十　牛ト馬

本課は牛と馬との形態習性を比較しながら記述した一種の說明文である。敎授上新字・新語句の讀方・意義及び語法等を授けて本文の讀解に習熟させるは勿論、進んで二者の用途の一斑をも補說して、我が國主要の家畜たることを知らしめ、傍ら是等を愛護するの念を養ふを以て要旨とする。

教材

牛ニハ ツノガ アル ケレドモ、馬ニハ アリマセン。馬ニハ タテガミガ アル ケレドモ、牛ニハ アリマセン。

牛ハ カラダガ 太クテ、足ハ ミジカウ ゴザイマス。馬ハ カラダガ ホソクテ、足ガ ナガウ ゴザイマス。

牛ノ ツメハ 二ツニ ワレテ キマスガ、馬ノハ ワレテ キマセン。

牛ハ 力ガ ツヨイ ケレドモ、アルク コトガ オソウ ゴザイマス。馬ハ 牛ヨリ ヨワイ ケレドモ、ハシル コトガ ハヤウ ゴザイマス。

ドチラモ 大ソウ ヤク ニ タツ ドウブツ デス。

（新字）牛　馬　力　大

區分

第一時　第一・二節（自二十八頁始行至二十九頁三行）に於ける形式及び內容の敎授。

第二時　第三・四節（自二十九頁四行至三十頁三行）に於ける形式及び內容の敎授。

第三時　全文の復習及び應用。

教具

牛と馬の標本。挿繪を擴大したる掛圖。

教法

（甲）教授上の注意

一、本課は舊讀本卷三第八課にあつたのを字句の上に少々修正を加へて玆に載せたのである。又舊讀本は平假名であつたが變化の上から片假名に書きかへてある。挿繪は舊讀本には全く無かつたが、修正讀本には牛と馬とが新らしく描かれてある。兒童の感興をそそる教材では無いが、我が國に於ける有用な家畜として是非知らしむべき大切な材料である。

二、本課に於ける教授の主眼點は牛と馬との形態・習性を比較して、其の異同及び特徴を知らしめようと言ふ點にある。卽ち

牛	馬
角がある。	たてがみがある。
からだが太くて足が短い。	からだが細くて足が長い。
爪は二つにわれて居る。	爪はわれて居ない。
力が強いが歩くことが遲い。	力は牛より弱いが走ることが早い。
大そう役に立つ動物である。	大そう役に立つ動物である。

の諸點を理會させようとするにある。併し私共の考はこれ以外に「ドチラモ大ソウヤクニタツドウブツデス」といふ本文の末節の所で、二者の用途につき適度に附說して人生との關係を或る程度まで知らしめて置きたいと思ふ。このことは極めて必要な補充的知識であるのみでなく本課の生命も一層之によつていき〳〵して來ると思ふ。二者の用途に關する範圍程度の限定は大體次の如くである。

牛—田を耕す。荷物を負ひ車を挽く。肉及び乳は滋養に富む。角と蹄は諸種の細工に用ひる。皮は靴などをつくるに用ひる。

馬—田を耕す。荷物を負ひ車を挽く。軍事上に重く用ひる。肉は食す。蹄及び尾は諸種の細工に用ひる。皮は大鼓などを張るに用ひる。

三、文字・語句・語法等については次に示す程度に基き適切に取扱ふ。

「アリマセン」—「アリマス」と比較して打消の職能を明かに知らしめる。

「タテガミ」—立髮の義で馬の頸に叢生して居る長き毛をいふ。

「太クテ」—「太クアリテ」の略。形容詞が副詞に轉じたもので、下に略せられてゐる「アリ」の意を限定して居る。

「ミヂカウ」—「ミヂカク」の音便。形容詞が副詞に轉じたもので、下の「ゴザイマス」の意を限定して居る。

「ホリクテ」—「ホックアリテ」の略。形容詞が副詞に轉じたもので、下の略されてある「アリ」の意を限定して居る。實物・模型又は掛圖により牛と比較して其の相違する點を明かに知らしめる。

「ナガウ」—「ナガク」の音便。形容詞が副詞に轉じたもので、下の「ゴザイマス」の意を限定して居る。實物模型又は掛圖により牛と相比較して其の相違する所を明かに知らしめる。

「ツメハニツニワレテ」—馬と比較して其の異同を明かにする。爪は指の先に生ずる堅き骨質のもので表皮の變形したものである。

「オリウゴザイマス」—「オソウ」は「オソク」の音便。下の「ゴザイマス」を限定する。

「牛ヨリヨワイケレドモ」—「ヨリ」は比較して標準を示すに用ひる助詞である。「コレヨリアレガ大キイ」といふやうに、適用にもよつて其の意義・用法を明かに知らしめる。

「ハヤウ」—「ハヤク」の音便。「オソウ」と比較して其の觀念を明かにする。

「ドチラモ」—いづれの方もといふ意。「モ」は不定の方向を示す代名詞。適用と相俟つて其の意味・用法を明かにする。

「ヤクニタツ」—「ヤク」は利益の意。「ヤクニタツ」は用をなすに足るの意である。ここは幾つか

實例をあげて「ヤクニタツ」の內容を明かにするがよい。前記「ニ」の部參照。

「ドウブツ」—生物の一。知覺を有し、自由に運動する物。實例をあげて內容を明確にする。

「牛」「馬」「力」—は新漢字であるから、讀み方を授け、書き方に習熟させる。

「大」は讀替文字で「タイ」と讀ませる。

四、其の他

「ケレドモ」が多く使用されてあるから、之を機會として此の接續詞によつて相反せる二つの思想が相連續されて居る點に注意させる。また適用にも習熟させる。

「ミジカウ」「ナガウ」「オソウ」「ハヤウ」等音便が多くでてゐるから、他の種々の場合に適用させて意味及び用法を一層明かにする。また假名遣にも注意させる。「足ガミジカウゴザイマス」の「ガ」と「ツメハ二ツニワレテキマスガ」の「ガ」とは其の職能及び用法を異にしてゐるから注意して取扱ふ。

五、文章に於て、

記述が雙關的になつて居る所に注意する。而して二者を比較するに一方からのみはじめないで交互に組合せてある點にも注意する。例へば

牛よりはじめて馬に
馬よりはじめて牛に　第一節

牛よりはじめて馬に
牛よりはじめて馬に
牛よりはじめて馬に
一しよに……　第二節
——第三節
——第四節

のやうに第一節はそれである。また比較する事項にもそこに變化がある、卽ち

角の一項
たてがみの一項　第一節
からだと足の二項
つめの一項　第二節
力と速さの二項——第三節

といふやうになつて居る。更に吟味すると文形にも變化がある。例へば

「牛ニハツノガアルケレドモ馬ニハアリマセン」—一項を比較した場合には之を連續させてある。

「牛ハカラダガ大クテ、足ガミジカウゴザイマス。馬ハカラダガホソクテ足ガナガウゴザイマス」—二項を比較した場合には文が餘り長くなるから二文に切つて對立させてある。

のやうである。また末節の如きは牛馬の役立つ內容をそれと言はないで、兒童の經驗想像に訴へ或は敎師の補說に訴へ、最後の一句に動物の概念を與へようとした所などは用意中々周到である是等の點は十分注意して取扱ふがよい。

六、本課は話方の修練材料として最も都合がよいから次の如き問題の下に各自の知つた所を語らしめるがよい。

1、牛と馬と違ふ所をいつてごらん。くらべて、また別々に。

2、牛の役立つ所をいつてごらん。
4、馬の役立つ所をいつてごらん。
4、動物とはどんなものをいふのですか。

七、練習應用

(1)漢字の適用。

「牛」―牛のつの　牛の足　牛の力　牛と馬　大きな牛
「馬」―馬の足　馬の力　馬と牛　大きな馬　小馬
「力」―力のつよい人　力のよわい人　力のあるどうぶつ

(2)語句の適用。

「けれども」―馬にはつのがないけれども、牛にはあります。　牛にはたてがみがないけれども、馬にはあります。
「ミジカカ」―女のかみはながうございますが、をとこのかみはみじかうございます。
「ナガカ」―つるのくちばしとくびとあしとはながうございます。
「おそう」―こどものあゆみはおそうございますが、おとなのあゆみははやうございます。
「はやう」―おとなのあゆみははやうございますが、としよりのあゆみはおそうございます。
「どちら」―牛も馬もどちらも大そうやくにたつどうぶつです。

(3)文形の適用

(イ)「牛にはつのがあるけれども、馬にはありません」―にはとりにはとさかがあるけれども、あひるにはありません
(ロ)「牛は力がつよいけれども、あるくことがおそうございます」―しかは力がよわいけれども、はしることがはやうございます。

八、本課のやうな教材は初めから本を開いて讀ましめ、分からぬ漢字・語句などあれば質問に應じて之を授け、それから文と掛圖（又は模型）とを對照しつつ、其の内容を十分理會させる方法を取るがよい。而して用途に對する補說は末節を取扱ふ際兒童の經驗と交渉しつつ授ける。要するに形式に卽して内容を吟味するの方法をとるがよい。

(乙)教授の實際

第一時

一、通讀

目的を指示し各自をして一讀させる。

二、語句等の教授

兒童の質問また敎師よりの質問により次の文字及び語句等の讀方・意義を授ける。

「牛」「馬」「ケレドモ」「アリマセン」と「アリマス」「タテガミ」「太クテ」「ミジカカ」と「ナガカ」「キマス」と「キマセン」……等。

三、讀方練習

五六の兒童に讀ましめる。個讀又は齊讀。

四、內容吟味

掛圖と對照して內容を吟味する。

五、復習

語句、　語法等につき復演する。

六、朗讀

個人的にまた一齊的に。

七、練習應用

(1)假名遣(正誤法)

「ミジカウゴザイマス」「ナガウゴザイマス」「アレテキマセン」

(2)語句の適用(短文作爲)

「ケレドモ」「ミジカウゴザイマス」「ナガウゴザイマス」…等。(教授上の注意の部の練習應用例參照)

(3)漢字練習

「牛」「馬」(教授上の注意の部練習應用例參照)

第二時

一、復習

前習の所を復習する—形式上內容上其の要點につき。

二、通讀

本日の所を各自をして自由に讀ましめる。

三、語句等の教授

兒童及び教師の互の質問により、次の文字・語句等の讀方・意義を明かに意識させる。

「力」「オソウゴザイマス」「ムヤカゴザイス」「ドチラモ」「大ソウ」「サクニメタ」「ドウブツ」……等。

四、讀方練習

五六の兒童に讀ましめる。

五、內容吟味。

掛圖と交涉し、形式と卽して內容を吟味する。牛と馬の用途につき補說。

六、朗讀

個讀又は齊讀。

七、練習應用

(1)漢字の練習

「力」「大」……等(教授上の注意の部練習應用例の所參照)

(2)假名遣(正誤法)

「大ソウ」「ドウブツ」「ハヤウゴザイマス」「オソウゴザイマス」

(3)語句の適用(短文作爲)

「オソウゴザイマス」「ハヤウゴザイマス」「ドチラデモ」

第三時

一、復習

各節を讀ましめる。　各節に於ける主要語句等につき問答する。　各節に於ける內容を吟味する。

二、練習應用。

(1)文形の適用(教授上の注意の部練習應用例の所參照)

(2)全文を次の如く改作させる。

牛と馬との位置を轉換して書かしめる。

三、話方

次の表を示し、初めに牛と馬との相違を比較對照して話さしめ、次に牛と馬との形態習性につき別々に話さしめる。

	ツノ	タテガミ	カラダ	足	ツメ	力	アルクコト
牛	アル	ナイ	太イ	ミジカイ	二ツニワレテヰル	ツヨイ	オソイ
馬	ナイ	アル	ホソイ	ナガイ	ワレテヰナイ	牛ヨリヨワイ	ハヤイ

備考

牛は偶蹄類に屬する反芻獸である。牝牡とも頭に二本の角を有する。體肥大で、毛短く、色には黑・赤・白・斑等種々ある。尾は細くして小さい。脚短く蹄は二つに分れ歩むこと遲緩である。性頗る溫和であるが、一度怒るときは極めて兇暴で、相手を死に至らしめれば止まぬ。力强く、長く勞働に堪へるから、田を耕し、當を負ひ、車を牽くに使役する。肉及び乳は頗る滋養に富む。角と蹄とは諸種の細工に用ひ、皮は革として靴・馬具などを作るに用ゐる。最も有用な家畜の一で、和種と洋種とある。和種は古來から但馬の產を著名とする。其の他丹波・丹後・攝津・備前・備後等も亦名がある。神戸牛といふは多く此の地方の產である。和種は主として勞働に使役しまた食用に供する。洋種は其の種類多く、いづれも乳をしぼり、食用に充てる。

馬

馬は哺乳動物で、奇蹄類に屬する。體は牛に比し肥大でないが、軀幹長大で、勇壯活潑の容姿を具ふ。頭及び顏面は頗る長い。耳は直立して自由に動く。頭と頸には美しき鬣がある。尾は頗る長く、これを揮つて蠅・虻・蚊などの害蟲を拂ふ。四肢は細長なるも、强健であるから走ること速かである。性質溫順でよく人に馴れる。農作上に、運搬上に、乘用上に、其の他種々の方面に使用されて居る。殊に軍事上では重要なものとし、各國競うて之が改良に腐心して居る。肉は食用に、皮は太鼓等を張るに、蹄は細工物に、尾は飾の底編に、糞尿は肥料等に供し、其用途頗る廣い。我が國では薩摩・秋田・仙臺・三春・南部(岩手・青

森）等の產が最も有名である。種類には日本種・雜種・西洋種などがあるが、純粹の日本種は體軀矮小で、現今飼育するもの少なく、西洋種が最も多く飼養されて居る。

第十一　のみのすくね

要旨

本文は昔野見宿禰が當麻蹶速と力を角べ怪力をあらはして蹶速を殪ふし、時の天皇に褒められたといふ人口に膾炙する歷史的傳說である。敎授に於ては新字の讀み方、書き方。新語句の意義。語法等につき知らしめて、本文の讀解に習熟させると共に、相撲は古くから我が國に傳はる一種の國民的遊戲なること、及びこれに對する感興心をそそり、傍ら高慢は常に深く慎むべきことを知らしめる。

敎材

むかし、たいま の けはや と いふ 力 の つよい 人 が ありました。だれ と すまふ を とつて も、まけた こと が ありません。それで

「みんな よわい もの ばかりで、じぶん の あひて に なる もの は 日本中 に 一人 も ない。」

と いばつて ゐました。

それ が 天子 さま の お耳 に はいつて、のみ の すくね と いふ 人 と すまふ を おとらせ に なりました。

けはや は その 名 の とほり、ける こと が はやかつた のです。しかし すくね も つよくて、すばしこい 人 でした から、なかなか けられません、かへつて すき を れらつて、たつた 一けり で、けはや を けたふしました。

見て ゐた 人 は、みんな 一ど に こゑ を たてて、すくね を ほめました。

（新字）中　刊　名　見

區分

第一時　第一節（自三十頁四行至三十一頁七行）に於ける形式及び內容の敎授。

第二時　第二節（自三十一頁八行至三十三頁二行）に於ける形式及び內容の敎授。

第三時　全文の復習及び應用。

敎具

挿繪を擴大したる掛圖。

敎法

（甲）敎授上の注意

一　本課は舊讀本卷三第五課にあつたのを二三點修正を加へて轉載したことになつて居る。また片假名文であつたのが平假名文に書きかへてある。一般に歷史的傳說は、どの子供にもすかれ

るものであるが、殊に力角べと言ふやうな勇壯なものは手を拍つて歡迎することは事實である。此の點に於て本課は兒童に適する好材料といつてよい。

二、本課を取扱ふには別に書物から離れて野見宿禰と當麻蹶速とについて話すことは要らぬ。文章に卽して其の內容を味つて行くといふ方法がよい。卽ち次のやうに取扱つて行く。

「むかしたいまのけはやといふ力のつよい人がありました。」―茲では「むかし」といふのは今から二千年程前のことである。「たいまのけはや」といふは人の名である。この人は大層力の强い人で、牛の角でも握つた儘。ポキッと折り、鐵の棒でも引き延すといふほどの人であつた。と知らせる。

「だれとすまふをとつてもまけたことがありません。」―茲ではそんなに力のある人であつたから、これ迄幾百人幾千人といふ多くの人々と相撲をとつて見たが一度も負けたことがない。實際に力の强い人であつたのです。と知らせる。

「みんなよわいものばかりでじぶんのあひてになるものは日本中に一人もない。」―茲では、これは蹶速のいつた言葉であるが、中々どうも鼻息が荒い。殊に「日本中に一人もない」といふ所などはなんと傍若無人の言であるまいか。餘り高慢の鼻が高いと、やがて折れることがあるからねと知らせ後に宿禰に蹶倒されて死に至つたことの豫備線となして置く。

「それが天子さまのお耳にはいつて、」―茲では「それが」といふことは「みんなよわいものばかりでじぶんのあひてになるものは日本中に一人もない。」といばつてゐた其の言葉をいふのです。此の言葉が其の時の天子樣のお耳に這入つたのです。天子樣は之をお聞きになつて「蹶速は日本一の力持か、えらい男ぢや。しかし誰かこれと力を角べるものはないか。」と仰せられたのです。と知らせる。

「のみのすくねといふ人とすまふをおとらせになりました。」―茲では天子樣が「誰か蹶速と力をくらべるものは無いか。」と仰せになつたものだから、家來の一人が「野見宿禰ならば大丈夫勝ちませう」と申上げたのです。そこで天子樣は直に宿禰をお呼びになつて、「蹶速と力をくらべよ」と仰せになつたのです。さあ、此の勝負がどうなることであらうかと、多くの人々が其の日の來るのを待つてゐたのです。と知らせる。

「けはやはその名のとほり、けることがはやかつたのです。」―茲では「蹶速」といふことは足で相手を蹶ることが大そう速いといふ意味で、蹶速は其の名通り蹴ることが頗る速かつたのです。と知らせる。

「しかしすくねもつよくて、すばしこい人でしたから、なかなかけられません。」―茲では愈〻二人が土俵場に現はれて力角べをやつたのです。天子樣はじめ、多くの人々は片唾をのんで勝負

如何にと眺めてゐたのです。しかし宿禰も中々力強く、其の上敏捷な人であつたから、蹴速が蹴らうとしても容易に蹴ることが出來なかつた。と知らせる。

「**かへつてすきをねらつてたつた一けりで、けはやをけたふしました。**」—茲では蹴速が一蹴りで宿禰を倒ふさうとあせつたが、却つて宿禰に隙をねらはれ、たつた一けりで殪されて仕舞つたのです。と知らせる。

「**見てゐた人は、みんな一どにこゑをたてて、すくねをほめました。**」—茲では平生から蹴速の力自慢を聞いて快く思はなかつた多くの人々は一度に聲をあげて快哉を叫んだのです。天子樣も宿禰の力の强いのをお褒めになりました。そしてこれが日本に於ける角力の初めといふことである。と知らせる。

三、文字・語句・語法等については大體次に示す範圍程度に從ひ適切に知らしめる。

「**のみのすくね**」—人の名で、今から二千年程前の人。なさけ深い人であつたが、また大層力の强い人でもあつた。

「**たいまのけはや**」—人の名である。大層力があつたものだから「おれは日本一だ。若し天下におれと力をくらべようといふものあれば、死を以て勝負を決せようといばつてゐた人である。

「**力のつよい人**」—具體的に例をあげて說明するがよい。日本書紀に「其爲人也强力、以能毀角申鈎」とあるからこれ等を例にとつて說明するもよい。

「**すまふ**」—古は「すまひ」といつた。二人取組んで、力をたゝかはして勝負を爭ふことである。

「**とつても**」—「とりても」の音便。

「**それで**」—「それであるから」の略。接續詞で上文と下文とを接續する用をなす。適用と相俟つて用法にも習熟させる。

「**みんなよわいものばかりで**」—「ばかり」は他に比すべきものなきの意。茲では力のあるものは自分一人といふいかにも鼻の高い所に注意させる。

「**じぶんのあひてになるものは日本中に一人もない。**」—「あひて」は相對して爭ふ人をいふ。さきに「みんなよわいものばかり」といひ、茲に「じぶんのあひてになるものは日本中に一人もない」といふ。其の言ひかたが一歩は一歩に强く、高慢の鼻の益〻高く動く所に當人の爲人がよくあらはれて居る。この點はよく注意させる。

「**いばつて**」—「いばりて」の音便。肩を張つてたけ〴〵と威張る其の樣子をよく想像させる。

「**天子さま**」—天皇の別號で、天に代つて萬民を治め給ふといふ所から斯く名づけ奉つたのである。「さま」は敬意を含む接尾語である。茲の天子は垂仁天皇をさし申すのであるが、兒童には知らさなくてもよい。

「お耳」―敬意を含む「お」の接頭語に注意させる。

「おとらせになりました。」―「お」の接頭語に注意。「とら」は「とる」の將然形。「せ」は使役助動詞の連體形である。こゝでは「とら」と結合して名詞形に變轉したのである。

「その名のとほり」―茲では「その」の職能を確實に知らしめる。即ち蹶速といふ代表に使はれてゐることを。

「しかし」―「しかしながら」の略。上の事情と其の事情から起る反對の事情とを接續する詞である。適用と相俟つて其の職能を理解させ、用法に習熟させる。

「すばしこい人」―「すばやい」に同じ。「す」は接頭語。行動の敏捷なるをいふ。實例をあげて其の意味を明かにする。

「なかなか」―「容易に」「たやすく」などの意。下の「けられません」の意を限定して居る。

「けられません」―「ける」と「けられる」。「けません」と「けられません」と比較して、受身になつてゐる點をよく理解させる。

「すきをねらつて」―敵の油斷をねらつての意。適用と相俟つて其の意味・用法を明かにする。

「たつた一けりで」―「たつた」は文語の「たゞ」に同じ。わづかの義である。「一けり」は一度だけ蹴ることである。宿禰の力量の勝つてゐることがこゝに躍如としてあらはれて居る。

「けたふしました」―足で蹴てたふすことである。茲は只倒したのでなく、殺した即ち死に至らしめたのである。高慢は遂に自己の生命を亡ぼしたといふ悲慘の一幕である。慢は損を招くといふことを信實に說くがよい。

「こゑをたてて」―「どうもえらい男」とか、「何とまあ力の強い人だらう」とか、口々にいふことである。適用と相俟つて用法にも習熟させる。

「すくねをほめました。」―蹶速の死を見ながら一方をほめるといふことは、何だか同情のない態度のやうであるが、蹶速は常に「天下我に抗するものあらば、我れ死を以て勝敗を決せん」と大言壯語したことが、時の人の癪に障り、其の上雙方共命をかけての勝負であるから、多くの見物人も其の氣になり、勝負如何にと待ち構へてゐた揚句に、好意を有つ宿禰の方が勝つたものだから、かく一同に聲をたてて、ほめたのである。因に記す。歷史の示す所によると、宿禰は肋骨及び腰を折つて死に至らしめたとあるが、これはちつと殘酷な話でもあるから强ひて知らしめる必要がない。編者も勿論此の精神であらうと思ふ。

四、「中」「子」は讀替文字で「名」「見」は新漢字である。また「一人」はヒトリと讀ませる。而して「中」は後に表はれて來ぬから十分知らしめて置く。文中蹶速の言葉は口語常體になつて居るから注意して取扱ふ。

五、本課は可成一纒めにして授けたいと思ふが、少し長すぎるから、二つに分けることにした。しかしかうなると、折角結末の如何を知りたいといふ兒童の興味心を殺ぐことになるから、初め全文をざつと一讀させ、其の大要を問答し、それから區分に基いて授ける方法を執るがよい

六、練習應用例

(一)漢字の適用。

「中」―日本中　かない中　むら中　まち中……等
「名」―人の名　とりの名　犬の名　れこの名　本の名……等
「見」―花を見る　すまふを見る　うみを見る……等。

(二)語法上(受身・敬語)の適用

(1) けはやはすくれをけません。
すくれはけはやにけられません。

(2) みんながけはやをわらひました。
けはやがみんなにわらはれました。

(3) みんながすくれをほめました。
すくれがみんなにほめられました。

(4) ききました。
おききになりました。

(5) とらせました。
おとらせになりました。

(6) よみました。
およみになりました。

(7) よませました。
およませになりました。

(8) しかりました。
おしかりになりました。

(9) とらせました。
おとらせになりました。

(三)語句の適用(短文作爲)

「ばかり」―けふすまふをとりましたがみんなよわいものばかりでありました。
「あひて」―ぶんきちくんは大そう力がつよいから、すまふをとつてもあひてになるものは一人もありません。
「いばつて」―ともきちくんはおれは一ばん力があるといつて大そういばつてゐます。
「しかし」―ともきちくんは大そう力がつよい。しかしぶんきちくんにはおよばないです。
「すばしこい」―おちよさんはすばしこい子です。
「すきをねらつて」―ぼくは自ぐみにとらへられたが、すきをねらつてにげてきました。
「たつた」―かとうきよまさは、大きなとらをたつた一つきで、つきころしました。
「こゑをたてて」―ぼくはちやうきよりきやうそうで一とうになつたときみんなこゑをたてて、ほめました。

(乙)教授の實際

第一時

一、通讀

目的を指示して全文を通讀させ、其の要點につき問答し、本傳說の大要を知らしめる。次に本日の所即ち第一・二節を更に念を入れて一・二回讀ましめる。

二、質問

讀んで分らなかつた文字・語句につき質問させる。また教師よりも質問して、其の讀方・意義等を明確に知らしめる。

三、讀方練習

五六の兒童に讀ましめる、また一齊的にも。

四、內容の玩味

適切なる問答によつて內容を十分味はさせる。(教授上の注意「二」の部參照)

五、朗讀

既に內容が十分味はれたから、此の心理狀態の下に幾度か讀ましめる。

六、練習應用

(1)假名遣につき。　(2)漢字につき。　(3)語句の適用(短文作爲)。

第二時

一、復習

前に授けた所を形式・內容の兩方面に亙り、其の要點につき復習する。

二、通讀

本日の所卽ち第三・四節を一讀させ其の大意を捉へると同時に語句等の分らぬ所をしらべさせる。

三、質問

新文字・新語句・語法等につき質問する。

四、讀方練習

四五の兒童に讀ましめる。また一齊的にも。

五、內容の玩味

適切なる問答の下に十分味はさせる。(教授上の注意の「二」の部參照)

六、朗讀

個人的にまた一齊的に。(茲で讀解に習熟させる)

七、練習應用

(1)假名遣につき。　(2)漢字につき。　(3)語句につき(短文作爲)

第三時

一、復習

(1)各節每に讀ましめ、主要語句・語法等につき問答する。　(2)全文を讀ましめ、內容につき吟味する。　(3)次の問に對し讀本を讀んで答へさせる。

(1)當麻蹴速が自分が日本一の力もちといつて威張つてゐたことは書物のどこにかいてあるか。
(2)蹴速と野見宿禰とが力を角べ、どちらも負けず劣らず爭つてゐたが、とうとう蹴速がまけて、一同の人が宿禰をほめたてたことについては、それは本のどこに見えてゐますか。
(3)蹴速の自慢は本のどこに見えてゐますか……等。

二、練習應用

(1)語句の適用。(短文作爲又は口頭上)
(イ)おとらせに　(ロ)けられません　(ハ)けたふされました　(ニ)ほめられました　(ホ)わらはれました

(2)假名遣及び漢字の練習
「ニフボンヤユウ」「テンシさま」「ヒトのナ」「すまふをみる」(以上片假名を漢字に直させる)「すまう」「よはい」「あいて」「けたほす」「こえ」
(以上の誤を直さしめる)

備考

野見宿禰

野見宿禰は出雲の人で、勇力を以て聞えて居た。垂仁天皇の時、當麻村に當麻蹴速といふものがあつた。勇敢多力で、能く角を毀り鈎を伸ばした。恒に衆に語つていふやう、天下に我が力に抗するものあらば、死を以て勝負を決しようと。天皇之を聞き、蹴速は天下の力士である。當世之に敵するものあるかと、群臣に尋ね給うたに、或る人野見宿禰をすすめた。天皇が宿禰に命じて力を角せしめ給うた。宿禰足を擧げて、蹴速の肋骨及び其の腰を蹴つてこれを折り、遂に死に致らした。天皇宿禰の勇力を賞し、蹴速の地を以て悉く賜うた。爾來留つて朝廷に仕へた。

角力

角力は一種の武技で、太古から行はれてゐた。古傳に建御雷命と建御名方命と力競べをしたとある。垂仁天皇の時野見宿禰と當麻蹴速とが禁中に於いて力を角した。降つて聖武・桓武・平城・嵯峨・後三條・後白河の御代には、大に其の技を奬勵された。德川時代には殊に隆盛を極めた。種類に勸進相撲・大相撲・花相撲等。力士格に横綱・大關・關脇・小結・前頭等。競技の手に裏表四十八手。式に土俵入。役に力士・年寄・行司・呼出し・床山等がある。東京両国院は本場所である。肥後熊本の吉田家に相撲道の故實を傳へ、行司の宗家として横綱免許の特權を有してゐる。横綱といふのは化粧褌の上に横綱を張ることを許され、日下開山の稱號をとなへることが出來るので、力士の無上の光榮とする所である。

第十二　タケ

要旨

本課は筍の成長の有樣及び竹の役立つことにつき說いた文章である。本文の讀解に習熟せしめると共に、竹及び筍の發育・形態及び用途に關する知識を與へ、傍ら自然と人生との關係を知るの一端に資する。

教材

四五日　マヘ　ニ　アタマ　ナ　ダシタ　タケノコ　ガ、モウ　コンナニ　ノビテ、私　ノ　セイ　ト　オナジ　クラキ　ニ　ナリマシタ。　コレ　カラ　二三日　タツタラ、マダ　ズツト、タカク　ナリマセウ。　ダンダン　ノビル　ト、ヤタノカ　ハ　ガ　ガチテ、アチアチシタ　竹　ニ　ナリマス。

各説　第十二　タケ

竹ハ イロイロナ ヤク ニ タチマス。ダイ一 タケノコガ ノベラレマス。タケノカハ デハ モノ ヲ ツツミマス。フデ ノ ヂク、モノサシ フエ ザル カゴ ナド、竹 デ 作ツタ モノガ タクサン アリマス。竹馬モ 竹 デ コシラヘ、タコ ノ ホネ モ 竹 デ 作リマス。

ソノ ホカ、竹 ノ スダレ モ アリ、竹 ノ カキネ モ アリマス。タル ヤ ナケ ニモ、大テイ 竹 ノ タガガ カケテ アリマス。

モノホシザヲ ニモ、ハタザヲ ニモ、竹 ヲ ツカヒマス。竹 ノ ツカヒミチ ハ マダマダ タクサン アリマス。

新字）私　竹　作

區分

第一時　第一節（自三十三頁三行至三十四頁二行）に於ける形式及び内容の教授。

第二時　第二節（自三十四頁三行至三十五頁五行）に於ける形式及び内容の教授。

第三時　第三・四節（自三十五頁六行至三十六頁三行）に於ける形式及び内容の教授。

第四時　全文の復習及び應用。

教具

竹及び筍の實物。　挿畫を擴大したる掛圖。

教法

（甲）教授上の注意

一、本課は舊讀本卷三第十課にあつたのを、多少の修正を加へて玆に轉載したのである。挿繪は大體舊と同じいが、畫風に於て異にして居る。本教材は理科的材料で、日常生活と大いに交渉して居る點に於て大切な教材である。教授に於ては感じさせるといふことでなしに、知らしめるといふことを主にして取扱ふがよい。

二、本文は二段に分けて取扱ふを以て上乘とする。即ち本課の初めから三十四頁二行迄を第一段とし、三十四頁三行目の初めから本課の終までを第二段とする。即ち第一段に於いては筍がだん〳〵成長して普通の竹となるまでの發育の經過を述べ、第二段は專ら竹の人生に對する用途を述べたのである。表にして示せば次のやうである。

- 竹
  - 第一段—竹の發育の狀態。
  - 第二段
    - 第一節—竹の效用に對する總叙。
    - 第二節—竹の效用（其の一）
    - 第三節—竹の效用（其の二）
    - 第四節—竹の效用（其の三）及び結收。

三、文章に於て

（一）作者—第一段（四五日マヘニ竹ニナリマス）は子供の獨話として取扱ふがよい。第二段は子供の獨話としては子供の實際と離れ、わざとらしくなるから、別の人即ち記者の說話として取扱ふがよい。

つまり此の文章は作者に於て統一がないといふことになる。此のことを頭に置いて取扱はないと、漠然たる取扱になり終るの恐がある。

(二)記述―第一段に於ては

(1)四五日マヘニアタマチダシタタケノコガ、モウコンナニノビテ、私ノセイトオナジクラヰニナリマシタ。―一兒童の現在的直觀の記述。
(2)コレカラ二三日タツタラ、マダズツトタカクナリマセウ。―筍の成長に對する想像的記述。
(3)ダンダンノビルト、タケノカハガオチテ、アチアチシタ竹ニナリマス。―過去の經驗に基いての記述。

といふやうになつて居る。そこで取扱上注意すべきことは(2)の想像的記述についてゞある。(3)のやうな經驗を有つた一兒童の獨話ならば想像的に記述しないで斷定的に記述してよからうと思ふ。かうすることが既に確定的事實に對して差支ないのみでなく、(3)に對して統一のある記述となる。私共の本心を云へば此の統一のある記述の下に取扱つて見たいが、併し說話者が子供であり、また部分的に見て誤りのないことでもあるから、茲は子供の獨話として、餘り語法的に文章的にながめないで、換言せば子供の發表其の儘として、敎科書の通り取扱つて行く考である。只全體から見て前述の如き事情のあることを意識して取扱ふことが、大切な注意かと思ふ。第二段に於ては

タケノコガタベラレマス。
タケノカハデハモノヲツツミマス。
フデノヂク、モノサシ、フエ、ザル、カゴナド、竹デ作リマス。
竹デ作ツタモノガタクサンアリマス。
竹馬モ竹デコシラヘ、タコノホネモ竹デ作リマス。
竹ノスダレモアリ、竹ノカキネモアリマス。
タルヤチケニモ、大テイ竹ノタガガカケテアリマス。
モノホシザヲニモ、ハタザヲニモ、竹ヲツカヒマス。

のやうに竹の效用を說くのに、その表はし方がいろ〳〵に工夫されてある。この句法の變化といふ點に着目して指導する所なければならぬ。また末文に

竹のツカヒミチハマダタクサンアリマス。

といつて、尙餘地を存してあることに注意する。卽ちこゝでは、本書に載せてある以外に、兒童をして其の知る所を口頭又は記述によつて答へさせる。つまり兒童に對し創作的餘地を與へたことが作者の苦心の存する所である。

四、文字・語句・語法については大體次に示す所に基き適切に取扱ふ。

「私」・「竹」・「作」は新字であるから之が讀方及び書方に習熟させる。

「アタマヲダシタ」―筍が地下から先端を出した所をかく面白く言つたのである。

「タケノコ」―實物・標本又は繪畫を示して觀念を明かにする。

「**モウ**」―「もはや」・「すでに」などゝ其の意同じ。副詞で下の「ノビテ」の意を限定して居る。

「**コンナニ**」―「このやうに」の約轉。ここでは副詞で下の「ノビテ」の意を限定して居る。

「**セイ**」―「身のたけ」又は「せたけ」といふに同じ。

「**クラ井**」―もと坐居の義で、そのあるところの意であつた。これが轉じて位階卽ち人の地位をあらはす語として用ひられ、更に轉じて程度の意に用ひられ、一種の接尾語となるに至つた。ここはその義である。

「**タツタラ**」―時日を經過したならばの意。「タツ」は「タチ」の音便。「タチ」は完了助動詞「タ」の假定段である。適用によつて用法にも習熟させる。

「**ズツトタカクナリマセウ**」―「ズツト」は尙一層といふほどの意。副詞で下の「タカクナリマセウ」の意を限定して居る。「ナリマセウ」は「ナリマス」と比較して推量と斷定との相違に注意させる。適用によつて用法にも習熟させる。植物學者の言によると、マダケは一晝夜に八三・八センチメートル。ハチクは其の二分の一成長するといふ。

「**タケノカハ**」―外皮に細毛を有し、雨露・害蟲等を防ぎ、筍を保護する用をなす。

「**アヲアヲ**」―青きが上に青き意。地上莖は中空で節を有し、葉と共に綠色にして變らぬ點を知らしめる。

「**ダイー**」―「何はさておきまづ」といふほどの意で、他の種々のものをさしおいて最初にいふ言葉である。

「**タベラレマス**」―「ラレ」は可能助動詞「ラレル」の連用形である。ここは食べることが出來るの意である。適用と相俟つて其の意義及び用法を明かにする。

「**モノヲツツミマス**」―「モノ」とは握飯・團子・牛肉・飴等實際の例をあげて說明する。

「**ザル・カゴ**」―「ザル」は竹を細く割つて薄く剝ぎ、之を編んで作つた一種の容器で、多くは食品若しくは食器などを入れるに用ひる。「カゴ」は「ザル」と同じく竹で作つた一種の容器であるが、「ザル」よりは堅固に作り其の形にも色々ある。

「**竹馬**」―子供の玩具で種々ある。(1)竹幹の先端に馬の頭を付け、之を股にはさんで馬に跨るさまをなすもの。(2)枝葉のついたまゝの竹幹を股にはさみ、馬に騎るさまをなすもの。(3)二本の竹に各〻足掛を造り、その上に足をのせて立ち、兩手で竹幹を持ちて歩くもの等ある。實物又は繪畫を示し其の觀念を明かにする。

「**スダレ**」―竹を細く割り、綺麗に削り、麻絲又は絹絲で編んだもので、家の內部の透見を防ぐための一種の障壁ともいふべきものである。內よりは外を見得べくも、外よりは內を覗くことが出來ない特效がある。軒又は鴨居から垂下し不用のときは上に卷きあげて置く。竹で作つた

ものの外、葦・藺などで作つたものもある。

「竹ノカキネ」―竹で作つた垣のことで、其の作り方により建仁寺垣・四つ目垣等の名がある。

「タガ」―竹を割いて細くし、之を綰ねて輪としたもの。樽・桶・盥などの圓き器の外にはめて堅く引きしめる。竹の代りに銅・鐵などを用ひる場合もある。

「ツカヒミチ」―「ツカヒ」と「ミチ」とが合して熟語名詞となれるもので、使途・用途などいふに同じ。適用によつて用法にも習熟させる。

「マダマダ、タクサンアリマス」―「マダマダ」は「マダ」の疊語で、ほかにも尙用途の多いことを強くいはんとして用ひたものである。卽ち副詞で下の「タクサンアリマス」の意を限定して居る。どんなものがあるか、兒童の見聞經驗に訴へて、知る所を言はしめ、または書かしめるがよい。

五、練習應用例

(一)漢字の適用。

「私」―私の本　私のふで　私のすみ　私のいへ……等。

「竹」―竹のは　竹馬　竹田(人名)　竹のかき……等。

「作」―たこを作る　はこを作る　つくゑは木で作る……等。

(二)語句の適用（短文作爲・書取法等）

「四五日マヘ」―四五日マヘニキレイニシタオテハニ、モウコンナニクサガハエマシタ。

「ノビテ」―二三年マヘニウエタサクラノ木ガ、大ソウノビテ、コトシハミゴトニ花ガサキマシタ。

「オナジクラキ」―私ノオトウトハズンズンセイガノビテ、イマデハ私トオナジクラキニナリマシタ。

「ズツトタカク」―オ花サンハ私ヨリモズツトセイガタカクアリマス。

「アチアチ」―アチアチシタ竹ノハハマコトニキレイナモノデス。

「ツカヒミチ」―竹ハハシチ作ツタリ、花イケチ作ツタリ、カサノホネチ作ツタリスルノニモチヒマスガ、ソノホカナホツカヒミチハオホクアリマス。

六、本課は書物について授ける前に、竹藪に行つて筍の生えてゐる實際の有樣を直觀させることが必要である。また書物については文字を通して、筍が生々として、而かも迅速に成長する有樣を今眼の前に見えるがやうに取扱ふがよい。それから可成書中に表はれて居る製作品は勿論、其の他竹で作つた實物をも用意して、兒童の眼の前に提供し、感覺を通して、其の觀念を明確に作るがよい。

(乙)教授の實際

第一時

一、實物・繪畫等の觀察

筍の實物・竹の實物及び挿繪を擴大した掛圖を示し、筍及び竹の形態につき、また生々と生えて

居る有樣等につき思想を整へ、本文の作者を告げ、學習的動機を惹き起し、それから讀本に移る。

二、通讀

各自の讀書力に訴へて自由に一・二回讀ましめ、本文の大意を捉へさせる。

三、質問

大意につき質問。また次の語句等につき質問する。

「四五日マヘ」「アタマ」「タケノコ」「コンナニノビテ」「セイ」「オナジクラヰニ」「ズットタカク」「ナリマセヌ」と「ナリマス」「タケノカハ」……等。

四、讀方練習

四五の兒童に讀ましめる。また一齊的にも。

五、內容吟味

筍がだんだん成長して遂に立派な竹になるまでの發育の經過につき、書物の文を中心として吟味する。

六、朗讀

個人的にまた一齊的に。

七、練習應用

(1)漢字の適用。　(2)假名遣。　(3)全文を平假名に書きかへさせる。

第二時

一、復習

前習の所を形式・內容の兩方面に亙り其の主要點につき復習させる。

二、通讀

目的を指示して、當日の分を一讀させ、其の大意を捉へさせる。

三、質問

各自をして一讀させ分らなかつた語句につき質問させる。次に教師よりも主要語句等につき質問する。次に竹はどんな役に立つかを問答して、本文の內容を明かにする。

四、讀方練習

四五の兒童をして讀ましめる。また一齊的にも。

五、內容の確得

復演的に問答して次の要點を確實に識得させる。

竹（タケノコ―タベル。／タケノカハ―モノヲツツム。／フデノゼク、モノサシ・フエ・ザル・カゴ・竹馬・タコノホネ……ヲ作ル。）

六、朗讀

個人的にまた一齊的に。

七、練習應用

(1)漢字の適用。　(2)假名遣。　(3)全文を平假名に書きかへさせる。

第三時

取扱法は第二時に準ずる。但し內容については次の要點を確實に捕捉させる。

竹ノヤクダチ―スダレ・カキネ・タガ・モノホシザヲ・ハタザヲ……ナド。

第四時

一、復習

第一段の復習―一・二の兒童に讀ましめる。　文字・語句・語法等につき問答。　內容の吟味。

第二段の復習―一・二の兒童に讀ましめる。　文字・語句・語法等につき問答。　內容の吟味。

全文の朗讀。

二、練習應用

(1)語句の適用。

「オナジクラヰ」「ズツトタカク」「ツカヒミチ」「アチアチ」……等。（適用例は教授上の注意の部參照）

(2)句法の練習　（塡充法）

(イ)……ナドハ竹デ作ツタモノデス。

(ロ)……モ竹デコシラヘ、……モ竹デ作リマス。

(ハ)竹デ作ツタモノニハ、……モアリ、……モアリマス。

(ニ)……ニモ、……ニモ、竹ヲツカヒマス。

（注意）兒童の作を塗板に記し、一々批評して其の句法の變化について十分會得させる。

三、話方の修練

次の問に對し答へさせる。

(1)筍がだん〳〵大きくなつて立派な竹となるまでを話してごらん。

(2)竹の役立つことについて知つた所を話してごらん。

備考

竹

竹は東洋諸國・東印度及び西印度諸島に產する植物である。莖には地上莖と地下莖とある。地上莖は中空で節を有し、極めて强靱で彈力に富んで居る。地下莖は比較的に肥大し、多量の養分を貯藏して居る。葉は披針形にして、莖と共に四時綠色である。繁殖は專に地下莖の蔓延に由る。筍は地下莖から生じ、始め籜に被はれ、長ずるに從ひ、下部から上部に向つて次第に剝落する。此の筍が十分成長をとげると竹となる。しかし一旦成長した後は歲年經ても太さを增さない。唯其の組織を密にし、材を强靱にするのみである。種類には淡竹（ヘチク）・苦竹（マダケ）・孟宗竹・スズダケ・メダケ・柴竹（カンチク）等ある。孟宗・淡竹は其の筍は食用に供し、材は花瓶・柄杓などにつくり、籜は諸種の包物・草履・下駄の表・笠等に用ひる。苦竹は殊に堅硬で彈力に富むから壁の心・雨樋・桶の箍・

傘の骨・旗竿・物干竿・弓の材・河渠の防水工事材料・藤を結ぶ等其の用途極めて廣い。スズダケは竹行李・籠・文匣・籃・笠及び數物等に編む。竹はまた瀟洒たる庭園に植ゑ、或は盆栽として愛賞せらる。近來海外に多く輸出し、毎年の輸出高約一百萬圓に上るといふ。

第十三　田うゑ

要旨

本課は初夏に於ける田植の光景を文にしたのである。教授に於て難語句の意義・用法、及び語法等につきて授け、之が讀解に習熟させると共に、田植の光景、農夫勤勞の有樣等を知らしめ、傍ら田園生活の趣味を養ふを以て要旨とする。

教材

あちら　でも、こちら　でも、田うゑ　が　はじまつて　ゐます。馬　に　まぐは　を　ひかせて、田　を　かきならして　ゐる　人　も　あります。なはしろ　で　なへ　を　とつて　ゐる　人　も　あります。なへかご　に　なへ　を　入れて、かついで　いく　人　も　あります。二三人　の　をとこ　が　あぜ　に　たつて、なへ　を　田　の　中　へ　なげ入れて　ゐます。なへ　を　うゑて　ゐる　女　は、すげがさ　を　かぶつて、あかい　たすき　を　かけて、こゑ　を　そろへて、うたつて　ゐます。

「ことし　は　ほう年、
　ほに　ほが　さいて、
　みち　の　小ぐさ　も
　米　が　なる。」

補習文

五一ぢいさん

村はづれ　に　水車や　が　あります。村　の　人　は　五一車　と　よんで　ゐます。五一ぢいさん　が　その　水車や　の　ばん　を　して　ゐる　から　です。

五一ぢいさん　は　おもしろい　ぢいさん　です。からす　の　なかない　日　は　あつても、五一ぢいさん　が　うたはない　日　は　ない。」と　村　の　人　から　いはれる　ほど、いつも　きげん　よく　うた　を　うたふ　ぢいさん　です。

長い　はんてん　を　きて、みじかい　ももひき　を　はいて、こぬかだらけ　に　なつて　はたらく　ぢいさん　です。

ざぶざぶ　おちる　水　の　おと、とんとん　ひびく　きね　の　おと　その　にぎやかさ　中　から

「しごと　なされ　よ。きりきりしやんと、
　かけた　たすき　の　きれる　ほど。」

五一ぢいさん　の　うたふ　こゑ　が　きこえます。

いつか　うち　の　おとうさん　が　道　で、

「いつも　おたつしやな　こと　で。」

と　おつしやつたら、五一ぢいさん　は

「もう　すつかり　よわりまして。」

と、いつて、大きな　手　で　あたま　を　なでました。

五一ぢいさん　は　ことし　六十九　だ　さう　です。

區分

第一時　全文に於ける形式及び内容の教授。

第二時　全文の復習。

第三時　練習・應用。

第四時　補習文の讀解、

教具

まぐは・苗・苗籠・菅笠等の實物又は標本。　挿繪を擴大したる掛圖。

教法

(甲)教授上の注意

一、本課は舊讀本卷三第十一課にあつたのを多少の修正を加へて、玆に轉載したものである。また舊讀本は片假名で書いてあつたが、本書は平假名に書き改めてある。新出文字が一字もなく、全く練習文として提出してある。挿畫も變つて居る。是等の點は豫め意識して教授すべきである。

二、本課教授の主眼點は初夏に於ける田植の生々とした光景を味はしめるにある。故に本文を讀む前に、出來得べくんば兒童を郊外に引率して田植の實光景を直觀させ、それから後本文を讀ませ、其の時過去の經驗が眼の前に展開して、身恰も其の境地にあるかのやうにあらしめたい。しかし或る都會地の如き、どうにも是等の便なき地方では、本書の挿繪を擴大した掛圖を示し、本文と對照し、教師の補説と相俟つて、可成其の實境地にあるやうに取扱ふ。而して斯く取扱つて行く裏に農夫の勤勞を知らしめ、田園生活の趣味をも味はしめる。

三、内容の翫味は形式に卽してなすがよい。卽ち一文一文を讀んで、それを彼等の經驗又は掛圖の光景と結びつけて、其の内容を味はさせるのである。大體次のやうに取扱ふ。

「**あちらでも、こちらでも、田うゑがはじまつてゐます**」―今は若葉の影美しい夏の初めである。野に出て見ると、廣い野の彼方にも此方にも盛に田植がはじまつてゐる。田植といふのは稻の苗を田に移し植ゑることである。

「**馬にまぐはをひかせて、田をかきならしてゐる人もあります。**」―苗を植ゑるには先づ田の土をかきならさなければならぬ。これをなすには馬に馬鍬(實物又は模型を見せる)をひかせ、このやうにして(挿繪を示す)かきならすのである。此の時馬を使ふ人は「はいし、はいし」と掛聲をかけ、馬を促しながら働く樣は實に勇しい。

「**なはしろでなへをとつてゐる人もあります。**」―苗代といふのは稻の苗を育ててある田のことである。前にもいつたやうに、田植とは苗代にある苗をとつて、之を本田に移し植ゑることで

あるから、先づ苗代に行つて苗をとらなければならない。ここはその苗をこのやうにして（掛圖を示す）とつてゐるのである。

「なへかごになへを入れて、かついでいく人もあります。」—苗代でとつた苗は之を苗籠に入れ、こんな風に（掛圖を示す）擔つて本田に運ぶのである。なんと勇しい姿であるまいか。

「二三人のをとこがあぜにたつて、なへを田の中へなげ入れてゐます。」—この掛圖を見てごらん。田の間に縱横にわたつた細い路があるだらう。之が畦と云ふものである。どうです、三人の男の人が畦に立つて何かしてゐるやうだらう。これが卽ち苗代から運んだ苗を本田に投入れて、早乙女が之をとつて植ゑるに都合よくして居るのである。

「なへをうゑてゐる女は、すげがさをかぶつて、あかいたすきをかけて、こゑをそろへて、うたつてゐます。」—苗を植ゑるのは大抵女の人が植ゑるならひになつてゐる。袂のある着物に赤い襷をかけ、足に脚袢をはき、頭に白い菅笠を被り、其のいでたちはいかにも輕く快く見える。此の人達が田にはいつて、ずうと相竝んで手輕く植ゑる所は中々熟練なものである。かはるがはる玉を轉すやうな美しい聲で「ことしはほう年、ほにほがさいて、みちの小ぐさも米がなる」と歌ふ所は何ともいへぬ面白味がある云々と味はさせる。

四、語句・語法等については大體次に示す所に基き、適切に知らしめる。

「田うゑ」—田を植ゑるのでなく、稻の苗を苗代田からとつて來て、本田に移し植ゑることである。大抵六月上旬から下旬にかけて植ゑる。

「はじまつて」—「はじまりて」の音便。適用と相俟つて其の意味を明かにする。

「まぐは」—水田の土をかきならすに用ひる一種の農具で馬にひかせる。高さ三尺横四尺位で上に柄、下に鐵の齒がある。可成實物又は模型を見せて其の觀念を明かにする。

「ひかせて」—「せ」は、使役助動詞「せる」の連用段である。「ひく」と比較し、また適用もさせて其の意味・用法を明かにする。

「かきならして」—高き土と低き土とをかきなでて一樣にするをいふ。適用と相俟つて其の意味・用法を明かにする。

「なはしろ」—備考部參照。假名遣にも注意。

「なへ」—種子を苗代田に下してから、發芽成長して本田に移し植ゑる迄の稱。可成實物を見せる。假名遣にも注意。

「なへかご」—竹であらく編んだもので、苗を持ち運ぶに用ひる。

「かついで」—荷物を肩にかけてになふこと。挿繪と對照して觀念を明かにする。地方では荷物を背に負ふことを「かついで」といひ、棒の兩方に荷物を吊して肩にするのを（挿畫の如く）「か

たんで」といふ所もある。「かたんで走る」とは其の一例である。こんな土地では特に注意して「かついで」の意味を明かにする。

「**二三人のをとこ**」―田植のときは一般に男は田をかきならしたり、苗を運んだり、其の運んだ苗を田に投げ入れたりするのが主なる仕事となつて居る。二三人は二人又は三人の意。四五人、五六人等種々の場合をあげて其の意味を明かにする。

「**なげ入れて**」―これは今植ゑようとする田の所々にまんべんなしにまいて、早乙女がそれをとつて植ゑるに都合よくはかるのである。

「**なへをうゑてゐる女**」―早乙女をいふので、土地の風習もあるが、主として十七八歳の處女及び壯んな婦人が之に當る。扮裝は處女の方は一般に袂のある着物に赤い襷をかけ、褄取つて鮮かな帶を結び、頭に白い菅笠をかむり、足に脚袢をはき、其の姿いかにも輕るさうで一種の趣がある。

「**すげがさ**」―菅の葉を編んで作つた一種の笠で古くからある。德川時代には大に流行し、男女とも晴雨にかかはらず用ひたものである。加賀金澤の產は最も名高く、一に加賀笠ともいふ。併し今はだん〳〵廢れて來た。

「**あかいたすき**」―赤き色の襷である。襷とは仕事する時、衣の兩袖を腕・肩にからげかけるための紐をいふ。背中でうち交ひに結ぶ

「**こゑをそろへて**」―聲の調子を合すをいふ。

「**ことしはほう年、ほにほがさいて、みちの小ぐさも米がなる。**」―これは田植のときに歌ふ歌の一種で、主として關東地方に行はれるものである。此の種のものは各地に古くから行はれて居る。「ほにほがさいて」は稻の穗の上にまた穗が出來て、花が咲くといふことで、穗のよくついたことを誇張していつたのである。後漢書に「嘉禾一莖九穗之瑞」といふ語がある。「みちの小ぐさも」は路傍に生えて居る小さな草をいふ。「小」は接頭語の一である。「米がなる」は米の實が結ぶといふの意である。「みちの小ぐさも米がなる」は稻ならぬ小草にまでも米の實が結ぶといふので、稻が十二分にみのつたことを意味するのである。この如き歌は空でいへるやうにして置くがよい。

五、練習應用例

(1)漢字の適用。

「田」―田の中　田うゑ　田中(人の姓)　田口(同上)…等。
「馬」―牛と馬　馬の耳　馬の足　馬の目　小馬…等。
「人」―一人　二人　二三人　四五人　田に人…等。

各說　第十三　田うゑ

「女」―女の人　女の子　女のかほ　田をうゑてゐる女……等。
「年」―一年　二年　二三年　ほう年　らい年……等。

(2)語句の適用。

「あちら」―あちらのはうには人がなへをとつてゐます。
「こちら」―こちらのはうには女の人がなへをうゑてゐます。
「はじまつて」―もうけいこがはじまつてゐます。
「ひかせて」―牛にまぐはをひかせて、田をかきならしてゐます。
「かついで」―人がなへをかついで、はしつていきます。
「なげ入れて」―こどもらがかごの中にまりをなげ入れてゐます。
「そろへて」―をとこの子も女の子も、こゑをそろへて、しやうかをうたつてゐます。

六、挿繪については、(1)全景の瞥見。(2)人が馬に馬鍬を引かせて田をかきならしてゐること。(3)ずつと向ふの苗代田に苗をとつてゐること。(4)男の人が苗籠を擔うてせつせと走つて行くこと。(5)畦の上に三人の人が立つて、田の中へ苗を投入れてをること。(6)彼方にも此方にも盛に田植がはじまつてゐること。(7)更に此の全體を總合して、人々がいづれも忙しさうに働いてゐることと等につき十分觀察させるがよい。

(乙)教授の實際

第一時

一、掛圖の觀察

掛圖を提示し、兒童の經驗と交渉して、初夏に於ける田植の光景を觀察せしむ。

二、通讀

全文を挿繪と對照しながら一・二回自由に讀ましめ、彼等自身に味はしむ。

三、質問

語句其の他につき兒童の質問に應ず。また敎師よりも質問する。而して語句の意義、全文の內容につき明かにする。

四、讀方練習

四五の兒童に讀ましめる。また一齊にも。

五、次の問に對し讀本を讀んで答へさせる。

1. 人々は彼處にも此處にも何をしてゐるか。それは書物のどこにどう書いてあるか。
2. 人は馬をつかつてどうしてゐるか。それは書物のどこにどう書いてあるか。
3. 苗代で何をしてゐるか。それは書物の何處にどう書いてあるか。
4. とつた苗をどうしてゐるか。それは書物の何處にどういてあるか。
5. 二三人の人は畦にたつて何をしてゐるか。それは書物のどこにどういてあるか。
6. 女の人たちは何をしてゐるか。それは書物のどこにどういてあるか。

7.其の人たちはどんな歌をうたつたか。

第二時

一、復習

1.全文を一二の兒童を指名して讀ましむ。

2.主要語句につき、また語法等につき問答する。

3.全文を一齊に讀ましめる。

二、內容玩味

適切なる問答により、また敎師の感想をも加へて內容を玩味し、兒童をして眞に其の境地にあらしめる。

三、朗讀

二三兒童に朗讀させる。

四、讀方

挿繪を見て各自の知りし所、感ぜし所を自由に話さしむ。

第三時

一、復習

先づ全文を一・二の兒童にまた一齊的にも讀ましめ、次に內容につき十分玩味させる。

二、練習應用

(1)漢字の適用。

「田」「馬」「人」「女」「年」…等(敎授上の注意の部參照)

(2)假名遣の練習(誤正法)

「田うえ」「なわしろ」「なえ」「なゑかご」「おとこの人」「こえ」「はう年」

(3)語句の適用(短文作爲又は口頭にて)

「あちら」「こちら」「ひかせて」「かきならして」「かついで」「なげ入れて」「かぶつて」「そろへて」…等(適用例は敎授上の注意の部參照)

第四時

(補習文を授ける。取扱法は前記に準ずる。)

備考

田植

田植とは稻を苗代田から本田に移し植ゑることである。五月下旬から六月下旬までの間にするを普通とする。苗を植ゑるには先づ苗代田の苗を拔取り、之を本田に運び、五六本位を一株とし、約七・八寸位の間隔を保つて挿入する。而して通風・採光等の關係から行列正しく植ゑる。移植後は培打及び草取を行ふ。培打とは株の間の土を淺く掘り返すことで、第一回は縱に第二回

各說　第十三　田うゑ

は横に掘り返す。草取ほ培打の終つた後三回同之を行ふを普通とする。

苗代田

苗代田は稻の種籾を蒔きて苗を育てる所である。之を作るには風通しよく、又日當りもよき田を選び、土を丁寧に耕して水を入れ、十分攪拌して土を均らし、短冊形に區切り、水の澄んだ後。種籾を粗密なく蒔く。時期は内地では四月中旬から五月中旬の間に蒔く。而して苗の長さ六七寸に及んだ時之を拔取つて本田に移植するのである。

第十四　ホタル

要旨

本課は夏の夜に於ける螢狩の光景を描寫した叙景文である。之が讀解に習熟させるは勿論、螢飛ぶ野原の光景及び螢狩の愉快につき味はしめ、傍ら生物愛護の念を養ふを以て要旨とする。

教材

田ノ上ニモ川ノ上ニモホタルガタクサントンデキマス。小タラウハアニヤアネトホタルガリヲシテキマス。

「ホタルコイホタルコイ。
ソッチノ水ハニガイゾ。
コッチノ水ハアマイゾ。」

一ピキソバヘキタノヲ小タラウガトラウトスルト、タカク上ッテニゲテイキマシタ。

「ネエサンネエサン大キナノガソッチヘトンデイキマス。早クトッテクダサイ。」

アネハウチハデハタキオトシテカゴニ入レテクレマシタ。

アニハ大キナササヲモッテ川ムカフヘイキマシタガ、スコシノマニ五六ピキトッテキマシタ。

小タラウハ草ニトマッテキルノヲ見ツケテヤット一ピキツカマヘマシタ。

（新字）早　草

區分

第一時　第一・二節（自三十八頁八行至四十頁三行）に於ける形式及び内容の教授。

第二時　第三・四節（自四十頁四行至四十一頁二行）に於ける形式及び内容の教授。

第三時　第五・六節（自四十一頁三行至四十一頁七行）に於ける形式及び内容の教授。

第四時　全文の復習及び應用。

教具

螢・螢籠の實物。　挿繪を擴大したる掛圖。

教法

（甲）教授上の注意

一、本課は舊讀本卷三第十二課と同一教材であるが、併し内容は全く改作されて居る。舊讀本はどつちかといへば螢の形態・習性に關する知識の一斑を與へるのが主であつたが、本書は螢飛ぶ

夏の夜に、螢狩をして居る景趣を味はしめるが主となつて居る。此の點は注意する。

二、螢の內容卽ち形態・習性等については殊更に說くことは要らぬ。螢の實物又は繪畫を示し、總合的に之は螢であること。腹部にある此の黃色の部分が卽ち發光器で、之が暗夜に美しく光るのである。何と可愛蟲だらう位の識得でよい。而して專ら掛圖又は挿繪と交涉して螢飛ぶ夏の夜の美觀及び螢狩の快味を味はさせる。

三、內容玩味は大體次の範圍・程度に從つて取扱ひ、其の實境地をよく想像させるがよい。

「田ノ上ニモ、川ノ上ニモ、ホタルガタクサントンデキマス。」—夏の日が暮れて野原に出て見ると、涼しい風が動いてゐる。稻田の上にも川の畔にも螢がたくさん群れてゐて、或は高く或は低く、明滅して飛んでゐる。其の美しさは何とも言ひやうがない。

「小タラウハアニヤアネトホタルガリヲシテキマス。」—小太郎は兄さんや姉さんと一所に此處に來て、「ホタルコイ。ホタルコイ。ソッチノ水ハニガイゾ。コッチノ水ハアマイゾ。」と歌を歌つて螢を呼びながら、面白相に螢狩をしてゐる。

「一ピキリバヘキタノヲ小タラウガトラウトスルト、タカク上ツテニゲテイキマシタ。」—小太郎が一生懸命に歌を歌つて螢を呼んでゐると、一匹の螢がそば近くやつて來た。小太郎は大層喜んで、どうでもして捕へようとあせつたが、螢は高く逃げて行つてしまつた。失望々々。

「ネエサン、ネエサン、大キナノガリツチヘトンデイキマス。早クトツテクダサイ。」—これは小太郎の言葉で、小太郎が捕へようとあせつた螢が姉さんの方へ飛んで行つたものであるから、それを姉さんに捕へて貰はうと思つて、大きな聲で向ふに居る姉さんにいつたのである。

「アネハウチハデハタキオトシテ、カゴニ入レテクレマシタ。」—姉さんは小太郎の聲を聞いて振り返つて見ると大きな奴が自分の方へさしてとんで來る。手にもつてゐた團扇を振上げてはたき落し、「小太郎さんとつたよ」と呼んだ時に、小太郎はもう姉さんの所に來たものだから、小太郎の持つて居る籠の中に入れてやつた。さきに失望した小太郎は「うまい〳〵」といつて大層喜んだ。

「アニハ大キナササヲモツテ、川ムカフヘイキマシタガ、スコシノマニ五六ピキトツテキマシタ。」—螢は川の向ふにも澤山飛び交うてゐる。兄さんは橋を渡つて其處に行き笹竹を振り廻はし暫らくの間に五六匹捕へ、それをもつて來て小太郎の籠の中に入れてやつた。今では籠の中に七匹も八匹も居るやうになつた。

「小タラウハ草ニトマツテキルノヲ見ツケテ、ヤツト一ピキツカマヘマシタ。」—小太郎もどうかして五六匹捕へようと思つたがどうにも捕へることが出來ない。やう〳〵草の葉に一匹止つてゐるのを見つけ、それを捕へて今日の手柄にした云々。

四、文字・語句・語法等については、大體次の範圍程度に基き、適當に說明して其の意義・用法等を明かにする。

「田ノ上」―稻が植つてゐる水田の上なることを知らしめる。

「川ノ上」―「川」は其の土地に從つて想像させるがよい。「川ノ上」は水邊の意味にて取扱ふがよい。

「ホタルガタクサントンデキマス」―多くの螢が或は高く或は低く明滅して飛んでゐる美しい光景を想像させる。「トンデキマス」は「トンデキマシタ」と比較して現在時なることに注意する。

「ホタルガリ」―螢をとることである。尙「こけがり」「もみぢがり」とも連絡して其の意味・用法を明かにする。併し紅葉狩は紅葉をとるの意でなく見るの意なることを注意する。

「ホタルガリヲシテキマス」―螢狩の愉快な境地を十分想起させる。また「キマシタ」と比較して現在時なることにも注意する。

「ソッチノ水」―「ソッチ」は方向の代名詞で、文語では「ソチ」口語では「ソッチ」といふ。蓋し「ソッチ」は「ソチ」が音便的に變轉したものである。次にある「コッチ」も之に準ずる。二者比較して其の觀念及び用法を明かにする。「水」は螢は濕地卽ち河邊にすむといふ所から斯く言つたものである。

「ニガイゾ」―「ゾ」は感動詞で、強めて言つたものと知らせる。次にある「アマイゾ」の「ゾ」も同樣である。

「ホタルコイ、ホタルコイ。……コッチノ水ハアマイゾ。」―は關東地方に行はれる童謠であるが別に深い意味は無い。彼方にとんで居る螢を自分のそば近く呼んで捕へようとする、言はば一種の計略的の歌である。しかし、さう告げると興味がなくなるから、こんな歌は利害や道理を離れて、子供等が無邪氣に呼ぶ所に味あるものとして取扱ふがよい。

「一ピキ」―羽で飛ぶ昆蟲類を數へるには「一ハ・二ハ」といふ樣に多く「ハ」を用ひる習であるが、茲は子供等が用ひる呼び方として此の儘授けてよい。地方によりては「ヒキ」を用ゐる所もある。

「トラウトスルト」―「トラヘヨウトスルト」に同じく、「トラウ」は動作の將さに及ばうとする時に使ふ言葉として知らしめる。「トル」又は「トラヘル」等と比べて其の用法にも習熟させる。

「タカク上ツテニゲテイキマシタ」―茲では螢が高く上り、小太郎が痛く失望した樣子をも想像させるがよい。また「イキマシタ」は「タ」の助動詞がついてゐて、其の動作の完了してゐることを知らしめる。

「ネエサン、ネエサン」―向ふに居る姉さんを呼ぶとして重ねたこと。及び小太郎が殘念の餘り聲高く姉さんを呼んだとして取扱ふと場面が活々して來る。

「**トツテクダサイ**」―敬讓動詞である。兄弟の親しき中にも、而かも急遽の間にも、この敬讓的の言葉が使用されて居るのに注意させる。

「**アネ**」―「アニ」と比較して其の觀念を明確にする。

「**ハタキオトシテ**」―「ハタク」には種々の意味がある。「麥をハタク」といへば麥を碎くの意、「塵ヲハタク」といへば塵を拂ふの意、其の外「タタク」「ウツ」の意味もある。茲は螢を團扇又は笹竹で打落すの意味にして授ける。また他に適用もさせて其の用法に習熟させる。

「**カゴニ入レテクレマシタ**」―「カゴニ入レテヤリマシタ」と比較し二者の違ふことを意識させる。本當は作者は第三者であるから「ヤリマシタ」とすべき所であるが、標準語に從ひ、斯くしたものであらう。故に意味は「ヤリマシタ」と同樣に考へさせてよからう。「カゴ」は可成實物を示して其の觀念を明かにする。

「**ササヲモツテ**」―枝があつて葉のついた竹をいふ。或は竹幹に笹のある枝を結びつけたのもある。可成實物を見せる。

「**スコシノマ**」―わづかの間と同じ。適用と相俟つて意義・用法を明かにする。

五、文章に於て

作者は第三者であつて、夏の清夜に螢飛交ふ野邊に於て、小太郎等が螢狩をしてゐる所を眺めて描寫したものである。從つて兒童をも第三者の位置に於て讀み味はしめるがよい。

童謠の置方については、「……小タラウハアニヤアネトホタルガリヲシテヰマス。小タラウハ「ホタルコイ、ホタルコイ。ソッチノ水ハニガイゾ。コッチノ水ハアマイゾ。」ト、ウタヒマシタ。一ピキソバヘキタノヲ……」といふやうに、「小タラウハ」とか、「ト、ウタヒマシタ」とか言ふ語句を入れないで、直ぐに童謠を置いてある所は單に簡潔であるのみでなく、之れなきために却つて緊張した寫實になつて、身眞に其の境地にあるの想をなさしめる。こんな點は特に注意して授けるがよい。次にある小太郎の「ネエサン、ネエサン、……早クトツテクダサイ。」といふ對話の置方も同樣である。

また文章の初めに小太郎の一行が家を出たこと、又其の終りに一行が家に歸つたことは記述してない。之は螢狩の現場だけを寫實したのであるから之でよいのである。從來の記述法にはよく頭尾をつけたものであるが、本文はそんな古い形式に囚はれないで、新しい試みによつて記述してある所に眼をつける。

六、練習應用例。

(1)漢字の適用。

「早」―アサハ早クオキル。早クイカヌトチコクスル。……等。

各説　第十四　ホタル

「草」―草ノハ　草ノハナ　草ト木　草ハラ……等。

(2)語句の適用。

「トンデキマス」―スズメガトンデキマス。　ツバメガ田ノ上ニトンデキマス。

「ソバ」―ホタルガ一ヒキ私ノソバヘトンデキマシタ。

「トラウトスルト」　草ノ上ノトンボヲトラウトスルト、マダ手ノバサナイマヘニ、トンデイツテシマヒマス。

「ソツチヘ」―大キナトンボガ一ヒキソツチヘトンデイキマス。

「ハタキオトス」―トンボヲハタキオトス。　テフテフヲハタキオトス。

「スコシノマ」―ボクハスコシノマニフナヲ五ヒキツカマヘマシタ。

「トマツテ」―セミガ木ノエダニトマツテキマス。

(乙)教授の實際。

第一時

一、實物及び掛圖の觀察

掛圖及び實物を示し、兒童の經驗知識を基本として、螢狩の實況及び螢の形態・習性に關する知識の一斑につき整理する。

二、通讀

各自に一・二回讀ましめる。

三、語句の教授

相互の質問により次の語句・語法の意義・用法等を授く。

「田ノ上」「川ノ上」「ホタル」「トンデキマス」と「トンデキマシタ」「ホタルガ」「ホタルコイ……水ハアマイソ」「トラウトスルト」「イキマス」と「イキマシタ」……等。

四、讀方練習

四五の兒童に讀ましめる。また一齊的にも。

五、內容の玩味。

適切な問答により、また教師の玩味する所をも語つて本節の內容をよく玩味せしめる(教授上の注意の部參照)

六、朗讀

個人的にまた一齊的にも。(一回範讀を示す)

七、練習

(1)次の語句を口唱して書取らしめる。

ホタルガタカクトンデキマス。　ホタルガヒククトンデキマス。　ホタルガイオノハノ上ニトマツテキマス。

(2)假名遣(誤正法)

「小タラウ」「ソバヘキタ」「トラウトスルト」「イキマシタ」……等。

第二時

一、復習

前の所を形式内容兩方面に亙つて復習。

二、通讀

「小太郎が捕へようとした螢が高く逃げたから、そこでどうしたか」が今日の所に書いてあるから、めい〳〵の力によつて一つ調べて見よと告げて、一・二回自由に讀ましめる。

三、語句等の教授

「早」「大キナノガ」「ソツチヘトンデ」「イキマス」と「イキマシタ」「トツテクダサイ」「ハタキオトシテ」「カゴ」「クレマシタ」……等。

四、讀方練習

四五の兒童に。また一齊的にも。

五、内容玩味

（前に準ず。教授上の注意の部參照）

六、朗讀

個人的にまた一齊的に。（一回範讀を示す）

七、練習。

(1)書取（口唱）

「オエサン」「大キナホタル」「ソツチヘ」「早ク」「ハタキオトス」……等。

(2)假名遣（誤正法）

「オヘサン」「トンデキマス」「ウチヲ」「ハタキチトス」……等。

第三時

一、前の復習及び豫習

(1)前習の分復習。　(2)今日は「兄さんがどうしたか。また小太郎はどうしたか。それを知るとして調べなさい。」と告げて各自をして豫習させる。

二、語句等の教授

「ササ」「川ムカフ」「スコシノマ」「五六ピキ」「トマツテホルノチ」「見ツケテ」「ヤツト」「ツカマヘマシタ」……等。

三、讀方練習

四五の兒童に。また一齊的にも。（一回範讀を示す）

四、内容の吟味

（前記に準ず。教授上の注意の部參照）

五、朗讀及び練習

個人的にまた一齊的に朗讀の練習。

次の語句を口唱して書取らしめる。（點を打つた語句は假名遣に注意する）

(1)川向フニモホタルガタクサントンデキマス。ニイサンハササデハタイテキマス。

(2)草ノ上ニホタルガ一ヒキトマツテキマス。小タラウハコレヲミツケテツカマヘマシタ。

第四時

一、全文の復習

先づ一讀させ、次に形式上及び內容上の要點につき問答し、次に內容の玩味につき問答し次に齊讀させる。

二、練習應用

(1)漢字の適用。　(2)語句の適用。　(3)文形の適用（以上は教授上の注意の部參照）

備考

螢

螢は昆蟲類に屬する小蟲で、體黑く胸上に赤色の部分がある。頭小さく、眼は複眼である。胸部には三對の肢と二對の翅を具へて居る。腹部の末端に黃色の部分がある。之が卽ち發光器である。發光の理窟につきて古來から種々の說あるが、今は體中にある一種の物質が一定の化學的變化の下に發光するものとして居る。此の蟲は夏季に多く發生し、水邊の草間に棲み、夜になると盛に飛翔する。種類には源氏螢と平家螢との二種あつて、甲者は乙者に比し形稍大きく、光度も稍強い。併し乙著は活潑で久しく飼養に堪へる。我が國では全國到る所に產するが、就中山城の宇治・近江の石山は螢狩の名所として世に知られて居る。螢合戰と稱し、多數の螢が忽ち合して一團となり、忽ち碎けて星の如くなる樣は實に夏の夜に於ける一奇觀である。

第十五　うとからす

要旨

本文は一種の寓話である。新文字・新語句の讀み方・書き方・意義及び語法等につき授けて、之が讀解に習熟させると共に、本文を通じて「我が身の程を知らず人の所爲に眞似するものは遂に失敗す」といふ教訓を知らしめ、傍ら鵜及び烏の形態・習性につき其の一斑の知識を授ける。

教材

うが　川の　中で　さかな　を　とつて　ゐました。

今　もぐつた　か　と　おもふ　と、すぐに　一びき　くはへて　出て　きます。　それ　を　たべる　と、また　すぐに

もぐつて、見て　ゐる　うち　に　また　一びき　くはへて　ういて　出ます。　それ　を　からす　が　木　の　上　から

見て　ゐて、

「うまい　もの　だ。　じぶん　にも　できない　こと　は　あるまい。」

だらう。　一つ　やつて　見よう。」

と　川　の　中　へ　はいりました　が、がぶがぶと　水　を　のんで、とうとう　しんで　しまひました。

うの　まね　する　からす、水　に　おぼれる。

各說　第十五　うとからす

（新字）今　出　心

區分

第一時　全文に於ける形式及び內容の敎授。

第二時　全文の復習。

第三時　練習及び應用。

敎具

鳥・鵜の實物又は標本。　挿繪を擴大したる掛圖。

敎法

（甲）敎授上の注意

一、本課は舊讀本卷三第十四課にあつた敎材である。字句の上に僅かに修正が行はれて居るのみである。

二、本課の主眼點は鳥が鵜の眞似をして水に溺れ、遂に死んでしまつたといふことからして、「我が身の程を知らないで、人の所爲に眞似るものは遂に失敗する」といふ敎訓を與へるのにある。而して形態・習性については之を說かぬのが寓話の本體であるけれども、本寓話に限り、之を說かないとこれの內容がはつきりと理會し兼ねることになつて居る。故に本文を讀ませる前に實

物・標本又は掛圖を提示して其の大體を說明するがよい。

三、形態・習性については鵜は水上生活に適するが、鳥は之に適せぬと云ふことを兩々比較して知らしめるのである。卽ち鵜はその頸の長いこと。嘴は扁平で上嘴の尖端は鈎の如く曲つてゐること。胸腹部は丸く出來て居ること。脚は短くして趾間に蹼があること等は彼の習性と相俟つて水上生活に適するが、鳥には此等の要件を缺いて居るから、若し我が身の程を知らないで、水に入るとせば、直に溺死しなければならぬ云々と知らせるのである。

四、文字・語句・語法等については、大體次に示す範圍程度に從ひ適切に知らしめる。

「さかな」—魚をいふ。言海に「さかは酒なは魚や菜の稱である。酒飲む時に食する肉菜をさかなといふのである。併し其の內でも魚類を最も多く用ひるから、遂に魚だけの異名として用ひるに至つたのである」とある。但し之は參考迄に記したので、兒童には具體的に魚類の二三を擧げて知らしめるがよい。

「もぐつたかとおもふと」—こんな語句の意味は適用によつて知らしめるがよい。「今きたかとおもふと。……」「今いつたかとおもふと……」の如く實例をあげて理會させる。

「すぐに」—「ただちに」・「間もなく」などと同意味。副詞であつて、下の「一びきくはへて出てきます」の意味を限定して居る。

「くはへて」―口に物を入れ、輕く嚙みて持ち支へるをいふ。

「また」―復の義で、ふたたびの意に見るを可とする。下なる「もぐつて」の意を限定する。

「見てゐるうち」―「現に目を注いで見て居る間にの意で、時のあまりたたぬことをいふ。下の「また一びきくはへてういて出ます」の意を限定して居る。

「ういて出ます」―水面に體をあらはすをいふ。「ういて出ました」と比較して時の關係を明かにする。

「それを」―「それ」は勿論指示代名詞の中稱である。ここでは鵜が水をもぐつて魚をくはへて來るそのさまを指すのであるといふ「その」の職能を明かにする。

「うまいものだ」―烏が鵜の仕業の巧妙に對して稱讃した言葉である。

「あるまい」―「まい」は推量して打消すに用ひる詞。卽ち烏が鵜の巧みな仕業を見て、乃公もやつて見たことが無いといふものの、やつて見ればやれないこともなからうの意となるのである。適用と相俟つて其の意味・用法を明かにする。

「はいつたら」―「若しはいつたならば」の意。「はいつたら」は「はいりたら」の音便。「はいり」は「這入り」の約であるから正しくは「はひり」と書くべき筈である。茲は習慣に從つたのである。

「心もちだらう」―どんな心もちがするであらうか、定めしよい心持がするであらうと疑ひながらも羨しく思ふ意味である。「心もち」は心に感ずる工合。「だらう」に於て「だ」は指定助動詞の將然形で「う」は推量助動詞の終止形である。

「一つやつて見よう」―試みに一度鵜にならつて水をもぐつて見ようの意である。「一つ」は一度・一遍と同意味である。茲では副詞の職能を帶び下の「やつて見よう」の意を限定して居る。

「がぶがぶと」―水や酒などを勢よく飲む音。「と」を添へて副詞としたのである。適用によつて之が用法にも習熟させる。聲喩法。

「まねする」―「まねをする」の「を」を省いたのである。適用によつて用法にも習熟させる。

「おぼれる」水中に落ちて死することをいふ。適用と相俟つて其の意味用法を明かにする。

「うのまねするからす水におぼれる」―我が身の程を知らず妄りに人の所爲に眞似るものは遂に失敗するとの意を宿した諺である。

「今・出・心」―新文字であるから、讀方・書方に十分習熟させる。

五、本文は中々面白く書いてある。「今もぐつたかとおもふと、すぐに一びきくはへて出てきます。それをたべると、またすぐにもぐつて、見てゐるうちにまた一びきくはへてういて出ます。」は輕妙簡潔で而かも其の實況がよく描寫されて居る。「うまいものだ」此の一句は烏の羨む心を遺憾なく發揮して、所謂千鈞の重みがある。「水の中へはいつたらどんな心もちだらう」は我が身

の程を知らず、物羨みする烏の愚が躍動してをる。「がぶがぶと水をのんで、とうとうしんでしまひました。」は烏がぶ〳〵と水を呑んで跳いて居るその苦悶の有樣が目に見えるやうである。是等の如き巧みな描寫點はよく知らしめるがよい。

六、挿繪については、鵜が巧みに魚を捕へて居る所、烏が樹上にあつてそれを羨み見て居る姿を觀察させ、其の實境を十分に想像させるがよい。

七、練習應用例

(一)漢字の適用。

「今」―今月が出る　今きたのです　ただ今……等。

「出」―出て見る　出ていく　月が出た……等。

「心」―よい心　わるい心　心もちがよい　心もちがわるい　心の中……等。

(二)語句の適用。

「もぐる」―小たらうは水の中をもぐつてむかふのどてにつきました。

「……かとおもふと」―月がでたかとおもふと、またくもにかくれました。

「見てゐるうちに」―小ねこが川の中へおち、見てゐるうちにしづんでしまひました。

「うまいものだ」―まさをくんは水をもぐることはたいそうまいものだ。

「できないことはあるまい」―まさをくんは水を〻ぐることはたいそうまいものだ。じぶんもいつしやうけんめいにけいこをしたら、できないことはあるまい。

「どんな心もち」―けふのやうなむしあつい日に水の中へはいつたら、どんな心もちがするだらう。

「一つやつて見よう」―ぼくはむかふまでおよいでいけるかどうか、一つやつて見よう。

「がぶがぶと」―うまが川のふちで、がぶがぶと水をのんでゐます。

(乙)教授の實際

第一時

一、觀察

實物又は標本及び掛圖を提示して鵜と烏の形態・習性を比較して一は水上生活に適するも一は適せぬことを知らしめる。また掛圖に於ける鵜が水上にゐて巧みに魚を捕へ、烏は樹上にゐて眞に羨んで居るその姿をよく觀察させる。

二、豫習

各自をして自由に一・二回讀ましめ其の意味を捉へさせる。

三、質問

文字・語句・語法等につき兒童の質問に答へ、また教師よりも質問して、それ等の讀方・意味・用法・職能等を明かにする。

四、讀み方練習

五六の兒童に讀ましめる。

五、內容の玩味

適切なる問答により、また敎師の玩味する所を語り、本文の內容を十分味はしむ。

六、朗讀

時間の許す限り個人的にまた一齊的に朗讀せしむ。

第二時

一、復習

(1)二三の兒童に讀ましめる。　(2)主要語句につき問答する。　(3)內容を玩味する。

二、文章の吟味。

1 鵜が今河の中で何をしてゐますか。それは書物のどこに書いてありますか。讀んでごらん。
2 鵜がどんな風に魚を捕へますか。それは書物のどこにどう書いてありますか。讀んでごらん。
3 鳥がそれを樹の上から見て何と言ひましたか。其の言葉は書物のどこに見えますか。讀んでごらん。
4 鳥はしまひにはどうなりましたか。それは書物のどこにどう書いてありますか。讀んでごらん。

以上終つてから敎師の文章に對する批判をきかしめる。

第三時

一、復習

形式及び內容に亙つて復習する。

二、練習應用

(1)漢字の適用(敎授上の注意の部參照)

(2)假名遣(正誤法)

「おもふ」「くはへ」「ういて」「じぶん」「しまひ」…等。

(3)語句の適用(短文作爲等)

「もぐる」「…かとおもふと」「見てゐるうちに」「うまいものだ」「できないことはあるまい」「どんなむしもち」「一つやつて見よう」「がぶがぶと」…等(適用例は敎授上の注意の部參照)

三、話方の修練。

話術につきても指導する。

備考

鵜

鵜は游禽類に屬する。形鴨に似て、其の色黑く、背と肩とは褐茶色を帶びて居る。頸長く、嘴は扁平で上嘴の先端は鉤狀をなし、魚を捕へるに適して居る。脚は短く、趾間に蹼あつて水上を泳ぐに都合よく出來て居る。羽毛は滑かで水を反撥するに適して居る。常に河又は海に棲み、巧に水中を潛り魚を捕へて食する。彼の鵜飼といふのは此の習性を利用したものである。

烏

烏は燕雀類に屬する。全身黑色で光澤がある。常に人家に近き處に棲む。巢は森林などの高き樹上に營む。鳴官を有せず唯叫聲を發するのみである。好んで害蟲を餌とし、又人の棄てた塵芥に集つて、同類爭ひ食ふ。性敏捷で古から慈烏又は孝烏などと稱して居る。

第十六　おちよ　の　へんじ

要旨

本課は「父母・長者の命令には從順に服從すべし」といふ教訓をば一少女を借つて具體化した文章である。本文に於ける新文字・難語句の讀方・意義及び語法等の知識を與へて、之が讀解に習熟させると共に、本文に流れて居る教訓をよく體得實行せしむるを以て要旨とする。

教材

おちよ　は　今年　八つ　に　なります。
いつ　よばれて　も、「はい」と　はつきり　こたへます。
どんな　おもしろい　遊あそび　を　して　ゐる　とき　でも、よばれ　ば「はい」と　へんじ　を　して、すぐ　立つて　いきます。
何　を　いひつけられて　も、「はい」と　いつて、すぐ　とりかかります。
おちよ　は　いやさう　な　へんじ　を　したり、「はい」と　言つて　ぐづぐづして　ゐたり　する　やう　な　こと　は、けつして　ありません。
おちよ　は　がくかう　でも　大そう　よく　できます。

（新字）今年　立　何　言

區分

第一時　全文に於ける形式及び内容の教授。
第二時　全文の復習。
第三時　練習應用。

教具

お千代が友達と共に戸外に樂しく遊び居る掛圖。

教法

（甲）教授上の注意

一、本課は新に加へた文章である。父母より呼ばれた時は「はい」と返事をせよ。さうして直ちに行へよと云ふことが骨子になつて居る。この種の文章は、どこまでも眞面目に取扱つて、教訓の精神を徹底させ、常に實行するやう指導するがよい。之が修身的材料に對する取扱の本領である。

二、文字・語句・語法等に關しては大體次に示す範圍程度に從ひ、適切に取扱つて、其の讀み方、意義及び職能等を明確に意識させる。

「今年」―コトシと讀ませる。「今日」「今の月」「今の年」を既に過ぎた昨日・先月・去年及び次に來る明日・來月・明年と對照比較して其の觀念を明かにするがよい。

「なります」―「なりました」と比較して時の觀念を明かにする。

「いつ」―「いづれの時に」と同意味。副詞で下の「よばれて」を限定して居る。「いつきてみても」のやうに種々の場合に適用して其の意味を明かにする。

「よばれても」―誰が呼ぶかを明かにするがよい。茲では父又は長上といふことにして取扱ふ。且父母・長上はどんな場合に呼ぶかを知らしめるがよい。

「はい」―敬意を表する應答の聲であるが、ここでは父母・長上から呼ばれたときの返事の言葉として知らせる。

「はつきり」―具體的に聞かしめて之が意味を明かにする。

「どんなおもしろいあそびをしてゐるときでも」―「どんなおもしろいあそび」とはどんなあそびのことか。兒童の實驗に基き其の二三の種類をあげて說明するがよい。また「どんな」の適用にも習熟させる。

「よばれれば」―「よばれると」と同じ意味。此の語は適用と相俟つて其の意味・用法を明かにしなければならぬ。

「立つていきます」―「立」は新字であるから、其の讀み方・書き方を確實に知らしめる。また「立つていきます」とはどこに行くのか之も場合をあげて知らしめるがよい。

「何をいひつけられても」―どんないひつけであるか。之も二三の具體例をあげて說明するがよい。また「いひつけられて」の所動は「いひつける」の能動と比べて其の意味を明かにするがよい。

「とりかかります」―「爲し始める」又は「着手する」と其の意味同じ。即ち何か父母等から仕事を命じられたときは、すぐ其の仕事に着手する又は其の仕事をなしはじめると言ふ意味である。適用にも習熟させる。

「いやさうなへんじ」―之も實際の場合をあげて、此の抽象的返事の內容を明かにする。

「ぐづぐづし」―「はきはきせぬ」のである。適用と相俟つて意味・用法を明かにする。

「よくできます」―具體例をあげて之が內容を明かにする。

三、文章に於て着目すべき點は

1、呼ばれた場合の言行一致（(イ)「はい」とはつきりこたへます（言）。(ロ)すぐ立つていきます（行）。）

2、いひつけられた場合の言行一致（(イ)「はい」といつて（言）。(ロ)すぐとりかかります（行）。）

3、言行不一致の場合（(イ)いやさうなへんじをしたり。(ロ)はいといつてぐづぐづしてゐたり。）

の三點である。(1)と(2)とはお千代の性格を描き、(3)は反面から一層其の性格に光をそへたのである。而して(1)と(2)とは分離させないで、呼ばれたから「はい」といつて直ぐ立つて行く。行く

とそこに或る用事を命ぜられる。其の用事に對して毫も厭ふ色なく、「はい」と直ちに快諾して取掛るといふやうに連續させて取扱ふ。かうして取扱ふ所に生命がある。また(1)と(3)も連續させて取扱ふがよい。即ち呼ばれたから「はい」といつて直ぐ立つて行く。行つて見ると自分の氣に合はぬ用事である。「はい」と承諾したものの、いかにもいやさうな返事である。用事の遂行に對して愚圖々々して捗らせぬ云々と知らせる。こんな風に授けると其處に活々とした教訓に觸れしめることができる。「がくかうでも大そうよくできます」の點は内外照應したる性格の表現であるから、此の點も注意する。

四、本課は先づ本を開かしめて、各自に之を讀ましめ、分らぬ文字・語句等につき教授し、次に讀方の練習をなし、それから形式に即して内容を吟味し、最後に漢字・語句等の應用を課するといふ順序をとるがよい。

五、練習應用例

(一)漢字適用。

「今年」—ぼくは今年八つになりました。　君は今年いくつですか。　今年のなつはとりわけあつかつた。……等。

「立」—人が立つてゐます。　とりゐが立つてゐます。　田の中にかかしが立つてゐます。……等。

「何」—これは何の花ですか。　きみはそこに何をしてゐるのか。　あなたは何といふなですか。……等。

「言」—おちよさんは何か言つてゐます。　きみは今何と言つたのですか。

(二)語句の適用

「よばれても」—花子はどんなにおかあさんからよばれても、花をつんでゐてうごきません。

「はつきり」—ぶんきちはおれからものをとはれてもはつきりこたへます。

「よばれれば」—お竹さんは何をしてゐても、おかあさんからよばれれば、すぐ立つていきます。

「いひつけられる」—おとうさんからいひつけられたことは、すぐとりかからねばなりません。

「とりかかる」—ぼくはおかあさんのいひつけられることは、何でもすぐにとりかかります。

「ぐづぐづ」—ことをするときにぐづぐづしてはいけません。

「けつして」—けつしてうそを言つてはなりません。

(乙)教授の實際

第一時

一、先づ讀本を開かしめ、各自をして自由に一・二回讀ましめる。次に

二、彼等の知らない文字、分からない語句等につき應答する。また教師よりも主要な語句・語法等につき問答し、其の意味・用法・職能等につき理會を明確にする。次に

三、大意につき問答し、讀方の練習をなし、次に

四、形式に即して内容を吟味し、文中に流動する教訓に活かしめる。次に

五、時間に餘裕ある限り、個人的に又一齊的に朗讀させる。

第二時

一、先づ二三の兒童に讀ましめ、主要の語句・語法等につき問答し、次に

二、復演的に內容を吟味し、更に敎師の玩味する所も話して一層深く本文の內容を理會させ、實行を鼓舞する。次に

三、對話式に朗讀の練習を課し、終つて主要語句及び漢字を口唱して書取らしめる。

第三時

一、復習

二三の兒童に讀ましめる。內容につき吟味する。

二、練習應用

(一)漢字の適用。

「今年」「立」「何」「言」……等(適用例は敎授上の注意の部參照)

(二)假名遣の練習。

「こたへます」「何をいひつけられても」「いやさうなへんじ」「ぐづぐづして」「がくがう」……等。

(三)語句の應用(短文作爲)

「よばれても」「はつきり」「よばれれば」「いひつけられる」「とりかかる」「ぐづぐづ」「けつして」……等(應用例は敎授上の注意の部參照)

第十七　大キナ　カブ

要旨

本文は乙なる一人が甲なる一人をうまく騙して後で笑つてやらうと工んだ嘘が、却つて甲なる一人に其の裏をかかれて大いに赤面したといふ一種の可笑的文章である。本文は一方に於ては新文字・新語句の讀み方・意義及び語法等につき授けて、之が讀解に習熟させ、他の一方に於ては、自分の張つた嘘の係蹄に人はかからず、却つて人の張つた係蹄に自分が引掛つて赤面したといふ其の面白味に對してどつと笑はしめるといふ所に要旨を置いて取扱ふ。

教材

二人ノ　ワカイ　男ガ　カブバタケノ　ワキ　ヲ　トホツタ　トキ、一人ガ

「アノ　カブハ　大キイ　デハ　ナイ　カ。」

ト　言ヒマス　ト、一人ガ

「ボク　ハ　ズツト　大キナ　ノ　ヲ　見タ　コト　ガ　アル。　アノ　牛ゴヤ　ホド　アツタ。」

ト　イヒマシタ。　甲　ノ　男、

「大キナ　モノ　ト　イヘバ、ボク　ハ　アル　トキ　ナベ　ヲ　コシラヘル　手ツダヒ　ヲ　シタ　ガ、ソノ　ナベ　ノ　大キサ　ハ　向フ　ノ　タメイケ　ホド　アツタ。」

ト　言ヒマシタ。　乙　ノ　男　ハ　ワラツテ、

各說　第十七　大キナ　カブ